

へぐ(折) あふぐ(仰) さわぐ(騒) いそぐ(急)
かしぐ(炊) かせぐ(稼) すしぐ(濯) ふせぐ(防)

二、波行四段活用の連用形は音便「ウ」に變ず。

(ヒ)人々争うて難に赴く。

流行を追うて華美に流るゝなかれ。

かくの如きものを「ウ」音便と稱す。即この時にはその連用形の「ヒ」が音便によりて「ウ」となるものなり。

三、波行四段の濁音にて活用するもの、及麻行四段活用四段別格の連用形は「ン」となりて、下の「テ」を濁らすことあり。

(ビ)飛んで火に入る夏の蟲。

(ミ)夕には月を踏んでかへる。

(ニ)死んで謝するより道なし。

かくの如きを名づけて「撥音便」といふ。撥音便は波行四段の濁音にての活用、及麻行の四段、四段別格の連用形即「ビ」「ミ」「ニ」に接する時あらはるゝものなり。次に波行四段の濁音にて活用するものゝ例をあぐ。

あそぶ(遊) およぶ(及) ころぶ(轉) さけぶ(叫)
まなぶ(學) むすぶ(結) むせぶ(噎) はこぶ(運)

うかぶ(浮)

四、多行四段、波行四段、良行四段の動詞及存在動詞、形容動詞の連用形は「て」につづく時に促音となることあり。

(チ)勝つて兜の緒を締めよ。

(ヒ)誓つてこの耻を雪がん。

(リ)凝つては百鍊の鐵となる。

(リ)命あつての物種。

かくの如きものを促音便といふ。即この時には「チ」「ヒ」「リ」の三音に行はるゝなり。波行四段の動詞にて促音便となりうべきものを左にあぐ。

あふ(逢) いふ(言) くふ(食) あらふ(洗) うばふ(奪) かまふ(構) きそふ(競)
くらふ(食) ならふ(習) ねらふ(狙) はらふ(拂) ひろふ(拾) ふるふ(振) もらふ(貰) わらふ(笑) うやまふ(敬)

このうち方言にのみいふものあり。文語に用ゐるものは比較的にかからず。今この音便を概括すれば、「イ」音便、「ウ」音便、撥音便、促音便の四種を見る。これが動詞にあらはるゝには四段活用及存在動詞にあらはる。これを各の音便にて區別するときは左の如し。

活用 連用形 用例 音便の種類

カ行四段	キ	行いて	イ音便
同	ギ	仰いで	同
タ行四段	チ	勝つて	促音便
ハ行四段	ヒ	争うて	ウ音便
同	ビ	誓つて	促音便
同	ミ	遊んで	撥音便
マ行四段	リ	讀んで	同
ラ行四段	リ	取つて	促音便
四段別格	ニ	死んで	撥音便
存在動詞	リ	有つて	促音便
		よかつて	

これらのうちハ行四段のウ音便は柔軟の風ありて方言としては主として關西地方に行はるゝものなり。

この音便は現在の話語に普通に行はるゝものなるが次に参考の爲二三の例を「た」につゞくるものにつきてあぐ。

「イ音便」話をきいた。
船をこいだ。

ウ音便

今そこで萩野にあうた。
君によろしくというた。

撥音便

荷を運んだ。
今新しい水を汲んだ。

促音便

去年病氣で死んだ。
をかしかつたから笑つた。

櫻の花がもう散つた。

庭の草をかつた。

おもしろい事もあつた。

中古にては「ぬ」「つ」「たり」「し」「けり」につゞくる時にも音便行はれたりしなり。これも亦次に略説す。

中古に於ける動詞の「イ音便は」「つ」「き」「たり」につゞくる時に起れる例をみる。

加行のもの

めづらしく心にくくなまめいてみゆ。

しさまもいとからめいたり。

左行のもの

宮のしきにおはしまいしにまゐりて。

(紫式部日記)

(紫式部日記)

(枕草子)

おしはない。いふもされたり。

(堤中納言物語)
(紫式部日記)

「ウ」音便は「つぬきけり」たりにつづくる時にあらはる。

(狭衣物語)

うちすてたまうつ。

(宇、初秋)

ものしたまうぬるを。

(宇、國讓下)

はし近うながめたまうけるさまながら。

(源、濬標)

加茂に詣でたまうたりしかば。

(宇、俊蔭)

撥音便、促音便は今昔物語などに見え初めたり。

各ノ弓ヲ引テ箭ヲ放ツテ馳セ違フ。

父母此レヲ見テ泣悲ム。テ追ヒ取ラムト爲ルニ。

但これらの委しき事は別に述べべき筈なればこゝには略することとす。ただ注意すべきは、古き時代の音便は今日のものよりも頗自由なるものなることなり。今日に於いて、かく「ぬけり」などに音便にてつづくるは破格と見らるべき程のものなり。

二 複語尾と複語尾との連接

複語尾の名活用は又更に複語尾を所屬とすることあり。その間にも亦一定の法

則あり。今概略をのべむ。

(一) 間接作用の複語尾をうくるもの。

第一 間接作用をあらはす複語尾は相互に承接することあり。その形次の如し。

上	下	らる	さす	しむ
る	らる	れさす	れさす	れしむ
らる	せらる	られさす	られさす	られしむ
す	させらる	せさす	せさす	
さす	しめらる	しめさす	しめさす	
しむ				

「れさす」これに種々の意義あり。「れ」はいつも受身をあらはすが「さす」は「られさす」干與の場合と敬意の場合とあり。

(受身—敬意)

いだかれさせたまひて。

まづ戀しう思ひ出でられさせたまふに。

(受身—干與)

見られさす。

「れしむ」 この時も亦「れ」はいつも受身をあらはし「しむ」も亦命令をのみ

「られしむ」 あらはす。

撃たれしむ。

「せらる」 これは共に敬意をあらはすものと、上が干興にして下が敬意をあら

「させらる」 はすと受身をあらはすとあり。

(敬意)

殿下は微笑を含ませられ、軽くうなづかせられたり。

(干興—敬意)

御笛たびて吹かせられける。

(干興—受身)

あるかせらる。

「せさす」 上なるは干興をあらはし下なるは敬意をあらはす。

御硯おろしてかゝせさせ給ふ。

人々に歌詠ませさせ給ひける時。

「しめらる」 これは上なるはいつも使命令をあらはし下なるは敬意をあらはすもの

と受身をあらはすものとあり。

(使令—敬意)

かくせしめられたる事あるまじき事なり。

(使令—受身)

行かしめらる。

「しめさす」 この際には上なるは使命令をあらはし下なるは敬意をあらはすもの

なり。

(使令—敬意)

法皇忠盛に仰せて射しめさせたまふ。

第二、間接作用をあらはす複語尾は統覺の運用を助くる複語尾の下に附属す

ること決してなし。

第三、統覺の運用を助くる複語尾はすべて屬性の作用を助くる複語尾の下に

附属することぞう。

未然形附属のものは非現實性の複語尾なり。

	上	下			
る	む	まし	ず	じ	ざり
れむ	れまし	れず	れじ	れざり	

らる	られむ	られまし	られず	られじ	られざり
す	せむ	せまし	せず	せじ	せざり
さす	させむ	させまし	させず	させじ	させざり
しむ	しめむ	しめまし	しめず	しめじ	しめざり

「る」をうけたる例。

幸に閣下たちのそれを許されむことを乞ふ。

再三熟考せよ。その眞意は理會せられむ。

かすならば世にしられまし世のうさを人のためにもぬらす袖かな。

世にかゝる平和のまた多かるべしとも思はれず。

何事も仰せられず。

長くとまでは惜まれじ身を。

はづかしく心づきなき事は御らんせられじとおもふに。

「す」をうけたる例。

救ひまゐらせむ道なし。

捕へさせむと申す。

いかにしなさむと安からずいぶかしがらせましものをとねたければ。

宮わたりにやきこえさせまし。

危険なりといふまもあらせずはや列車近づきぬ。

まかでさせねばいみじう怨すらむかし。

とほき所にはさらにすませじ。

などかはまゐりこぬとはきこえさせざりし。

「しむ」を受けたる例。

かくまで人を感せしめむとは思ひよらざりき。

梅の花ちりすぐるまでみしめすありける。

さる事はせしめじ。

余は決してかゝる事をせしめざるなり。

連用形附屬のものは回想の複語尾と確述の複語尾となり。

る	上	回	想	確	述	
	下					
れき	き	けり	けむ	ぬ	つ	たり
れけり	れけむ	れぬ	れつ	れたり		

らる	られき	られけり	られけむ	られぬ	られつ	られたり
す	せき	せけり	せけむ	せぬ	せつ	せたり
さす	させき	させけり	させけむ	させぬ	させつ	させたり
しむ	しめき	しめけり	しめけむ	しめぬ	しめつ	しめたり

「る」を受けたる例。

戦を挑まれしかば遂に干戈を交へき。

封建時代には實業の輕視せられし事甚しかりき。

種々に公勞をつくされけり。

速に轉地療養あらむことを勧められけり。

いかに口惜しくおもはれけむ。

郊外の秋色も思ひやられてうれし。

ゑかにまゐれと仰せられつれば。

俊蔭がふねははし國にはなたれぬ。

さるほどに綱方やみて卒去せられぬ。

此字はあしくかゝられたり。

遂に男爵を授けられたり。

「す」を受けたる例。

いかゞはせましと思ほし煩ふとなむのたまはせし。

一所などきこえさせしかば。

ゆふさはかへりてそこにこそせけり。

いかに思ひてかゝる事をさせけむ。

あさな／＼なききかせつる鳥をころせば。

晝も御返きこえさせつれば。

舍人めしてひそかにすてさせぬ。

頼朝義經をして義仲をうたせたり。

白銀を腹ふくらにいさせたり。

「しむ」をうけたる例。

己が意匠を示して之によりて茶入をやかしめき。

人をして捨てしめけり。

いかせにしめけむ。

しもべして取りに行かしめつ。

數年の後までもたえず新しき記憶を我にひき起さしめぬ。

余をしてすゞろに懷舊にたへざらしめたり。
推量の複語尾はその原形に附せらる。

上 下	べし	べかり	めり	らむ	らし	まじ
る	るべし	るべかり	るめり	るらむ	るらし	るまじ
らる	らるべし	らるべかり	らるめり	らるらむ	らるらし	らるまじ
す	すべし	すべかり	すめり	すらむ	すらし	すまじ
さす	さすべし	さすべかり	さすめり	さすらむ	さすらし	さすまじ
しむ	しむべし	しむべかり	しむめり	しむらむ	しむらし	しむまじ

「る」らるを受けたる例。

熱心に業務を勵まるべし。

急がば今日中に行きつかるべし。

その人は慰めらるべければなり。

その事をなんかしこにもいといみじくなげかるめる。

なほこそものせらるめれ。

おそろしところおぼさるらめ。

物思ふごとにながめらるらむ。

たとへかくなしたりと叱らるまじ。

こそ尋ねらるまじきものなり。

「す」さすを受けたる例。

琴つかうまつらすべし。

きこえさすべき事なんある。

みだりに人をとこそきこえさすめれ。

よそにみても見くるしきものにきこえさすらむ。

人にきかすまじと侍ることを。

人の思ひ侍らむ事の耻かしきになむきこえさすまじき。

「しむ」をうけたる例。

實業をして盛ならしむべし。

學生をして放縦ならしむまじきとなり。

(二) 統覺を助くる複語尾

統覺の運用を助くる複語尾は間接作用の複語尾の上にあることなし。而その下に附屬すること前項の第三にて説けるが如し。其の相互間に於けるものは次に説

ける如く種々の状態あり。これにつきては、陳述の確めをあらはす「つ」「ぬ」と、「たり」「めり」の如く存在動詞の形に似たるものとを特に説くべき必要を認む。即これらは他の複語尾を下に接せしめうるものなり。而この二種の外の複語尾は他の種の複語尾の上に接することなし。

第一、存在動詞の性あるものとは、回想の「けり」打消の「ざり」確述の「たり」推量の「めり」「べかり」「まじかり」の六なり。

これらの複語尾は皆その承接上に特種の状況あれば個々にとくべし。「ざり」は打消をあらはすものなるが故に「ず」「まじ」に接することなし。なほ「たり」の接したる例をみず、而特に注意すべきはこれより使令の複語尾「しむ」に接することあり。この性質はこれと「べかり」との他に「見ざる」なり。思ふに、この「ざり」はなほその「あり」の意義残存して他の「たり」「けり」の如きものとは大に異なるものならむ。されば、これをうけたるを以て、直に統覺の複語尾を屬性の複語尾にてうけたるものといふべからず。その承接は次に表示す。

「たり」は「たり」「ざり」の外すべての統覺の複語尾を伴ふものなり。

「べかり」は「たり」「べし」の外すべての統覺の複語尾を伴ふ外に「しむ」を伴ふことあり。

こは既に述べし「ざり」に似たり。

「まじかり」は「たり」及「まし」「す」「じ」「ざり」の外の複語尾を伴ふなり。

「けり」は僅に「らし」につくくるのみなり。

「めり」は「つ」と「き」とを伴ふのみなり。次に表をかゝぐ。

未然形をうくるもの。

上	下	しむ	む	まし	ず	ざり	じ
ざり	ざらしむ	ざらむ	ざらまし				
たり		たらむ	たらまし	たらず			たらじ
べかり		べからむ	べからまし	べからず	べからざり	べからじ	
まじかり		まじからむ					
めり							

「ざり」を受けたる例。

人をして驚嘆にたへざらしむ。

誰かその精力の絶大なるに驚嘆せざらむ。

夢としりせばさめざらましを。

「たり」を受けたる例。

深山に夜をあかしたらむには恐しき事もあらむ。

汝ら龍を捕へたらまし**かば神おちかゝりぬべし**。
 かきあつむるも定め**たらす**。

(保憲女集)

「べかりをうけたる例」

かやうなるやこれにかなふ**べからむ**。
 しなくしうをかしげなる事田舎の人といふ**べからす**。
 こは實に争ふ**べからざる**事實なり。

「まじかりをうけたる例」

みかどにて子をもたらむ**め**でたくもある**まじからむ**。(宇、樓上、上)
 連用形をうくるもの。

	上	下							
けり	ざり	たり	べかり	まじかり	けり	けむ	ぬ	つ	たり
	ざりき	たりき	べかりき	まじかりき	ざりけり	ざりけむ	ざりぬ	ざりつ	
					たりけり	たりけむ	たりぬ	たりつ	
					べかりけり	べかりけむ	べかりぬ	べかりつ	
					まじかりけり	まじかりけむ	まじかりぬ	まじかりつ	

めり	めりき					めりつ	
----	-----	--	--	--	--	-----	--

「ざりをうけたる例」

かくまで人を感せしむとは思ひよら**ざりき**。
 數日の間一人だにもあは**ざりけり**。

なかばかくしたりけむもえかうはあら**ざりけむ**かし。

前々モ狭キニ依リテ不取ザリケル也ケリト不取ザリス。(今昔物語三十一)

悲しさのなぐさむ**べく**もあら**ざりつ**。

「たりをうけたる例」

予は羅馬の廢墟に坐して夕暮の景色を眺め**たりき**。
 萬の蟲どもをかたらひて入**れたりける**なり。

なかばかくしたりけむもえかうはあら**ざりけむ**かし。

年月経たりぬれどあ**かざり**し夕顔をつゆ忘れた**まはす**。(源、玉、葛)

上に引きたりつる墨さへ消え**たる**。

「べかりを受けたる例」

やがて一日にきうか**べたまふべかりき**。
 おとにぞ人をきく**べかりける**。

「まじかり」を受けたる例。

まゐるまじかりしをせちにのたまひしかば、

なきあとまで人のむねあくまじかりける人の御覺えかな。

「めり」を受けたる例。

のたまふめりき。

御供に童一人ぞ候ふめりし。

いとめやすくもてなしたまふめりつるかな。

連體形をうくるもの。

					上	下
め	け	まじかり	べかり	たり	ざり	べし
り	り	べし まじかる		たるべし	ざるべし	べかり
					ら	ざるべか
		めり まじかる	り べかるめ	たるめり	ざるめり	めり
		らむ まじかる	む べかるら	たるらむ	ざるらむ	らむ
		らし まじかる	し べかるら	たるらし	ざるらし	らし
				たるまじ		まじ
						まじかり

さてこの連體形をうけたるものは中古に於いては、その複語尾の上なる「音」を省き去ること多し。而、實例を徴するに其の形の方本來のものよりも多くあらはれたり。次に之をあはせあぐ。

「ざり」をうけたる例。

素より佛國の敵にあらざるべきなり。

前途有望なりといはざるべからず。

などなき人の歸らざるらむ。

しほみつうらはこほらざるらし。

この頃となりてはたとごとにも侍らざめり。

「たり」を受けたる例。

さなりたるべし。

昔だに人まどはし給ひし御こといかになりたるらむ。

いきたるまじき心ちするは。

さしぬきなどふみちらしてゐためり。

「べかり」を受けたる例。

いくしほとかはしるべかるらむ。

人々のぞくべかめり。

(蜻蛉日記)

(宇沖つ白波)

(蜻蛉日記)

「まじかり」を受けたる例。
さしも思ひよるまじかめり。

(源 橋 姫)

かくの如くにして「る」を省くものは「めり」の上にあらはるゝこと多し。
「けり」を受けたる例。

しのびて心かはせる人ありけらし。

この時は「けるらし」といふはなくして常に「けらし」と用ゐられたり。

第二、陳述の確めをあらはす複語尾は上にあげたる「あり」の形式を有するもの以外のものに附屬することなきものなるが、たゞ「つ」の連用形なる「て」といふ一形のみは打消の複語尾「ず」をうけて「すで」といふ形を呈することあり。

君こそすて年はくれにき。

けたすて玉にぬくものにもが。

第三、陳述の確めの複語尾相互間には「ぬ」を上にして「て」「たり」を下にしたるものあるのみなり。しかもこは古代の語法なりとす。

上	下
(ぬ)の連用形に	(つ)の連用形て
にて	たり
	にたり

わびにて侍りつる。

荒れにたる宿のならひとて洩る月影ぞ隈もなき。

第四、陳述の確めをあらはす複語尾は他の統覺の連用を助くる複語尾を下に屬せしめうるなり。但、一二の特例あり。即、否説の複語尾に於いて「じ」は全く屬せず、「ず」は連體形の附屬せる例を古代にみるのみなり。否説推量のは全く屬せず。その關係を表示すれば次の如し。

下	未	然	形	に	連	用	形	に	原	形	に
上	む	まし	ぬ(ず)	き	けり	けむ	べし	べかり	めり	らむ	らし
つ	てむ	てまし	てぬ	てき	てけり	てけむ	つべし	つべかり	つめり	つらむ	つらし
ぬ	なむ	なまし	なぬ	なき	にけり	にけむ	ぬべし	ぬべかり	ぬめり	ぬらむ	ぬらし

「てむ」

如何ならむ世にもかばかりあせ果てむとは思してむや。

「なむ」

真中さして射透し候ひなむ。

「てまし」

身は徒になるともとりやくくしてまし。

「なまし」

たとひ運の極みなりとも都にていかにもなり給ひなまし。

「てぬ」「すね」につける例をみす。

かくながら散らで世をやはつくしてぬ。

「なぬ」「すね」につける例をみす。

道知らでやみやはしなぬ。

「てき」

參議百川謀をめぐらして定め申してき。

「にき」

そのまつりを始められにき。

「てけり」

御ぐしおろし給ひてければ。

「にけり」

この枝かの枝散りにけり。

よの中にあらましかばと思ふ人なきがおほくもなりにけるかな。

「てけむ」

手すすみに火桶のおきやわりてけむ。

「にけむ」

夏山にこひしき人や入りにけむ。聲ふりたてゝなく郭公。

「つべし」

海をさへ驚して浪をも立てつべし。

「ぬべし」

今の世の有様昔になぞらへて知りぬべし。

「つべかり」

さるさはの池の玉もはみつべかりけり。

「ぬべかり」

ほどくゝゑみぬべかりしに。

「つめり」

をのこゝははかなくて失ひつめり。

「ぬめり」

夜もふけぬめりやとそゝのかしたまふ。

「つらむ」

思ひつゝぬればや人のみえつらむ。

「ぬらむ」

(枕草子、四)

吉野山みねの櫻やさきぬらむ。

「つらし」

天つ風こそふきてきつらし。

「ぬらし」

さよ中と夜はふけぬらし。

第五 「ずて」といふ複合の複語尾は音の約めによりて「で」といふ一種の形を生ぜり。この「で」は従来一の助詞と見られてありといへどもそは一種の熟語的複語尾にして其の用法すべて「つ」の連用形の特性を有す。即連用形の各種の用法をなす。

重文をつくるもの

櫻ちるこの下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける。
をかしく思召しければえ腹立たせ給はで天皇もいみじく笑はせ給ひけり。
連用語をなせるもの

人に知られでくるよしもがな。

二つなき物と思ひしを水底に山の端ならで出づる月かけ。

上のものをば更に副助詞係助詞にてうくるに注目すべし。

さらでだに鶏人曉を唱ふる聲明王の眠を驚かす程にもなりければ。

思ふこと成らでは世の中に生きて何かせむ。
ねてもみゆねでもみえけり。

第六 第五に説ける「で」が更に確述の複語尾「ぬ」の未然形「な」をうけて「なで」といふ形をとることあり。この時も亦連用形の各の用をなす。

一、重文をつくるもの

つらからば戀しき事は忘れなでそへてはなどかしづ心なき。

うきよにはゆきかくれなでかきくもりふるは思ひの外にもあるかな。

二、用言に連ぬるもの。

かひもなき草の枕におく露の何に消えなで落ちとまるらむ。

藻汐やく蟹の磯屋の夕烟立つ名も苦し思ひ絶えなで。

ぬれたる衣だにぬぎかへなでなんこちまうできつる。

(三) 複語尾多数の連結

以上説きたるは複語尾二個の連続なるがなほ三個以上の連続せるものあり。今これらの研究を試みむとす。

今この研究につきてその連続の系統を求むるにまさに次の如し。

第一、陳述の確めをあらはすものよりの系統。

第二、存在動詞の性を有せるものよりの系統。

第三、屬性の作用を助くるものよりの系統。
先陳述の確めをあらはすもの、系統に屬するものにして先にあげたる二個連續の下に更に接しうべきものは、「べかり」「めり」「たり」にて終れるものにして其の他はみなそれより下に更に複語尾を伴ふことなし。

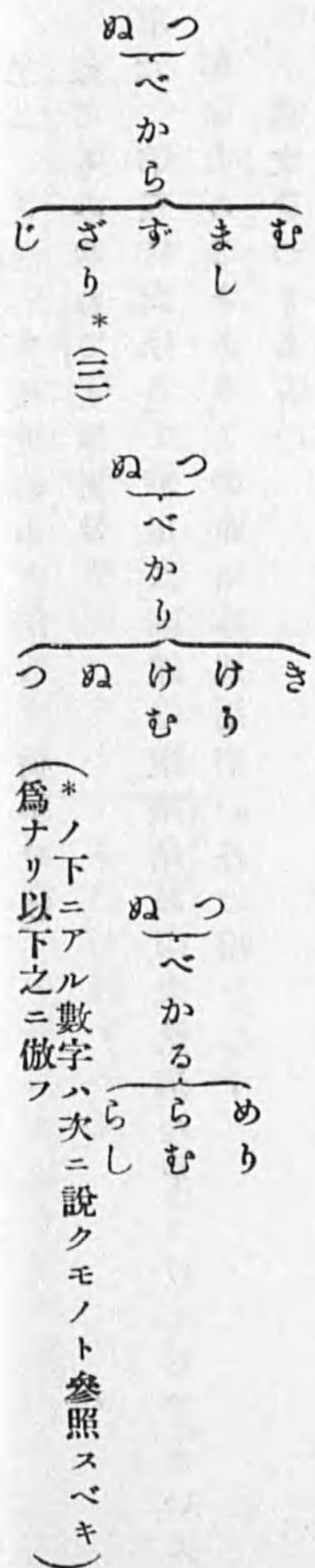
一、「ぬめり」「つめり」は下に回想の「き」を附屬せしめうべし。その他のものは附せしむることなし。且、又その下に更に他の複語尾を附せしむることなし。

「ぬめりき」の例。

一人はいたづらになりぬめりき。

「つめりき」の例は未發見せず。

二、「つべかり」「ぬべかり」はこれに更に、複語尾を附しうるものなり。この時は「べかり」よりしてその系統を第二の系統にうつしたるものなり。而「べかり」は既に述べたる如くなるによりてこの系統に於いては次の如き形を呈すべし。



今これらに屬するものゝ例を次にあぐ。

哀といひつべからむ事一ついはんとなん思ふ。

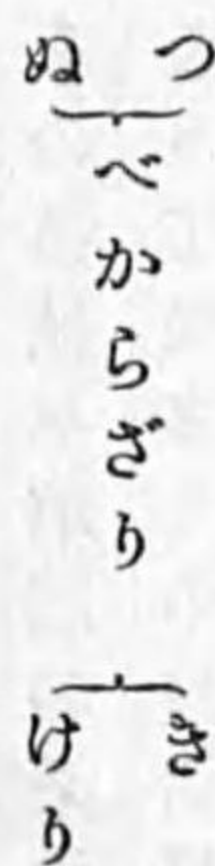
さるさはの池のたまもはみつべかりけり。

昔はさてもはべりぬべかりし。

ほとくゝゑみぬべかりし。

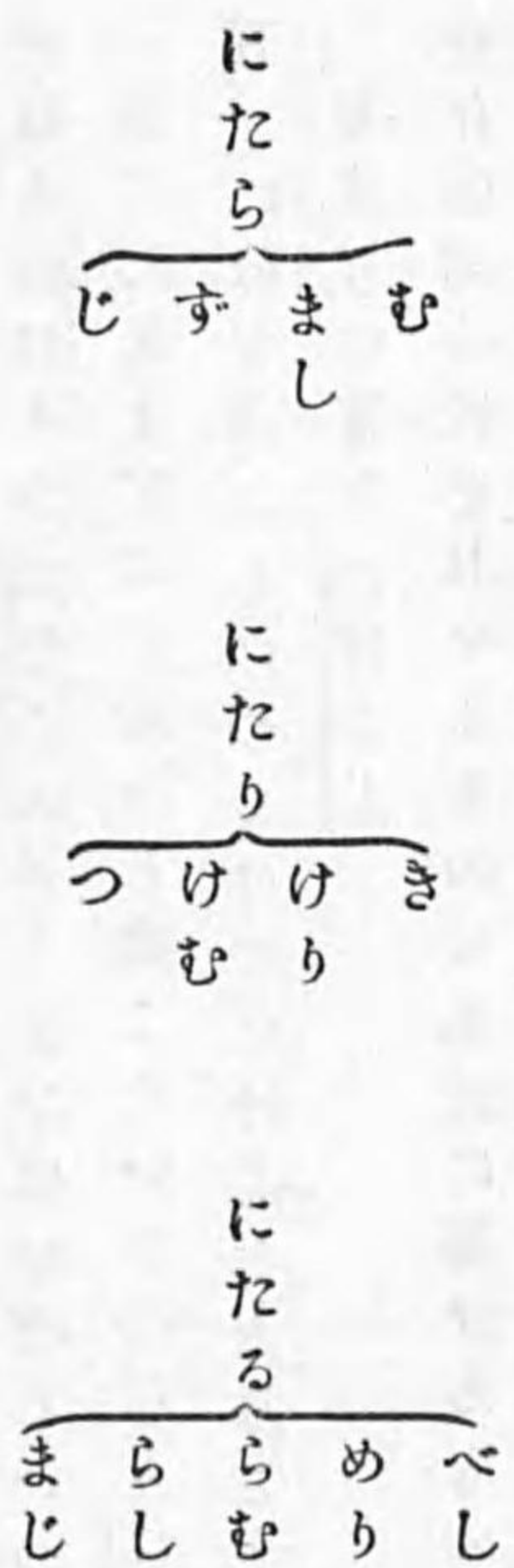
さしもあらでありぬべかりける人も。

三、二のうち「ざり」を下につけたるものは更に下に「き」「けり」を附して次の如くすることあるべし。



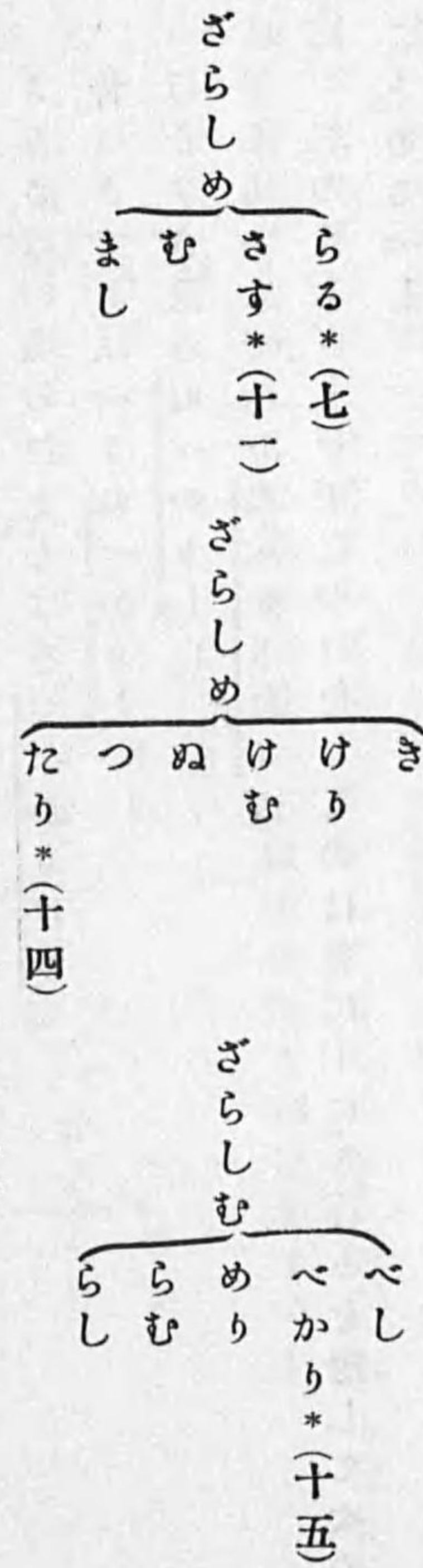
但その實例には未接せず。

四、「にたり」は又下に「たり」附屬の複語尾を附せしめう。



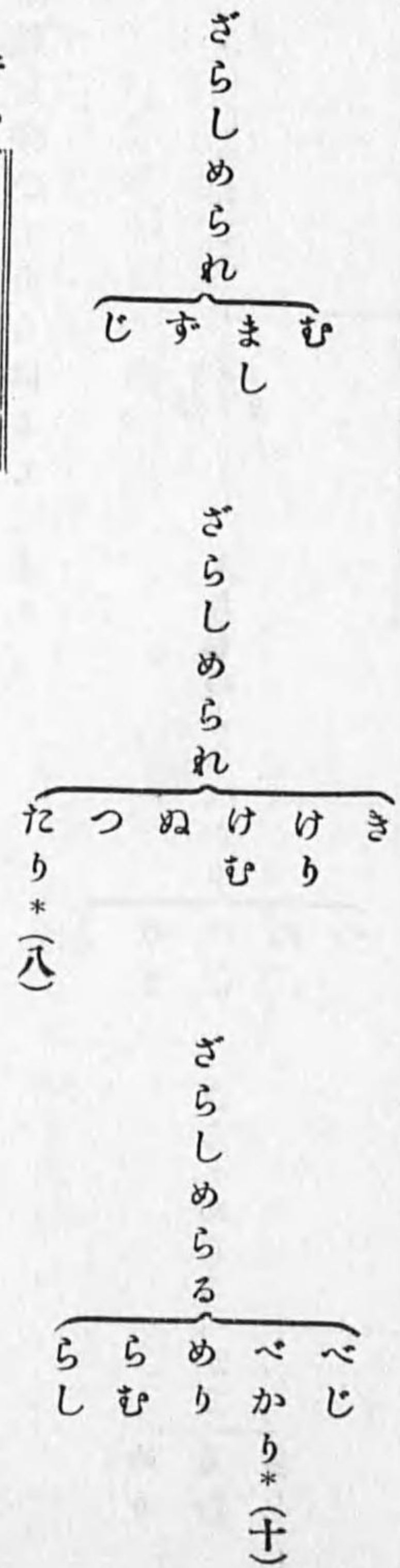
わすれたまひにたらめどこよひはおほしいつや。
昔だに人まどはし給ひし御こといかになりたるらむ。
五、「にけり」は「らし」につけて「にけらし」となることあり。
春すぎて夏きにけらし。

存在動詞の性を具せるものゝ系統に属せるものは「ざらしむ」さるべかり「べからざり」の外は下に複語尾を附せしむることなし。
六、「ざらしむ」はこれに更に複語尾を附しうるものなり。而この時は「しむ」よりしてその系統を第三の系統にうつしたるものにして「しむ」は既に述べたる如くなるによりて又多くの複語尾を伴ひうべし。



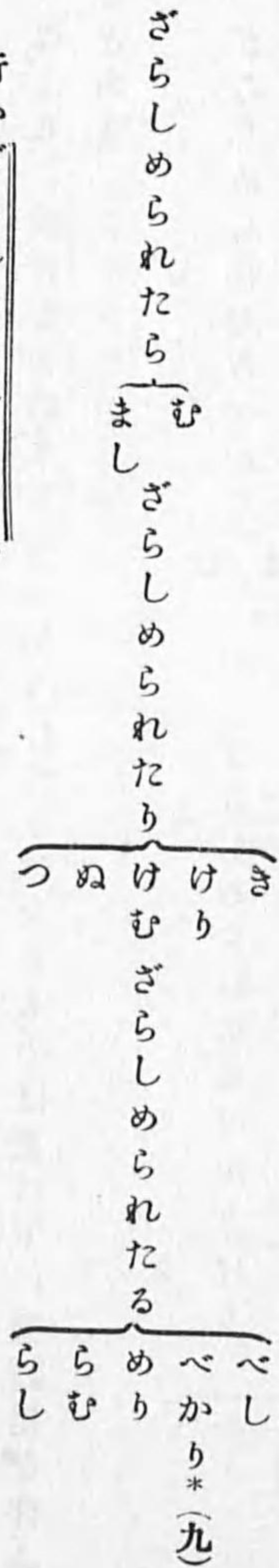
これらの用例は一々あぐる繁にたへず。次に二三をあぐ。
人をして殆んど蕭條の氣に堪えざらしめむとす。

かれをしてその所に行かざらしめけり。
余はその事を彼に行はざらしむべし。
七、「ざらしめらる」はその「らる」に属する複語尾を下に伴ひうべし。



行かざらしめられむ。
行かざらしめられたり。

八、「七」に説けるうち「たり」にて終れるものも亦更に複語尾を伴ふことあり。



行かざらしめられたらむ。

九、「八」に説けるものゝうち「べかり」にてうけたるものは更に下に複語尾を伴ふことあり。

ざらしめられたるべからむ
まし

ざらしめられたるべかり
けり
けむ

行かざらしめられたるべからむ。

十、「七」に説けるものゝうち「べかり」にて終れるものも亦その「べかり」に属する複語尾を伴ひてあらはるゝことあり。

ざらしめらるべからむ
まし

ざらしめらるべかり
けり
けむ

ざらしめらるべかるべかり
めり
らむ
らし

行かざらしめらるべからむ。

十一、「六」とける「ざらしめさす」も亦その「さす」に接しうべき複語尾を下に伴ふことをうべし。

ざらしめさせ
む
まし
じす

ざらしめさせ
けり
けむ
けむ
つぬ
たり*

ざらしめさす
べかり
めり
らむ
らし
まし
べかり*(十三)

行かざらしめさせむ。

行かざらしめさせたり。

十二、「十一」に説けるものゝうち「たり」にて終れるものも亦然り。

ざらしめさせたり
む
まし
じす

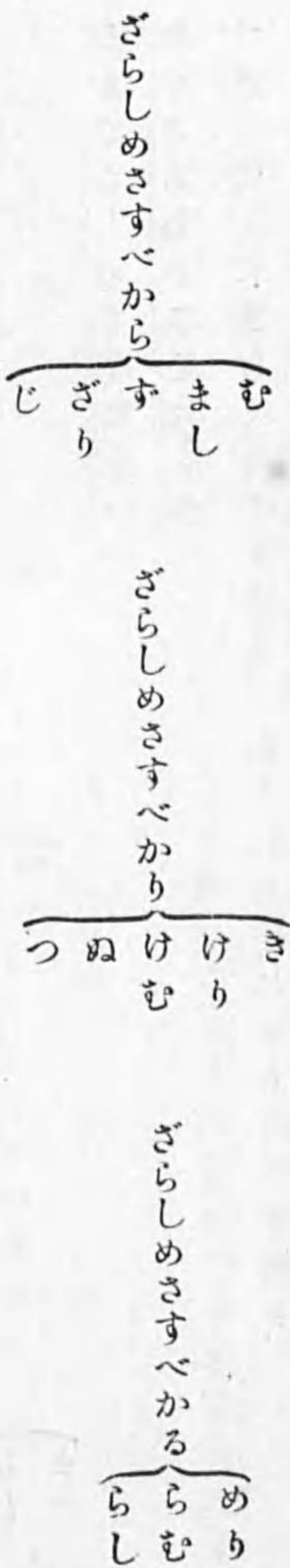
ざらしめさせたり
けり
けむ
けむ
つぬ

ざらしめさせたる
べかり
めり
らむ
らし
まし
べかり

行かざらしめさせたりむ。

行かざらしめさせたりき。

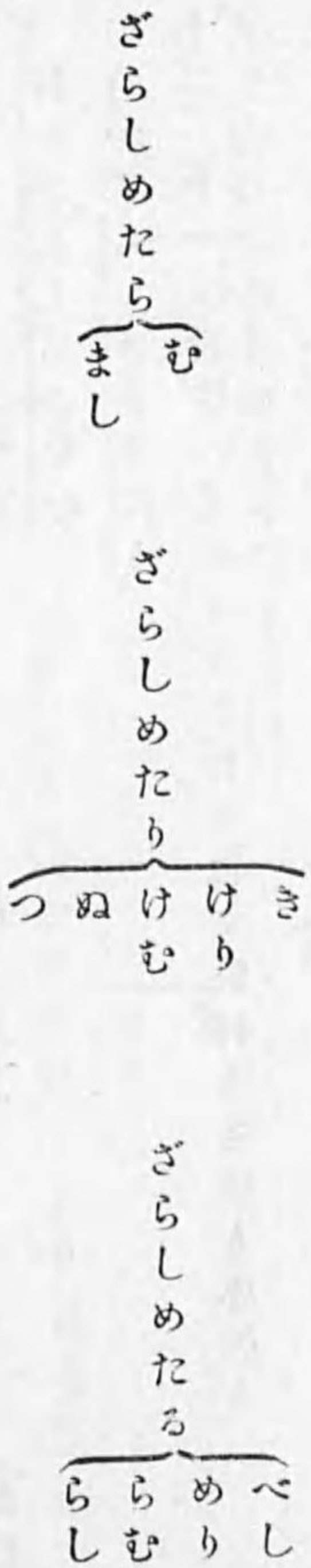
十三、「十一」に説けるものゝうち「べかり」にて終れるものも亦然り。



行かざらしめさすべからむ。

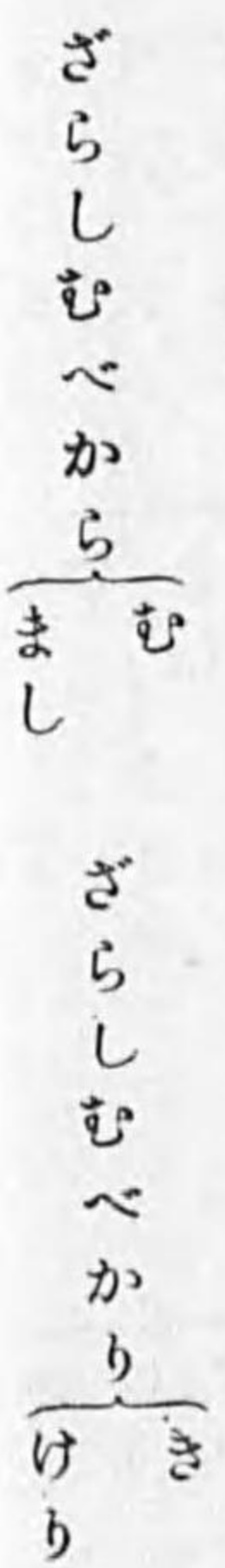
行かざらしめさすべかりき。

十四、(六)のうちの「ざらしめたり」は又その「たり」に屬する複語尾を伴ふことあり。

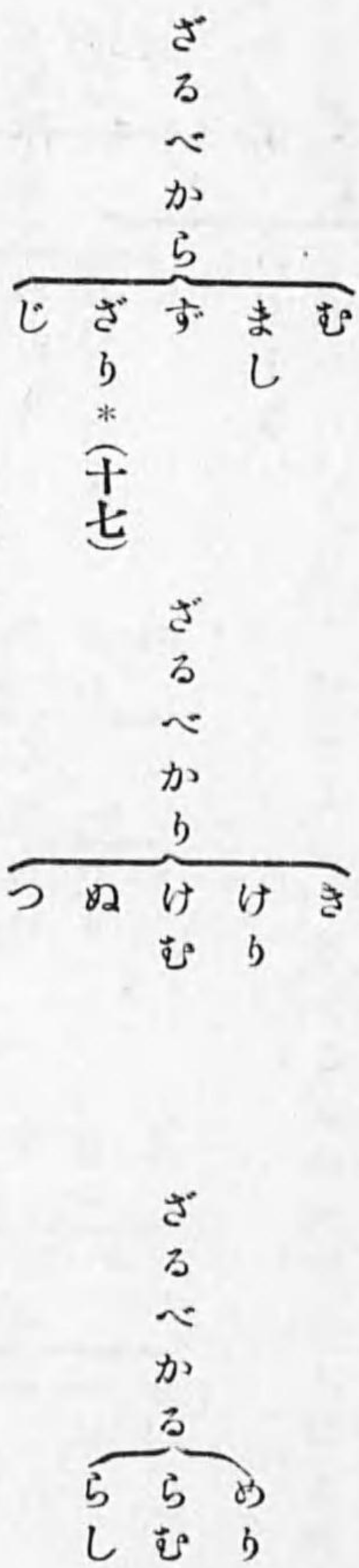


行かざらしめたりき。

十五、「六」のうちの「ざらしむべかり」は又その「べかり」附屬のものを伴ふことあり。



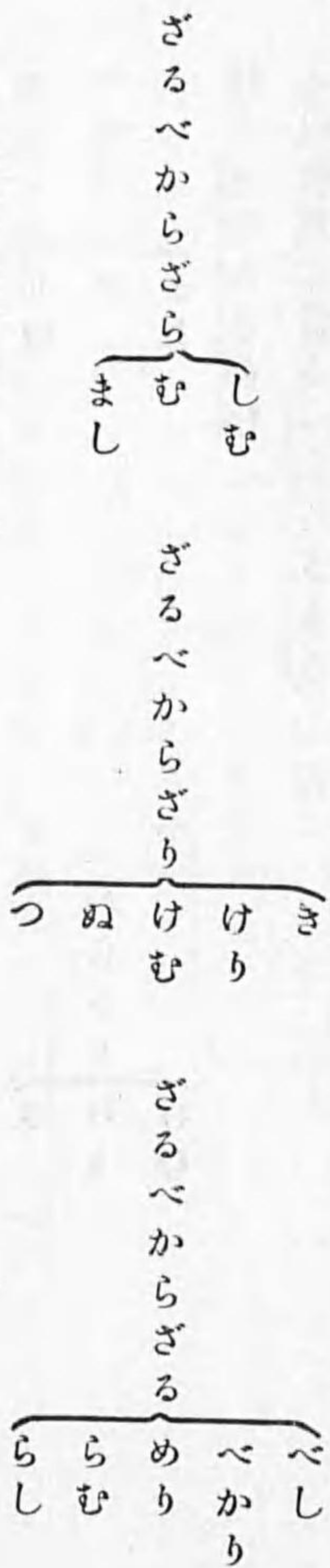
十六、「ざるべかり」はその「べかり」よりして、更に、その系統に屬する複語尾を接せしめうべし。



今は公には「遵はざるべからざる」法律あり。

恩を受けては必ず報いざるべからざるなり。

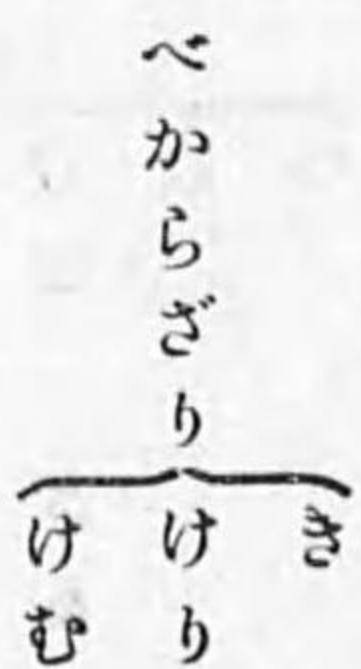
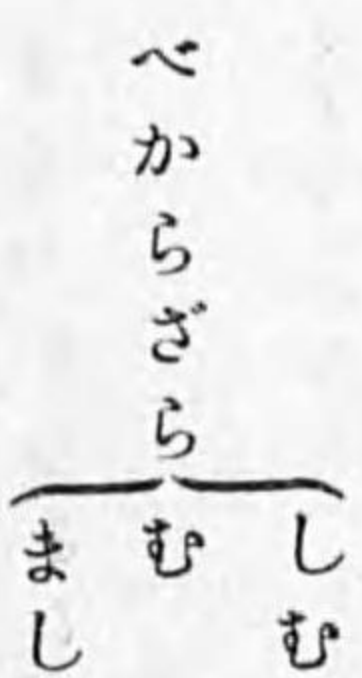
十七、「ざるべからざり」は又下に複語尾を伴ふことあり。



遵はざるべからざらむ。

遵はざるべからざりけり。

十八、「べからざり」はその「ざり」よりして更にその系統に属する複語尾を接せしめうべし。

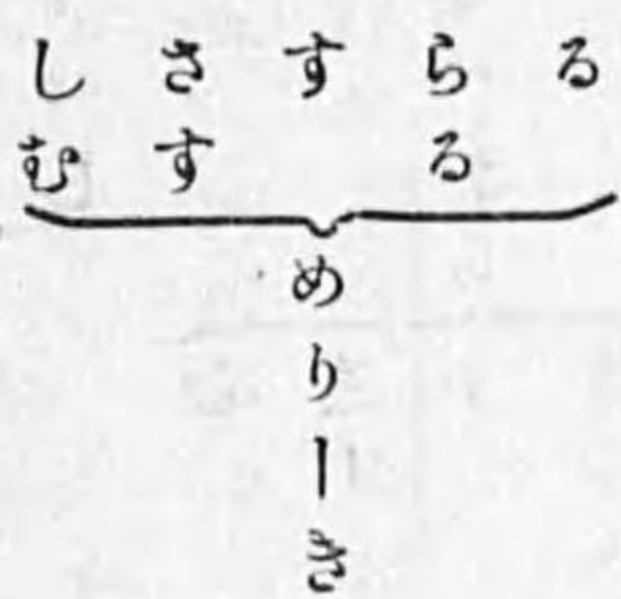


行くべからざらむ。

その勢實に當るべからざりき。

属性の作用を助くるものをうけたる統覺の複語尾のうち「めり」「ざり」「たり」「べかり」は更にその下に相當の複語尾を附せしむることあり。

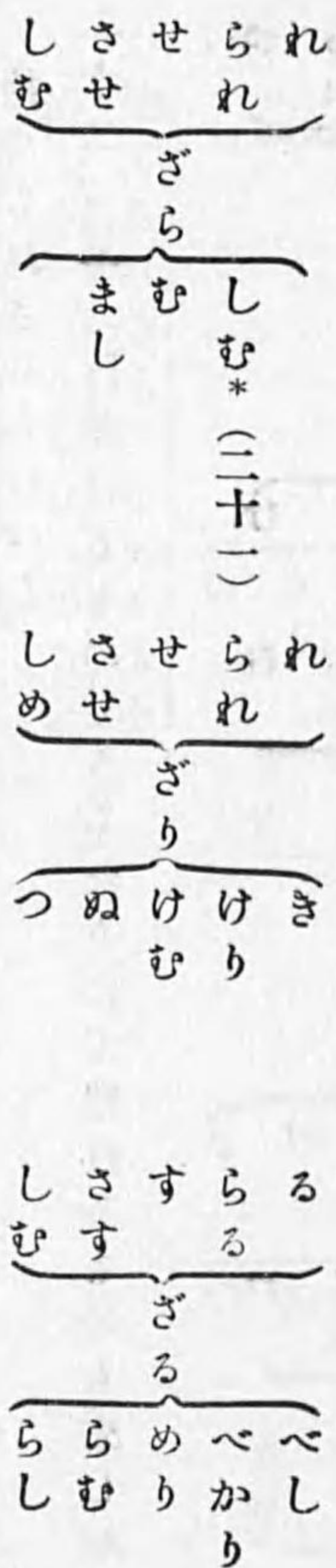
十九、属性の作用を助くる複語尾をうけたる「めり」は更に下に回想の複語尾「き」を伴ふことあり。



こと人をこそものせらるめりしが。

とにかくにの給ひてきこえさすめりしを。

二十、属性の作用を助くる複語尾をうけたる「ざり」は又その下に己が系統に属する複語尾を伴ひうべし。但し「む」を上にうけたるものは下に「しむ」を伴ふことなかるべし。



性の知られざらむ人などは苗字を正しく守るべし。

君行かば彼をして決して不幸に陥らしめざらむ。

かすならぬものにおぼされざらましかば。

などかほはまるいこぬとはきこえさせざりし。

すべていをこそねられざりけれ。

禮儀を知るものは如何なる場合にも輕蔑せられざるべし。

二十一、二十のうちの「しむ」にてうけたるものは更にその下に「しむ」をうくべき複語尾を附しうべし。

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
め

む
じ
ま
し

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
め

き
け
け
ぬ
つ
た
り

き
け
け
む
り

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
む

べ
し
べ
か
り

べ
し
べ
か
り

行かれざらしめむ。

捨てさせざらしめむ。

捨てられざらしめむ。

二十二、二十一に説けるものうちたりにて終れるものも亦しかり。

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
め

た
ら

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
め

た
り

き
け
け
ぬ
つ

ら
れ

ざ
ら
し
め

た
る

べ
し
べ
か
り

べ
し
べ
か
り

行かれざらしめたらむ。

捨てさせざらしめたりき。

二十三、二十一に説けるものうちべかりにて終れるものも亦しかり。

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
む

べ
か
ら

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
む

べ
か
り

き
け
け
ぬ
つ

ら
れ

ざ
ら
し
む

べ
か
ら

べ
し
べ
か
り

べ
し
べ
か
り

捨てられざらしむべかりき。
捨てさせざらしむべからむ。

二十四、屬性の作用を助くる複語尾をざるべかりにてうけたるものは又更にその下に「べかり」に接しうべき複語尾を伴ふことあり。

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
む

べ
か
ら

れ
せ
せ
せ

ら
れ

ざ
ら
し
む

き
け
け
ぬ
つ

ら
れ

ざ
ら
し
む

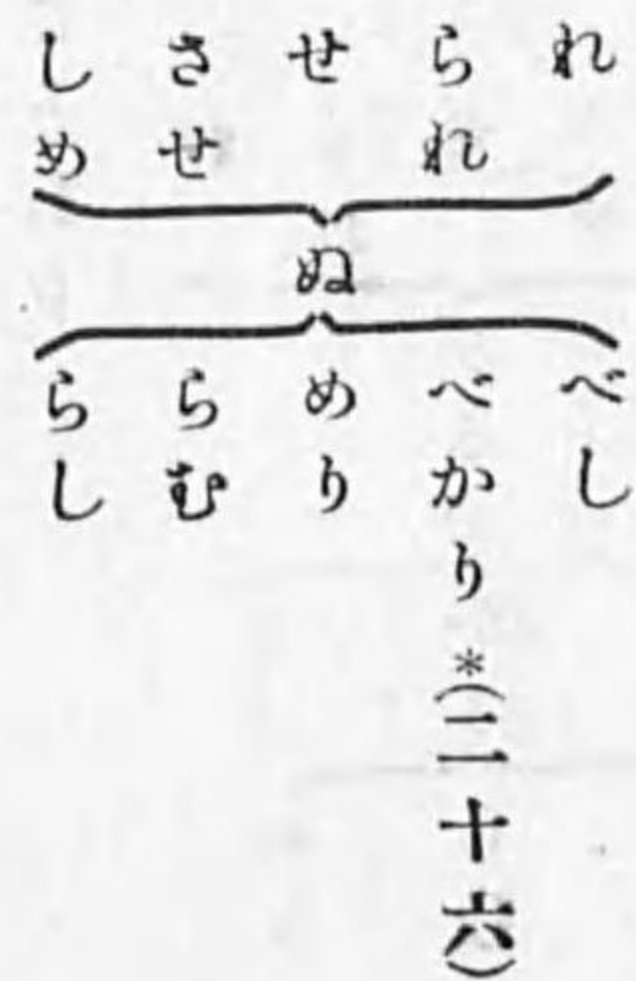
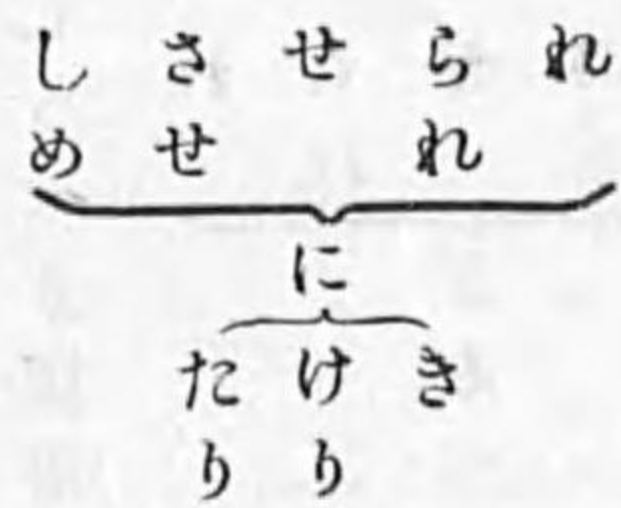
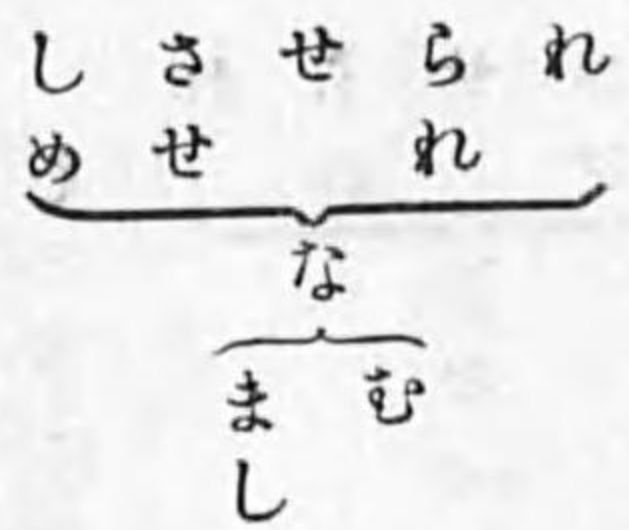
べ
か
ら

べ
し
べ
か
り

べ
し
べ
か
り

多大なる効果あらしめざるべからざる念愈切なり。

二十五、屬性の作用を助くる複語尾をうけたる「ぬ」は又その下にそが系統に屬する複語尾を伴ひうべし。



すてられなむまゝに

又こともなくわれはがいせられなまし。

その祭をはじめられにき。

のおたかはわびしういはれにたりといふめるは。

いましもあはれにたまかでられにしをなむ。

國の守にからめられにけり。

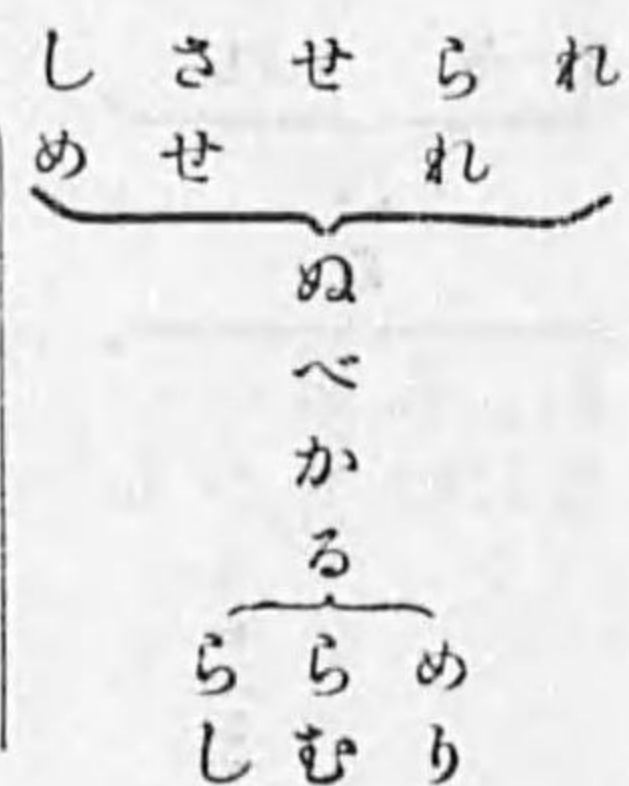
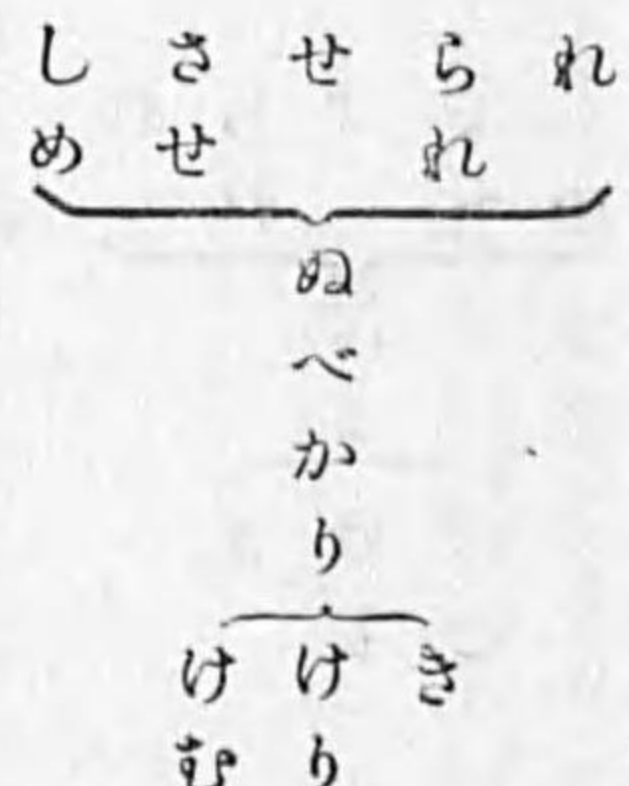
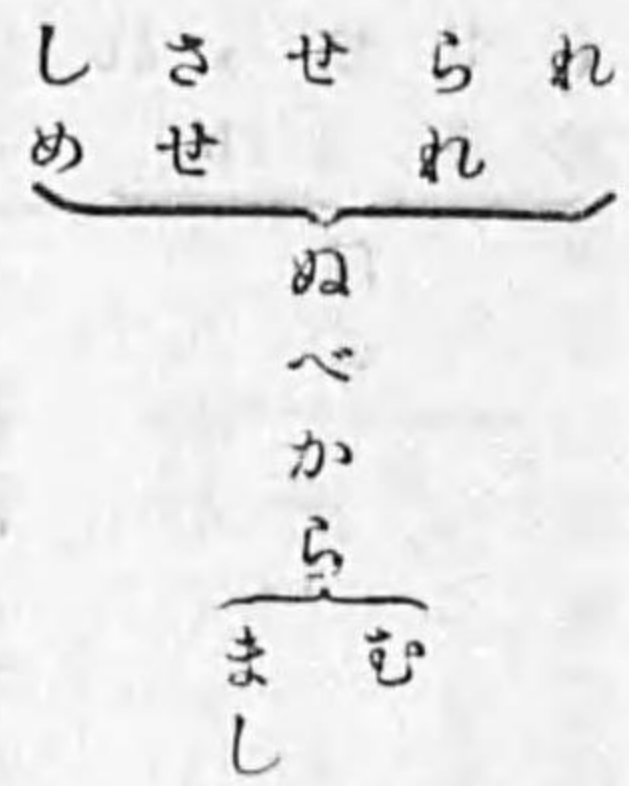
暫し休み侍りし程にうちまどろまれにけり。

さりとも今は知られぬらむ。

およびもそこなはれぬべし。

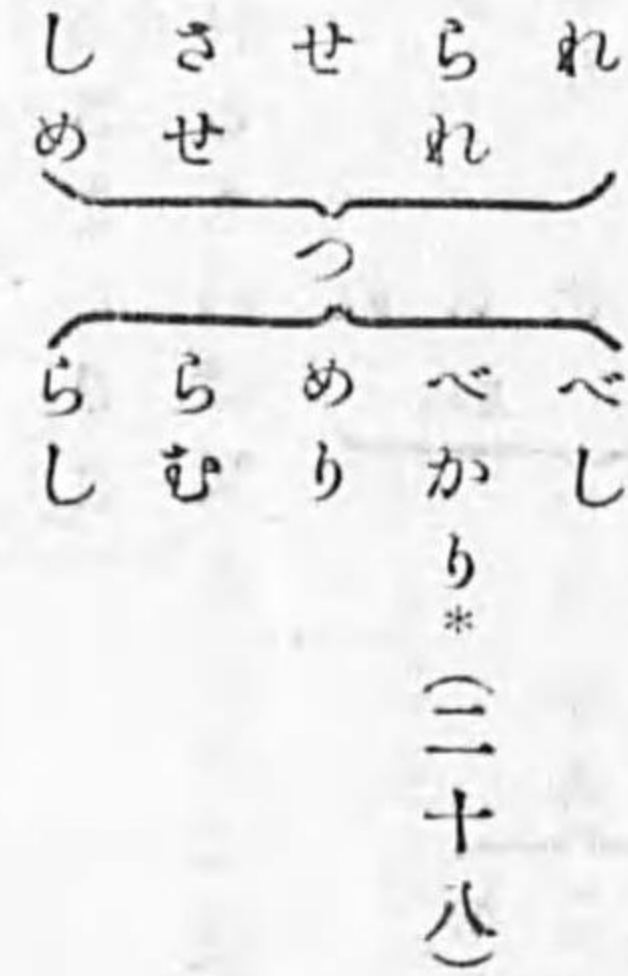
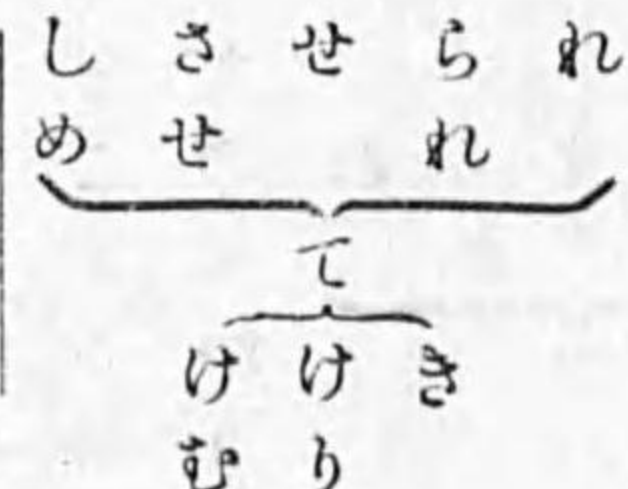
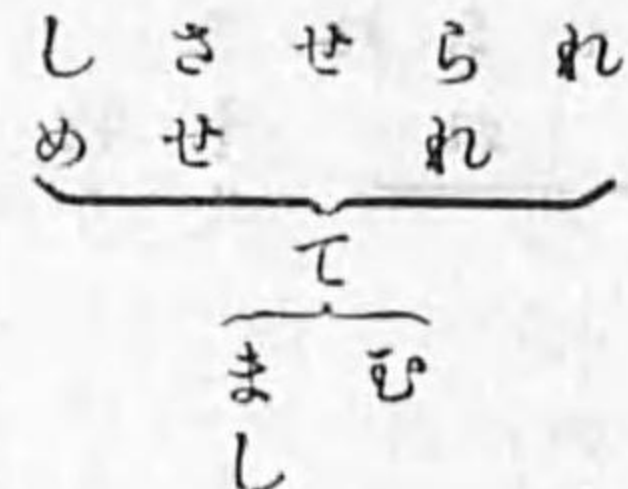
いとおろかにこそはおぼされぬべけれ。

二十六、二十五のうち「べかり」にて終れるものは又下に複語尾を伴ひうべし。



また人の知らざらむことの心にしるく出でられぬべからむをいへ。(源、若菜、下)

二十七、屬性の作用を助くる複語尾をうけたる「つ」は又その下にそが系統に屬する複語尾を伴ひうべし。



さりとはきこえさせてむとたのみてなむ。

さものたまひしらせてまし。

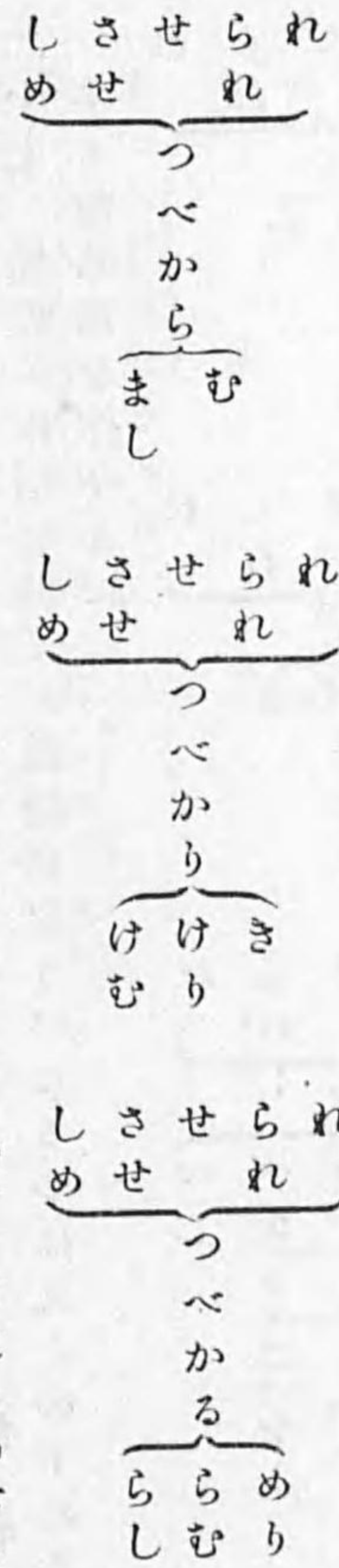
いかでよそながらもの一こときこえさせてしがな。

きかせてけり。
さればこそきかせてつべしと聞えしか。

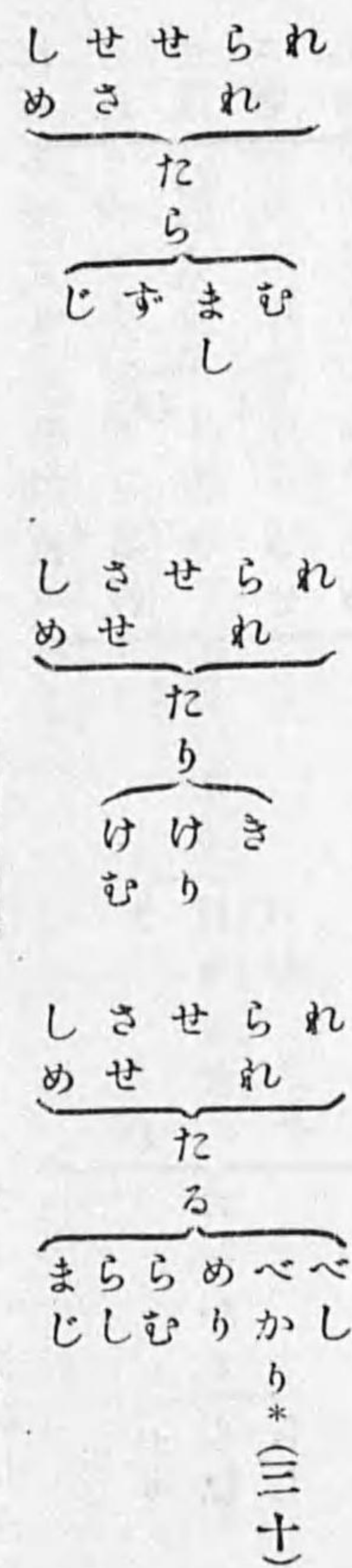
いかにぞおほかりつる心地せられつらむ。

物うくおしはかりきこえさせつらむあさましきよ。

二十八、「二十七」のうちの「べかり」にて終れるものは又その下に複語尾を伴ふ。



二十九、屬性の作用を助くる複語尾をうけたる「たり」は又その下に己が系統に属する複語尾を伴ひうべし。



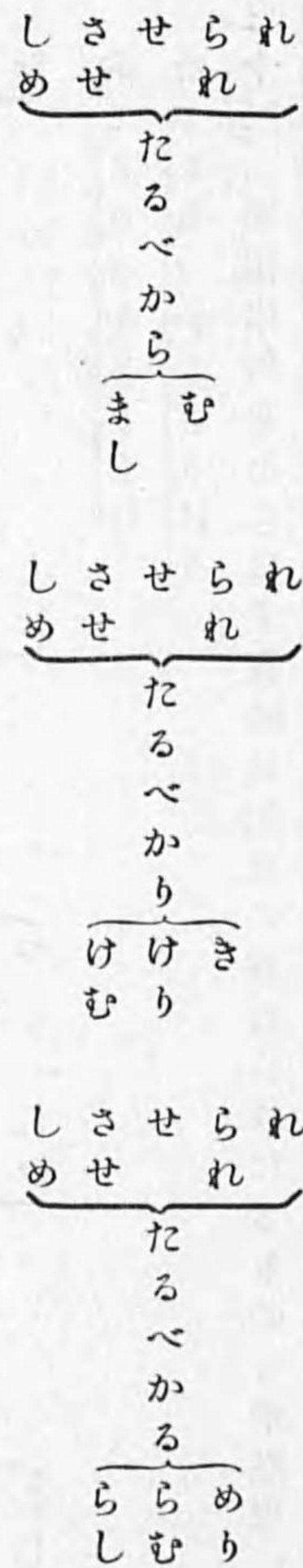
こなたにも心のどかにゐられたらすそゝめきありくに。

貫之のよまれたりし歌。

重盛窃に仲綱を召して蛇を捨てさせたりき。

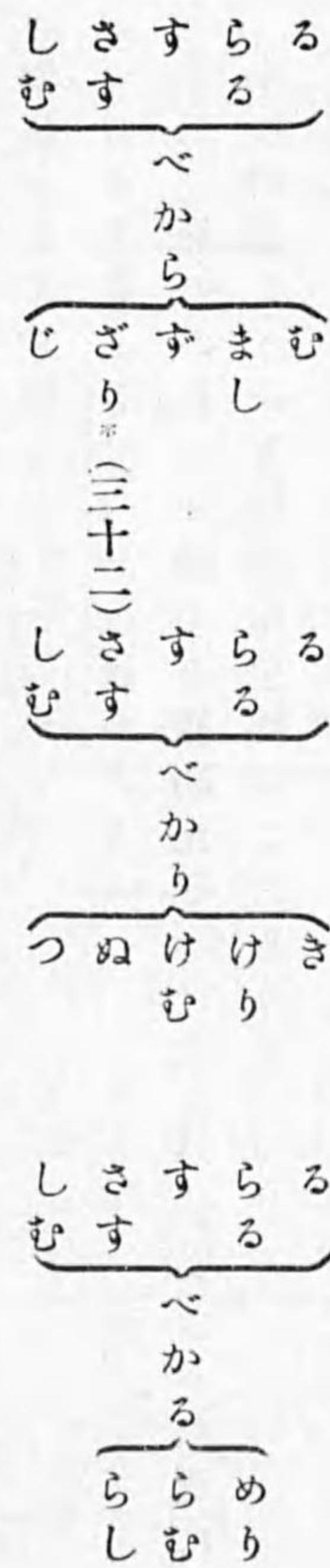
不十分ながらも漢文を用ゐしめたりき。

三十、「二十九」のうちの「べかり」にてうけたるものは又更に己が系統に属する複語尾を伴ひうべし。



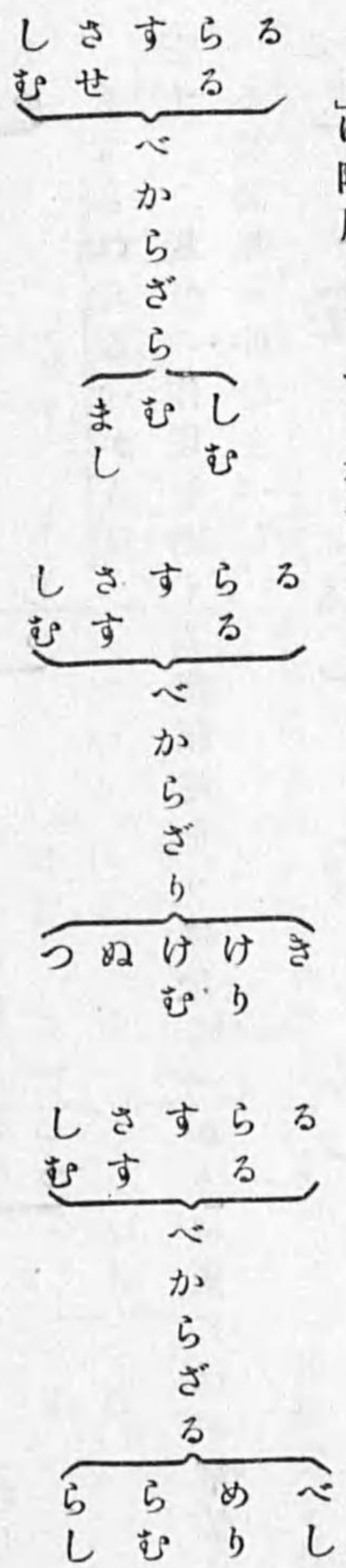
捨てられたるべからむ。

三十一、屬性の作用を助くる複語尾をうけたる「べかり」は更に己が系統に属する複語尾を伴ひうべし。



學生をして放縱ならしむべからず。
一日もきこえさすべかりけれども。

三十二、屬性の作用を助くる複語尾をうけたるべからざりは更にその下に「ざり」に附屬しうべき複語尾を伴ふことあり。



捨てらるべからざらむ。

捨てらるべからざりけり。

三十三、間接作用をあらはす複語尾相互に重ねられたるものゝ未然形に他の複語尾を添へたるものは左の如し。

上	下	む	まし	す	じ	ざり
れさす	れさす	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ
られさす	られさす	られさせ	られさせ	られさせ	られさせ	られさせ
れしむ	れしむ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ

られしむ	られしむ	られしめ	られしめ	られしめ	られしめ	られしめ
せらる	せらる	せられ	せられ	せられ	せられ	せられ
させらる	させらる	させられ	させられ	させられ	させられ	させられ
せさす	せさす	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ
しめらる	しめらる	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ
しめさす	しめさす	しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ

ざり (四十三*)

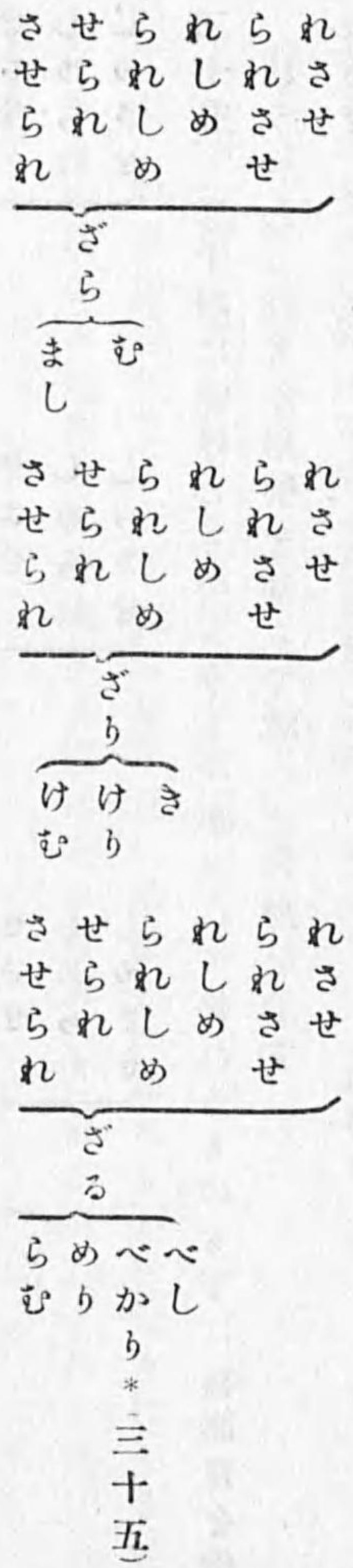
打たれしめむ。

捨てさせられじ。

笛をふかせられず。

行かしめられず。

三十四、「三十三」のうち「ざり」にてうけたるものは更にその下に複語尾を伴ふことあるべしと思はる。されど、用例を知らず、試に次にその形をあぐ。



せさせ
しめられ
しめさせ

せさせ
しめられ
しめさせ

せさせ
しめられ
しめさせ

らし

三十五、三十四に説けるものうち「べかり」にて終れるものも下に複語尾を伴ひうべし。これも亦用例を知らず、試にその形を示す。

れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ
られさせ	られさせ	られさせ	られさせ	られさせ	られさせ
れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ
せられ	せられ	せられ	せられ	せられ	せられ
させられ	させられ	させられ	させられ	させられ	させられ
せさせ	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ

ざるべから
す
む
まし
れしめ
せられ
させられ
せさせ

ざるべかり
き
けり
けむ
せられ
させられ
せさせ

ざるべかる
らむ
めり

三十六、間接作用をあらはす複語尾相互に重ねられたるものの連用形に他の複語尾を添へたるものは左の如し。

上	下	き	けり	けむ	ぬ	つ	たり
れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ
られさせ	られさせ	られさせ	られさせ	られさせ	られさせ	られさせ	られさせ

れしむ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ
られしむ	られしめ	られしめ	られしめ	られしめ	られしめ	られしめ
せらる	せられ	せられ	せられ	せられ	せられ	せられ
させらる	させられ	させられ	させられ	させられ	させられ	させられ
せさせ	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ
しめらる	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ
しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ

(七十三)* りた

やがて之を印に彫らせられきとなり。

殿下は御課業了らせられて雪中に還啓あらせられぬ。御笛たびて吹かせられけるに。

殿下は微笑を含ませられ、軽くうなづかせられたり。かくせしめられたる事あるまじき事なり。

勅ありて轡を書き加へしめられたりと傳ふ。さまざま習はせられたれど何一つおぼえず。

三十七、間接作用をあらはす複語尾相互に重ねられたるものを「たり」にてうけたるものはさらに「たり」に附屬する複語尾を伴ふことあるべし。これも試にあらざるなり。

れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ
れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ
せられ	せられ	せられ	せられ	せられ	せられ
させられ	させられ	させられ	させられ	させられ	させられ
しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ
れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ
らさせ	らさせ	らさせ	らさせ	らさせ	らさせ
せさせ	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ	せさせ
しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ	しめさせ
たら じすまし					
れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ
れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ
せられ	せられ	せられ	せられ	せられ	せられ
させられ	させられ	させられ	させられ	させられ	させられ
しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ
たり つぬけけき むり					
れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ	れさせ
れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ	れしめ
せられ	せられ	せられ	せられ	せられ	せられ
させられ	させられ	させられ	させられ	させられ	させられ
しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ	しめられ
たる べし めり らし まじ					

三十八、間接作用をあらはす複語尾相互に重ねられたるものの原形に他の複語尾を添へたるものは左の如し。

上	下	べし	べかり	めり	らむ	らし	まじ
れさす	れさす	れさす	れさす	れさす	れさす	れさす	れさす
れさす	れさす	れさす	れさす	れさす	れさす	れさす	れさす
れしむ	れしむ	れしむ	れしむ	れしむ	れしむ	れしむ	れしむ
せらる	せらる	せらる	せらる	せらる	せらる	せらる	せらる
させらる	させらる	させらる	させらる	させらる	させらる	させらる	させらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる

せさす	せさす	せさす	せさす	せさす	せさす	せさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる

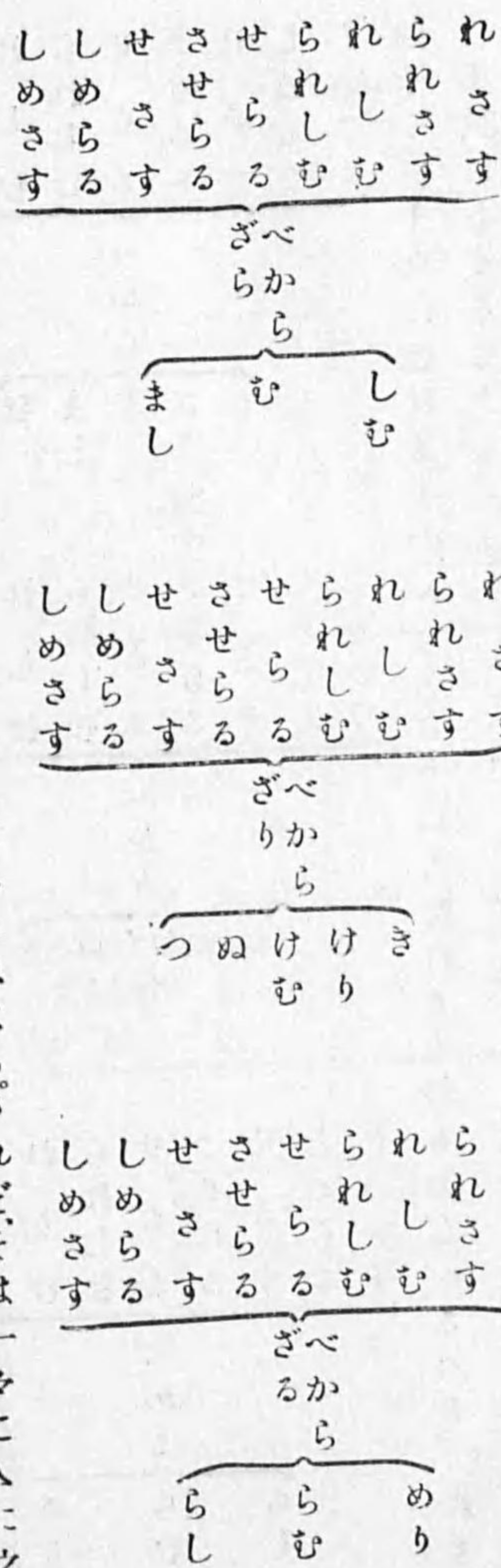
この兒才ありいかにも師を擇びて學ばしめらるべし。

明日はわれら論文を作らしめらるらし。

三十九、間接作用をあらはす複語尾相互に重ねられたるものを「べかりにてうけたるものはさらに「べかり」に附屬する複語尾を伴ひうべし。これも試にあぐ。

れさす	れさす	れさす	れさす	れさす	れさす
れさす	れさす	れさす	れさす	れさす	れさす
れしむ	れしむ	れしむ	れしむ	れしむ	れしむ
せらる	せらる	せらる	せらる	せらる	せらる
させらる	させらる	させらる	させらる	させらる	させらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる
しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす	しめさす
しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる	しめらる

四十、「三十九」に説けるものうち「ざり」にて終れるものも亦しかるべし。これも亦試にあぐるなり。



以上のうち實際は用ゐられざるもあるべしと思はる。されど、それは一々こゝに之を否定すべきにもあらねば、参考の爲にあげおけり。尙その用ゐられざるべしと思ふものは特に説明を加へて注意をなしておけり。

三 用言より用言に連ぬる状態

さきに用言の連用形は修飾語として用ゐらるゝことあるをいへり。されど、用言の連用形よりして用言に連ぬるものは修飾語として用ゐらるゝのみにあらず、すべて廣く用言より用言に連ぬるに用ゐるものにしてその形は一なれど、意義職能に於いては細密なる注意を要するものなるによりてこゝに之を説かむとす。今こゝにすべて用言の連用形よりして用言につゞくるものを總稱して連用格

の語又は略して連用語と稱すべし。勿論用言の連用形は或は句を重ねるにも用ゐられ、又中止の述法をなすにも用ゐらるれど、又他の用言に連ぬるに用ゐらるゝこと多し。こゝに連用語といへるは、その後のものをさすものなり。

連用語の意義職能を觀察する時は二の別なる性質の存するを見る。一は二語同一の資格を以て連ねらるゝものにして、たとへば、
壁を白く塗る。

に於ける「白く」の如し。この時の「白く」は「塗る」ことの修飾語にあらずして「壁」の色の説明なり。而「白く」塗る「相合して」一の述語となれるものなり。動詞の連用語は殆みなこの性質のものなり。たとへば「馬車にて走り過ぐ」などの如し。今かくの如きものを同格連用といふ。又下なる用言に従屬してその修飾語たる關係に立つことあり。たとへば、

卿等もまた宜しく永住の決心をなすべし。

の「宜しく」の如きは「決心をなすべし」の修飾語として用ゐられたるものにして主語たる「卿等」の爲に直接に用ゐられたるものにあらず。形容詞にはこの用のもの多し。動詞にはこの用法のもの多からずといへども、全くなきにあらず。かくの如きものを従屬連用といふ。

同格連用と従屬連用との區別は意義上より見て重要なるものなるに從來之を

混同して一にし、甚しきはこの從屬連用のものを以て副詞と稱して一の語類と見なほ同格連用のものゝ存するを忘れて之をも副詞とせるもの頗多し。そもく國語の單語複合にはいづれにもこの同格と從屬との二様の範疇の存するを見る。たとへば、名詞にていへば

父母、親子、兄弟、姉妹、松竹梅

等は一團の觀念なれども、上の語と下の語とは同等の資格を以て相對するものなり。而

山櫻、風車、船歌

などの如きは上の語が、下の語の修飾たる性質のものなり。かくてこれにも亦同格複合と從屬複合との二種あるを見るべし。用言に於けるも亦然りとす。

(一) 同格連用語

同格連用は上下の語同等の資格を以て相合同して説明をするものなれど、その間に又二様の形式あり。この區別は名詞の同格複合につきてはさまで必要ならざるが故に説くに至らざりしものなれど、この連用語につきては從來との關係上、之を明にして世の注意を喚起しておくべき必要あるが故にこれを説かんとす。その第一種のものとは上下混同して一の意義をあらはせるに至れるものにして、たとへば、壁を白く塗る。

の如きものなり。この際の「白く」は壁の色をいへるには相違なれど、その「壁の白きこと」とその「壁をぬること」とは個々に壁の説明をなせるにあらで、「白く塗る」といふ一團の意義を以て「壁」に對せるものなり。今これを證せむにはその「塗る」といふ具體的作用を改めて「す」といふ抽象的作用にかへて試みるを以て足れりとす。その時は

壁を白くす。

この「白くす」は即「壁」に對して明に説明の力をあらはせるものにしてこの時は「白く」は決して修飾語にあらず、さりとて「す」と別れて説明をなせるものにあらず。この故にこの場合には

白くす。|| 塗る。

といふ方程式様のもの成立しうべし。又

馬にてこゝを走り過ぐ。

も亦然り。「走り」と「過ぐ」とは個々の行爲にあらず、又「走り」は「過ぐ」の修飾語にもあらず。「走り過ぐ」といふ一團の語にて説明をなしたるものなり。而、その「走る」は即「すぐる」にて「すぐる」は即「走る」なれば、この一團のうちにあける二者の關係は又

走り|| 過ぐ。

といふ方程式様のものにて示しうべし。なほ、この二者の關係をくはしくいへば、「壁

を白くすることは即ち塗ることなり。馬にてこゝを走るは即ちすぐることなり。
さて又次の如きものあり。

この子ましておほきくさとくかしこし。

この場合には「おほきくさとく」は子に對して述語として立てるものにして連用語なるは明なり。然るにこの時には、

おほきくさとく おほきくさとし。

などの方程式様のものは成立しえず。即ち「おほきくさとく」は各別種の意義を以て共に主語を説明せるが故にその間の關係は唯外形上の結合に止まり、意義上は個別的のものなり。動詞のものにても亦然り。

父母は飢ゑ寒からむ。

といふ場合には「飢ゑ」と「寒からむ」と意義上個別的なり。飢うることは即ち寒きことなりとはいふべからざればなり。

以上の如くなるが故に吾人は同格連用語を観察するに二様の別あるものなるを常に念頭に置かざるべからず。今これを命名して前のものを混一同格連用といひ、後のものを個別同格連用といふ。

混一同格連用
個別同格連用

さてこの混一同格連用のものはその混一の程度の密なるに従ひて熟語となる。即ち「落ち入る」「かへりみる」などの如きは一の語とみらるゝまでになれるが、これらは同格連用には相違なければ、余がこの項には説かず。畢竟その間の限界は明に立てうべきものにあらずといふべし。

以下説明し行く所のものはこの二者を混じ掲ぐべし。但この二種を大體區別せられざるにあらず。即ち形容詞、動詞の各種のものが同種類のもの重ねらるゝ時は多くは個別的にして異種のもものが相重ねらるゝときは多くは混一的なり。されど、こは概略にすぎず。これを以て全般に通じて説くこと能はざるは勿論のことなり。

次に注意すべきは同格連用は實質用言の上のみ行はるゝものにして形式用言に對しては行はれず、但形式用言に實質ある語を加へたる時には勿論行はるべきなり。

なほ注意すべきは同格連用は述語の場合にのみ限らず。連體語に立つ場合のものにも準體言として種々に用ゐらるゝものに對してもあらはるゝなり。即ち

たけくをしき魂。

の如きは連體語たるものに於ける同格連用語にして

我はこの細く長きをとる。

の如きは準體言たるものに於ける同格連用語なり。なほ修飾語たるものにも見ゆ

れどそは單に重ねたりともいはゞいはるべし。
形容詞に於ける同格連用語の用例左の如し。
一、用言を重ねて述語となす時に用ゐらる。

櫻の花うるはしくさけり。

望月のかげ清くさやけし。

この場合のものは「うるはしく」「清く」は下の「さけり」「さやけし」と共に主語たる「櫻の花」「望月のかげ」に對して陳述をなせるものにして之を分解して次の如くなすことをうるものなり。

櫻の花うるはし。 望月のかげ清し。

櫻の花さけり。 望月のかげさやけし。

而之を陳述する時にあたり、この二の意義を以て同時に説明せんとするが爲にか
く連用形にて連ねたるものなり。かくしてこの二の用言は共に同等の資格を有す。
かくて、これらは下なる語が動詞なる時あり。形容詞なる時あり。即次の如きは動
詞に對して同格連用をなせるものなるが、その用例はあまり多きものにあらず。

風すゞしく吹く。

水清くながる。

その巖のもとに浪白くうちよす。

汽車の音遠くきこゆ。

形容詞と重ね用ゐられたるものは甚多く、形容詞の同格連用は主としてこの形を
とるものといふをうべし。次に二三の例をあぐ。

この杖は細く長し。

この山は高く大さし。

その味は辛く苦し。

御姿げにけ高く貴し。

この子ましておほきくさとくかしこし。

犬の諸聲にながながとなきたるまがまがしくにくし。

天地と相さかえむと大宮をつかへまつればたふとくうれしき。

形式用言に對しては同格連用に立つものなし。即形式形容詞には接せず、形式動
詞、存在動詞に形容詞の連用形を以て連ぬることあれど、その時は賓語に立つもの
にして同格連用よりも意義顯著なるものなり。

衣冠を軽くして馬車をのみ重くす。

かくの如きこと多くあり。

たのしくもあるか、豊のあかりの。

説明動詞に連ぬるは通常の場合に於いて起ることなし。形容動詞、動作存在動詞に

對しては同格連用に立つことあり。そはその形容詞、動詞に對しての同格連用にし
てその存在動詞に關するものにあらず。

夕風すゞしく吹けり。

庭に霜白くおけり。

ねたくくちをしかりけり。

たけくつよかりけり。

二、さて同格連用のものは述語たる用言に對してのみならず連體語たる用言に
對してもあらはるゝことあり。即ち、

け高く潔き丈夫の魂。

赤く白き花ども。

きよくすゞしきせんたんのかげに。

うくつらき事どもあれど忍びおほせつ。

われ乏しく貧しき身なり。

の如きこれなり。これらは皆意義の上より見れば下の形容詞「潔き」「白き」と同様の資
格を以て「丈夫の魂」「花ども」を裝定せるにて

け高き丈夫の魂

潔き丈夫の魂

赤き花

白き花

といふべきを便宜上形の上にて連ねたるものなれば即同格連用なること明なり
とす。上の例は形容詞に對しての同格連用にして、この如き用例最多きものなれど
又動詞の連體語と同格連用をなせるものなきにあらず。

白くうち寄する浪。

すゞしく吹ける夏の夕風。

遠くきこゆる鐘の音。

内侍所の御鈴の音はめでたく優なるものなり。

又準體言中に同格連用をなせるものあり。

あし毛の太く逞しきに乗る。

やさしくつよきはたけくあらきよりもよし。

岸に立ちて浪の白く寄するをのみ見る。

動詞の同格連用は形容詞に對してあらはるゝことあまり多からず。そのよくあ
らはるゝは難易をいふものに多し。こは寧熟語と稱すべき性質のものなり。

酒などのみ散らすはみぐるし。

勤め難き役なり。

読み易き文なり。

侮りにくき敵なり。

動詞に對しての同格連用は最普通なりとす。

一、述語内に於いて同格連用をなすもの。

風はいよくふきすさぶ。

山をすぎゆく。雪きえはつ。

酒などのみちらすはみぐるし。

かつは歌の心にはちおもへども。

あめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり。

翁何事ぞとてかたぶきををり。

形式用言に對してはまた形容詞のものゝ如し、即形式形容詞には接せず。形式動

詞に動詞の連用形を以て連ぬることあれど、その時は賓語に立つものにして從屬

連用に近き用をなすものなり。

盡きせぬものやまろが身のうさ。

うごきすべくもみえざりしかば。

存在動詞に連用形を以て連ぬるものはそのまゝの形にてはあらはれず。所謂動

作存在動詞はこのものゝ一種の變形なりとす。

説明動詞に連ぬることは通常の場合に於いては起ることなし。名詞の資格を有

する場合に連用形を以てつゞけらるゝものは別なり。

形容動詞、動作存在動詞に對しては、同格連用に立つことありといへども、それはその形容詞、動詞に對してのものにして存在動詞に關するものにあらず。

父母は飢ゑ寒からむ。

木枯木の葉を吹き散せり。

偉績燦然としてひかりかゞやけり。

月影いとど冴えわたれり。

二、連體語たる用言を重ねて同格連用をなせるものあり。

花のさき實のなる樹。

いでいる人。

師を尊び學を好み書を嗜むものは賢者といふべし。

の如きこれなり。これらも亦

花のさく樹。實のなる樹。

いづる人。いる人。

師を尊ぶもの。學を好むもの。書を嗜むもの。

といふをうべきものにして、便宜上、形の上にて連ねたるものなれば、即同格連用なりとす。しかしてこの場合のものは主として動詞と動詞との間に行はれ、形容詞の上に重ねたるもの稀なり。されど、全く例なきにあらず。

目くるめき枝あやふきほどはおのれがおそれ侍れば申さず。
三、準體言中に同格連用を以て重ねられたるものもあるべし。

恩に報い徳に報ゆるは人の道なり。

不義にして富みかつ貴きは我に於いて浮雲の如し。

山林をいたはりそだつるは農作に劣らぬ事業なり。

惡をなして福を願ふは火に就きて冷を求め、水に入りて暖を求むるに同じ。

形式形容詞は同じく形式形容詞を用ゐるものに對して同格連用をなしうることあり。

洋々乎として其上にあるが如く其の左右にあるが如くなるべし。

その聲怨むが如く泣くが如く訴ふるが如し。

されど他の用言に對して用ゐらるゝこと殆なし。或は稀に形容詞に對して同格連用をなせるものあり。

さきにほへる花雪の如く美し。

形式動詞も亦同じく形式動詞を用ゐるものに對して同格連用をなすこと多し。但そはいつも賓語を伴へるものに限れり。

しろがねこがねのおき口をしまきゑらてんをしゑをかきなどすべてまねびつくすべきやうもなかりけり。

さて之を以て形容詞に對して同格連用をなさしめたるものは例を見ざるにあらねど稀なり。而そのあるものは寧熟語とするを可とするなり。

雨天にはとかく運動しがたし。

脆きものは損じやすし。

まことに詠じにくき口調なり。

動詞に對しては頗廣く行はるゝなり。

竹あめる垣しわたして。

おのづから一つ故つけてしいづることもあり。

何かあらゝかなるさまにしはなちたり。

とくいへ、あまり有心すぎてしそこなふな。

所々などしなほさせ侍る。

形式形容詞に對しては同格連用に立つことなし。存在動詞、説明動詞に對してもしかり。形容動詞、動作存在動詞に對しては又その形容詞、動詞に對しての同格連用は存せり。

そは甚だ混亂しやすかりけり。

うのはなの垣しわたせり。

存在動詞が形容詞に對して同格連用をなすもの。

御かたち心ばへありがたくめづらしきまで。
ありぐるしくおぼすおりもあるべし。
かたちのみるかひあり美しきに萬の咎みゆるして明暮のみものにしたり。

動詞に對しての例。

かくてありならひてもいひなくてあらん。
おのづからくらゐにありさだまりて。
かくかたはにしつゝありたるに身もいたづらになりぬべければ。
只ありつきあつきにけり。
京にありわびて。
さかゆく時もありこしものを。
世の中にえありはつまじきさまを。
いさりびのよるはほのかにかくしつゝありへば戀の下にけぬべし。
家にあり人にまじはるとも後世をねがはむにかたかるべきかは。
形式形容詞に對しては存せず。
形式動詞に對してのものは又その賓語となるが故にこの形なし。
存在動詞そのまゝ同格連用をなすことなし。疊語をなすことあれど、それは同格連用とはいひ難し。他の語を伴へるものには存す。

前にあり後にあるものを共に動かすな。
こゝにありかしこにあるをとほじ。

説明動詞は通例同一の説明動詞を用ゐたるもののみを對して同格連用をなし、その他のものには同格連用をなすことなし。それも述語に於けるものは、原形と連用形と同形なるが故に之を區別するは専ら意義によらざるべからず。この故に專この詞の同格連用なることの認めらるゝものは連體語たるものゝうちにあらず、るゝ場合のもの。

一郷に人たり一國に民たるものは其郷國を愛する情を盛にせざるべからず。準體言のうちにあらず、るゝ場合のものとなり。

豪傑たり哲人たるを望まむはもとよりの不可なし。

さて説明動詞が他の用言に對して同格連用をなす時は「なり」の代に「たり」の代に「として」を用ゐるを常とす。

重盛は清盛の子にして宗盛の兄なり。

海面平にして鏡の如し。

性質温和にして伶俐なり。

綠樹鬱蒼として目を樂ましむ。

碧流滔々として心を洗ふ。

鮮血淋漓たれども喇叭の音は依然として嘯唳たり。

かくて^二にしては又更に^一にてとなすことあり。

ぢくく^二と松脂の如く燃ゆるのみにて決して爆發せず。

次に又この^二にてを略して^一の^二みを用ゐるものあり。

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものは。なほ一層すゝみて^二にをも略し去ることあり。この時説明動詞は全くあらはれずして、その賓語のみにて同格連用の用をなせるものといふべし。されど、そは重文にのみあらはれその他には用ゐらるゝことなし。

頼山陽名は襄字は子成山陽と號す。

形容動詞は動詞に對して同格連用をなすことをみるのみ。これとても古き例のみにして今は用ゐずと見ゆ。

三月ばかりこゝにわたりたるほどにしも苦しかりそめていとわりなうくるしと思ひまどふを。

動作存在動詞も亦動詞に對して同格連用をなせるものあり。これも亦古き例にして今は用ゐずと見ゆ。

思ひしづめりくんじおもやせて。

物つきちらしてふせりあへり。

複語尾を有せる用言は、多くは同趣の複語尾を有せるものに對して同格連用をなしうべし。複語尾より用言に接するものは別に述ぶる所あらむとす。

同じ様に泊れりし船百ばかり、一つ浪に吹き集められゆり漂はさる。

世の人のうゑすさむからぬやうに世をばおこなはまほしきなり。

酒狂人は人に笑はれ、人にそしられ、人に憎まる。

音楽は或は人を悲ませ、或は人を樂ませ、或は人を怒らせ、或は人を和らぐ。

本をよませ、字をかゝせまた復習せしむ。

この度の大地震にはおきてもあられず寐ねてもあられざりき。

奇樹異草名も知らず目なれぬものいと多し。

天巧の妙實に感すべく又驚くべし。

(二) 從屬連用語

從屬連用語は下なる用言に對してその意義を修飾限定するものなれば、同格連用とは頗趣を異にす。たとへば次の例の如し。

彼性率直甚しく輕薄の風を罵れり。

春風輕く衣袂を吹いて征路長閑なり。

即「甚しく」輕くは下の「輕薄の風を罵れり」衣袂を吹いてに對して修飾限定をなす地位に立てり。

而これらは主語に對して、直接に陳述をなせるものにあらず。たとへば、これらの例にては、

彼性率直甚し。 春風輕し。

の意にて用ゐられてあるものにあらず。さればこれらの連用形は下なる用言の修飾限定の用として從屬的に連ねられたるものなるが故に之を名づけて從屬連用といふ。

從屬連用の用法に立てるものは形容詞に最多し。その形容詞に對して從屬連用をなせるものゝ例は次の如し。

此頃の氣候は甚しく寒し。

さる事は全くなし。

いはひにはかぎりなく久しき心をいひ。

時奏するいみじくをかし。

動詞に對して從屬せるものゝ例次の如し。

正理は能く人を縛す。

心全くしづまりぬ。

雪いたくふれり。

夜はおそく寝ね、朝は早く起く。

(長明、無名抄)

喇叭高くひびきて始業をつぐ。

馬とく走る。

水速くながる。

風はげしくふく。

犬を強く打つ。

形式形容詞に對してはこの用法なし。形式動詞、存在動詞に對してのものは又賓語となれるものにして從屬連用に立てるものなし。

説明動詞に對してはその副詞を賓語とするものに對しては從屬連用に立つものあり。

いみじう靜なる夜なり。

形容動詞に對しては從屬連用に立つものあり。

たけいみじうたかかりけり。

動作存在動詞に對してもまたしかり。

夜もいたくふけわたれり。

野分はげしくふけり。

動詞が從屬連用に立つものは甚稀なり。されど例なきにあらず。衣服をいそぎかふ。

木葉あらしそひおつ。
書をくりかへしよむ。
牛と熊と相ひうつ。
鐘をつづけうつ。

くりかへし思ひわづらふ。

形式形容詞は主として従屬連用に立つものなり。次に例をあぐ。

形容詞に對して、

我が如く物や悲しき時鳥。

花の如く美しき心。

氣候の相違かくの如く甚し。

その顔ばせ玉の如くうるはし。

動詞に對して、

年月の射るが如くも思ほゆるかな。

その身は露の如くうせぬとも。

供物山の如くつまれたり。

つじ風例のことどもをみな同じ如くおきつ。

敵は案の如く城を逃げ出せり。

形式形容詞は相重ね用ゐることなし。

形式動詞に對するものは寧賓語と稱すべきものなり。

え思ひの如くもしあへで。

動作存在動詞の類に對しては従屬連用といふよりも寧賓語としてそはるゝものといふべし。而形容動詞動作存在動詞等には、その形容動詞に對して従屬連用に立つものなり。

形式動詞はすべて従屬連用に立つことなし。

存在動詞の類も亦すべて従屬連用に立つことなし。

(三) 形容詞の連用形にあらはるゝ特種の状態

形容詞の連用形は音便によりて「う」とすることあり。この時は通例同格又は従屬の連用格に於いてあらはるゝものとす。

蘆のびて川狭うなりぬ。

地は青黒う暮れ、人家の障子に燈火紅に見えそめぬ。

あしうまゐつて候ひけり。

嬉しう思ふ。

嚴しう戒む。

雪たかうるふ日。

月くまなうあはれなり。
聲いみじうをかしうきこゆ。

又形式動詞の賓語たるものにもあらはるゝことあり。

山高うして溪深し。

遂に使命を全うして歸りぬ。

兄弟二人心を同うして力を合せて勤め勵めり。

松青く砂白うして風景の美しきこと畫も及ばず。

昨日は來臨を辱うせしに、あやにく不在にて好意を空うせるは遺憾なりき。

己を正しうして後人を正せ。

江碧うして鳥愈白く、山青うして花燃えんとす。

その待遇を厚うす。

君の知遇を辱うす。

からうじてかきたまふ。

形容詞の連用形はまた確述の複語尾「つ」の連用形「て」につゞくることあり。この時はその連用形の各種の用法を有す。

重文の上句の述語たるもの。

大殿油近くて文ども見たまふ。

風烈しく浪高し。

話のおもしろくて歸るもわすれたり。

山櫻ちる木の下はたちうくてやすむとなしに日を暮しつゝ。

連用語たるもの。

柄は短くても可なり。

その質軽くて弱し。

かべしろはしろくてあたらし。

かくて又この形の者を以て動詞の如くに用ゐて命令希求の語法をなせるあり。
「よもあしくてよ」とみtakeのたまはじとて。 (枕草子)

すべてかくの如きものは、その連用形と「て」との間に形式動詞又は存在動詞の入るべきものにして之を省き去りたる形のものなり。されば

「近くて」 は「近くありて」 又は「近くして」

「烈しくて」 は「烈しくありて」 又は「烈しくして」

「短くて」 は「短くありて」 又は「短くして」

「軽くて」 は「軽くありて」 又は「軽くして」

「あしくて」 は「あしくありて」

といひかへうるものなり。

かくて又この場合の「く」をば「う」音便になすことあり。

聲はをかしようてぞあはれにうたひける。

(伊勢物語)
(宇、俊、蔭)

いとかめしうて。
平安朝の語にてはこの「う」音便は連用語又は「て」につゞくる時のみに限らず、又連體形の「い」音便をなせるもの頗多し。今日の話語にも亦これらの音便は頗自由なれど、今説かず。今日の記載語に於いて普通に許さるゝものは上にあげしものに限れるが如し。

形容詞の連用形より「て」につゞくる状態は他の形容詞性のものにもあらはるゝことあり。次に少しく、之を説かむ。

形式形容詞の連用形より「て」につゞくるものあり。

御ぐし御もに少し足らぬほどにてやうしかけたるごとくて白き御ぞにひまなくゆりかけられたり。

(宇、藏、開、上)

複語尾「べし」「まじ」亦その連用形より「て」につゞくることあり。

(宇、俊、蔭)

いたづら人になりぬべくてなむ。

君さ言はせてまつるまじくてこそは心もとなくはいかでか。

(宇、國、讓、上)

さてこの複語尾「べし」「まじ」の連用形は又音便によりて「う」となりて各種の用法を

なすことあり。その連體形も亦音便によりて「い」となりて用ゐらるゝことありといへども、今日の記載語としては採用せられず。この故にこゝには述ぶることなし。

(四) 複語尾より用言への連接

すべて用言の連用形は他の用言に連ぬることをうるものなるに、複語尾の連用形にはこの作用、頗不十分なり。先これら複語尾には連用形を有せぬもあり、又連用形を有しても、その連用的用法を有せぬものも少からず、又連用的用法を有するものといへども、下に來るべき用言に一種の制限あること少からず。

連用形を有する複語尾は屬性の作用を助くる複語尾全體、陳述の確めをあらはす複語尾全體、回想の「けり」現實推量の「べし」「べかり」「まじ」「まじかり」「めり」否説の「す」「ざり」なり。このうち下用言につゞけうるものは、屬性作用を助くる複語尾全體及陳述の確めをあらはす「て」現實推量の「べく」「まじく」「否説の「す」のみなり。

今これらの研究に於いては、屬性の作用を助くるものと其の以外のもと分ちて説くを要す。

屬性の作用を助くる複語尾は下に形容詞をも動詞をも持來しうるなり。されど、その用ゐらるゝには一種の制限あるが如く見ゆ。

先形容詞につきていはゞ、これらは大抵は難易をいふ形容詞を伴ふものの如し。この言にては未首肯せしめ難かるべし。

人にそしられ易き地位に立てり。
打たせにくきを念じて打たせぬ。
いとわづらはしうきこえさせにくしなん。

雲母は剝がれ易き性を有す。

動詞につきていは、次の如く普通の動詞を持來しうといへども、そは用法自由なりといふべからず。

紫に紅に藍に墨に見る見る彩られゆく山影うすくこくあをく黒く消されゆく人影皆これ詩中のものならぬはなし。

月日のふるまゝにあふごなきねのみなかれまさりて。

最多く見ゆるものは、敬意をあらはす準形式用言たるもの即敬語動詞に接するものなりとす。次にその用例の二三をあぐ。

尙院參あらんにはまづ重盛が首を刎ねられ候へ。

宸筆を下して賞美させ給ふ。

まことにさこそは思しめされ候ふらめ。

おのれまでも恵みあはれびられ奉りて侍る。

かくいはれ侍り。

かく仰せられ候ふ。

人々にうたよませさせ給ひける時。

平氏をうたしめたまふ。

「てすべくまじくは下に動詞を連ぬることをうれども形容詞を連ぬることなし。これを以て屬性を助くるものとの別を見るべし。

花ごとにあかずちらし風なれば。

その所在すら明に知れずなり候ひし者もこれあり候。

満船何となう氣も浮き立ちて見ゆ。

十數里以上の間に恐るべく繁茂したる深林あり。

京に御車ゐてまゐるべく走らせ給ひつ。

げにえたふまじく泣き給ふ。

えしもたへ給ふまじくおもほゆればなり。

やゝもせば難じつべくおほえ侍りしかど。

かくてこれらは又下に敬語動詞を連ぬることも亦希ならず。この時は所謂謙語にのみ接してその他のものには連ならず。

敵ははやよせて候ふ。

速に參上仕るべく候ふ。

甚心得ず候ふ。

何の恐るべきこともこれあるまじく候ふ。
こよひかの宮にまゐるべく侍り。

かくてこの四が存在動詞ありにつゞけるものは即たり「ざり」「べかり」「まじかり」

の複語尾なり。その用法は既に述べたる所なるが故に、こゝには説かず。
複語尾「て」の複合體なる「すて」「にて」「及」「で」は亦下に動詞を伴ひうることもあり。

いかで月みずてはあらむ。

消すてわたるは神ながらとぞ。

けたすて玉にぬくものにもが。

人みてはたゞわらひにてうつくし。

知りにて侍り。

人に知られでくる由もがな。

ものもものしたまはでひそまりぬ。

これらはもとより古き形なれば、今多くは用ゐられず。

四 装法に立てる用言

用言は用言本來の性質によりて或は陳述又は裝定をなし或は體言副詞の如き位置に用ゐらるゝことあり。甲を本然の用法とし、乙を轉成の用法とす。
轉成の用法中體言の如き位置に用ゐらるゝものは、即準體言にして先に之をの

べたり副詞の如き位置に用ゐらるゝものは疊語熟語の條にのべたるが故にこゝにいはす。

さて本然の用法に立てるものに又二様あり。一は述法にして一は裝法なり。述法とは句の述語として其が有せる意義を説明的に述ぶるものにして、裝法とは他語の意義を修飾限定せむが爲に用ゐられたるものなり。

裝法に立つものは又二様の別あり。用言の裝定をなすものは連用形を、體言の裝定をなすものは連體形を用ゐるなり。連體語たるものは一切の用言及複語尾に通じて存すれども、用言の裝定をなすものは然らず。即形容詞及その性ある形式形容詞は悉く之を有すれども、動詞及形式動詞には稀に存するのみ。又純粹形式用言には殆その用法なく複語尾にて之を有するものは「ず」「つ」「べし」「まじ」の四のみなり。今これらにつきて述ぶる所あらむとす。

用言が連體格たるには大體二様の方法あり。一は「の」といふ助詞の助けによりて連體格に立つもの、一は、用言の活用の連體形よりして連體格に立つものなり。

「の」助詞の助けによりて連體格に立つものにも亦種々の状態あり。
形容詞はその語幹よりして「の」につゞきて連體格に立つことあり。

面白^〇の春雨や。
心幼^〇な^〇の業や。

口をしの事や。
あな恐しの物語や。
恨めしの人の心や。
頼もしの契や。

形容詞のあるものは、又稀にその連用形よりして「の」につゞきて連體格に立つことあり。

多くの人々。

遠くの方。

近くの國の人々。

動詞、存在動詞はその連用形を以て體言の資格に立たしめ、これより「の」につゞけて連體格に立たしむることあり。但これは用法甚局せるものなり。

こぎのすゝみに。

散りのまがひに。

ありのすさび。

興ありのわざや。

動詞が「む」「じ」の複語尾を有せる時はその原形よりして「の」につゞき、かくて連體語となることあり。

忘れじの行末までは難ければ。

出でなむのたばかり。

絶えむの心。

次に又準體言よりして「の」につゞけて連體格に立たしむることあり。
かくの如きの事。

用言の連體形よりして直に連體格に立たしむるものは最多し。次に少しく例をあぐるに止む。

暖き風。

霧の如き雨。

落つる涙。

行く水。

兄なる人。

氷れる水。

赫々たる名譽。

約束したる日。

雪のふらぬ日。

この形につゞきて其注意すべき事實あるを從來殆疎略に打すておかれたり。いでや驚してむ。

これにつゞきて注意すべしといふは連體語と原成分との意義上の關係なり。即連體語たる用言が、其の主たるものを限定することあり。補語たるものを限定することあり。このうち主語たるものを除きては、其の用言は別に主語を加へて之を修飾しうべきなり。たとへば、

用言に對して主語たる體言を其の用言が限定したるもの。

落つる涙(其の涙がおつるなり) 賢き人(其人が賢きなり)

書を読める人(其人が書を読める也) ゆゝしき事(その事がゆゝしきなり)

などは、これらの用言に對して更に主語を加ふることあたはず。これらは西洋語の關係的語法を翻譯する時に注意して決して「事其の事がゆゝしき所の事」などいふ破格を生せぬやうにせざるべからず。然れども同格語を伴ひうべき性質の用言に至りては主たる具體的の主語を限定しながらなほ、部分の主語を伴ひうるなり。

心の正しき人(其の人の心が正しきなり) 又は其の人は心が正しきなり)

色よき衣(其の衣は色がよきなり) 又は其の衣の色がよきなり)

これらと先の例とは同くしてやゝ異なり。即同格語を有しうるか否かの性質の差より來るなり。同格語のことは第二部に説けり。

次には補語たる體言を修飾して連體語たるものあり。

見し人(其の人を見しなり) いふべき事(その事をいふべきなり)

かゝる時には其の主語を有せることあり。而して又主語を添加せずば誤解を生ずる恐あるものあり。前の例の「見し人」の如きも吾人の意見と異なりたる意義をも有す。即

我が見し人(人が補語たる場合)

我を見し人(人が主語たる場合)

のいづれにも「見し人」といふ形をなしうるなり。この故に、深く注意せすばあるべからず。これも

人その人を我が見し人。

などの如き破格むしろ冗漫なる語法をとらでもよきなり。以上は「格補語」の例なるが其の他も亦同様の方法による。その例、

昨日書を與へし少年(我がその少年に與へしなり) (又少年が主語なる時は誰

かに書を與へしなり)

我がすぐる村(その村をすぐるなり)

我が住む里(その郷に住むなり)

君が來れる里(その里より來れるなり)

汽車の到らむ處(その處へ汽車の到らむなり)

これらの例によりいかなるものを修飾せるかを認めざるべからず。

同格の補語を伴ふ用言の補語を修飾せる場合には、又其の同格語を伴ひてあらはるゝことあり。たとへば

我が足を縛りし鳥(その鳥の足を縛りしなり)

の如きこれなり。

連體語たる用言は自家の意義上の主語又は補語にあらぬものをも限定することあり。

多能は君子の恥づる所なり。

人として子孫を思ふことなきは禽獸に近し。

思ふ事はぬは腹ふくるゝわざなり。

これらは其の意義を結體せしめむが爲の體言を修飾せるものなれば形體上よりいへば體言が主にして用言が従なれど意義上よりいへば用言が主にして體言が従なるなり。この故に

心配仕候ふ間御注意申上げ候ふ。

雨ふりし爲外出せざりき。

忘れ易き故記し置くなり。

寒冷の候に候ふ處御消息如何に候ふや。

御通知これなき條迷惑千萬に候。

などは皆この種のものにして形體上の主にして意義上の従たる體言の連體語たるものなり。然るに世には之を誤認して接續詞などいへり。そもくあやまれるかな。

この故に用言の連體語たるには二様の區別あるを見るべし。一は西洋語の關係

的語法に該當するものにして用言の爲には意義上の主語補語たるものを限定せるなり。他は從來多く接續詞と誤認せられたる種類の體言の連體語たるものにして全く他の要素を限定せるなり。この二者の區別は明に知らざるべからず。

修飾語としての用言は主に程度情態の二様にあらはれたれど、又熟語的に殆用言の性を失ひて述素の修飾語となれるもあり。次の例はこれなり。

まして龍をとらへたらましかば。

あへてなすべきにあらず。

相構へて相構へて、隙を伺ひ玉體恙なくおはします様に思案せらるべし。

用言が修飾語としてあらはるゝには形體上三様の方法あり。(一)は原形を以て示すもの但こは重ねて用ゐるもの多し。

目にこそはよし見えねども。

子供らかはるゝ馬に乗る。

ゆくゝ飲み食ふ。

梓弓末に玉まきかくすゝぞねなななりにしおくをかぬく。

かへすゝ口惜しき事かな。

複語尾「つ」の存する場合にはこの用言の全體を重ねる事をせずして、そが代りに語尾の「つ」を重ねて「つ」といふなり。

天氣の事につけつゝ祈る。
 禪尼手づから小刀してきり廻しつゝ張られければ。
 山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿のなく音に眼をさましつゝ。
 かくしつゝともかくにもながらへて君が千歳に逢ふよしもがな。
 山高み見つゝわがこし櫻花風は心にまかすべらなり。
 (二)は連用形を以てするもの。これには單一なるものと重ね用ゐるものとあり。單一なるものは形容詞に多く、動詞には「つ」の複語尾を有せるもの最多く、稀に他の場合を見る。

彼は快く承諾せり。 さる事は全くなし。
 今日甚しく寒し。 此字はあしくかゝれたり。
 こは石の如く堅し。 絶えてなくして稀にあるもの。
 地球はたえず回轉す。 聲たえずなげや鶯。
 香をだにほへ人の知るべく。 ゆくさきいとうしろめたきによりなむ思ひ給へおきて侍る。
 重ね用ゐるものは動詞にも存し、形容詞にも存す。
 とくく來れ。 よくく考へて見よ。
 あへぎあへぎ來る。 打かへし打かへし見たり。

(三)は形式副詞によりて助けらるゝもの。

花を見ながら歌を考ふ。
 吹くからに秋の草木のしをるれば。
 思ひ出づるがまにまにかきつく。
 けしきも見がてら雪を打ち拂ひつゝ。
 修飾語たる用言も亦主語補語等を伴ひうるものなり。そは上の例どもに頗多きなり。

すべて用言の連體語修飾語たるものにして主語を伴へるものは、これ既に唯の語にあらずして附屬句を構成せるものなれば、それらはなほ第二部に至りて説くべきなり。

五 述法に立てる用言

述法に立てるものは、亦之を分ちて二種とす。一を終結の用法といひ、一を前提の用法といふ。終結の用法とは述定の用をなして句の終止をなし、文意はそこに終局を告げたるものをいふ。前提の用法とは一句の述語となれるものなるが、それが屬せる句はなほ一層大なる文の一部にして、下に來る句に對して、前行句となれるものを示す爲の語法をとれるものをいふ。

(一) 終結の用法

終結の用法は又その種類によりて二種に分つ。一は中止法にして一は終止法なり。中止法とは委曲に陳述すべきを中止して、口を襟み、讀者の想像を挑發し、意義を強むるに用ゐる語法なり。

中止の述法をなす時は通例連用形を以て述語の形となすものとす。而、この形をなしうるもの、形容詞、動詞、形式形容詞、形式動詞及複語尾にては屬性の作用を助くるもの、陳述の確めをあらはす「つ」推量をあらはす「べし」「まじ」なり。純粹形式用言及否説の複語尾「ず」は連用形も原形も同じければ、中止の述法をなせりや、終止の述法をなせりやを判することあたはず。

形容詞の例

初花の世とや嫁のいかめしく。

ゆゝしき身に侍れば、かくて坐しますもいまいましう辱く。

(源 桐 壺)

今なむ口惜しく。

月も見なくにあやしく。

動詞の例

春雨や花まつ人の心知り。

怠らずはげめつかはぬ桶はもり。

松たけやしらのぬ木の葉のへばりつき。

この形は俳諧者流の好んで用ゐるものにしてその他のものには多く用ゐられず。なほこの用法の發達につきてはいふべき點もあれど、今は説かざるべし。

複語尾の例。

われをのみ思ふといはゞあるべきをいでや心は大ぬさにして。

君が爲春の野に出で、若菜つむ我衣手に雪は降りつゝ。

春風は花のなきまに吹きはてね、咲きなば思ひなくて見るべく。

鹿の鳴く音に目をさましつゝ。

梅遠近南すべく北すべく。

終止法とは委曲に陳述し意義を十分に述べたる處にて終結となす用法にして、又その意義によりて二種に分つ。甲を定言法といひ、乙を設説法といふ。

定言法とは一定の意義を陳述して斷案を斷言的に下したる終止法にして通常原形を用ゐるなり。然れども、係助詞の特別なるものが上にありて勢力をこの述語に及ぼす時は原形を以て終止とせずして特別の終止形を構成す。これを曲調と稱す。

通常終止は用言の原形を用ゐるを常とすれど、形容詞にありては、その切なる感情を寓したる場合には、語幹を以て終止となすこと往々あり。

あゝいた。 おゝあつ。

あなおもしろ。

あなさやけ。

あらさむや。

ありがたや。

原形を以て終止とするは一切の用言に通じたるものなり。されど複語尾の「き」の三段活用に接するもの、及「べかり」「まじかり」といふものにはあらはるゝを見ず。

白雪のかゝれる枝に鶯のなく。

光陰は矢よりも早し。

空よく晴る。

汝を見るは父を見るが如し。

威儀儼然たり。

かすめる空に月おぼろなり。

板を浮べて手に持てるは游がむとする人なり。

此泊りの濱にはくさくさのうるはしき貝石など多かり。

父は非常なる勤勉家にして多少の蓄財をなせり。

後は青蘆さやさやとそよげり。

吾は喜びて彼を迎へつ。

我らはあるきつゝかたらはむ。

將軍吉宗は賢明なる人なりき。

庭の眞砂いつしか霜おけるやうに白みぬ。

若菜籠に入れて雉子など花につけたり。

雨ふらじ。

案ずるに此は誤聞なるべし。

鳥鳴くめり。

終止の曲調は又二様あり。上に「ぞ」なむてふ助詞ある時は多くは連體形を以て之に應じたる終止形とす。これを第一の曲調といふ。上に「こそ」といふ助詞ある時は已然形を以て之に應じたる終止形とす。これを第二曲調といふ。

第一の曲調は、すべての用言に存するものにして殆んど異例を見ず。

なく鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき。

ひとりぞいぬる。

そのはじめをおもへばかゝるべくなむあらぬ。

これかれ得たる所たがひになむある。

其の人かたよりは心なむまさりたる。

花とみるまで雪ぞふりける。

これなむをかしかるべき。
第二曲調は形式形容詞に存せず。これ已然形をかけるを以てなり。又動作存在動詞の「れり」も亦第二曲調を有せざるものゝ如し。而、その場合にはなほ第一曲調を以てするものゝ如し。

かたさり山こそ誰に所おきけるにかとおかしけれ。

吾は汝をこそ兄弟ともたのめ。

よるべなき身をこそとほくへだてつれ。

秋の山路こそ興ありて樂からめ。

かたちこそみ山がくれの朽木なれ。

以上の曲調は大體の場合に於て遵奉すべき法則として承認せらる。然れども、第一曲調は以上の場合の外に起ることあり。そは各用言の連體形の用例を通覽して知るべきなり。次に少しく例をあぐ。

我は苦しとも思ひ侍らぬ。

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる。

わが宿に花をのこさずうつし植ゑて鹿の音きかぬ野べとなしつる。

わが袖にやどる月さへぬるゝがほなる。

これらはすべて餘韻餘情を含ましむるものなり。そは第二部に至りて説くべし。

設説法は述語の勢力に多少の餘裕ありて、之によりて疑問をあらはし、許容希求をあらはすものをいふ。これ亦二つに分る。一は疑法にして一は許法なり。

疑法は或は疑をあらはし、問をあらはし、若くは陽に疑ひて陰に確むるもの即反語等をあらはすものなり。この語法は助詞にてあらはさるゝものなるが、この助詞が述語の上にありて之に勢力を及ぼす時は連體形を以て終止形とすること第一曲調に同じ。

春やとき花やおそき。

夜やくらき道やまどへる。

身をやうらむる。

知らずやある。

花なき里にすみやならへる。

われやは花に手だにふれたる。

わたらむとおもひやかけし。

くもるや月の光ならまし。

誰にか任する。

昨日か花の散るを惜しみし。

いきとしいけるものいづれか歌をよまざりける。

誰しもとめてをりつる春霞立ちかくすらむ山の櫻を。
誰かは春をうらみはてたる。
誰か鳥の雌雄を知らむ。
いかにかせまし。

何かいふべき。

許法は或は命令し、希求し、認容し、許諾し、放任する等の意をあらはして終止するものなり。こは形容詞、形式形容詞、及それに似たる形の複語尾「べし」「まじ」等には存せず。動詞其の他にあらはるゝものを名づけて命令形といふ。しかれども、次に論ずる如くにして、單に命令をのみあらはすものにあらず、又それが爲に特別の活用形存するものにあらず、たゞ便宜上命令形といふ名を設けたるにすぎざるは第三章に於いて既に述べし所なり。さてこの命令形といふものは、二様にあらはる。即四段活用の動詞及純粹形式用言には已然形と同じ形を以てし、三段、二段、一段の活用の動詞及形式動詞にありては、未然形に多くは「よ」といふ助詞を添へて示す。已然形のもは特別の場合の外は、「よ」を添へず。未然形のもは「よ」を添ふるによりてこの用法を完くするもの多し。

已然形と同じ形を以て許法の終止とするものは四段及純粹形式用言の外、複語尾の「ぬ」「ざり」「たり」も亦然り。而、動作存在動詞には古代に用ゐられし例ありといへども、今用ゐず。

四段活用の例

今更に山へかへるなほとゝぎす聲のかぎりは我宿になけ。

萬一の場合には潔く死ね。

心して我言をきけ。

聲たえずなげや鶯。

存在動詞の例

はしき友よさきくあれ。

説明動詞の例

いつよりもこよひの月はさやかなれ。

君は君たらずとも臣は必臣たれ。

説明動詞にして準體言を賓語としたる時はすべて許法をとりてあらはるゝことなし。

形容動詞の例

過ちては改むるに憚ることなかれ。

いりあひのかねの聲だにのどけかれ。

久しかれあたにちるなと櫻花かめにさせれどうつろひにけり。

動作存在動詞の例。こは古代のものなり。

これらとりおかせ給へれ。

(宇、藏 開下)

複語尾ぬ「ざり」たり「の」例。

玉の緒よたえなばたえね。

春風は花の無き間にふきはてね。

はや船出してこの浦去りね。

あらざれかし。

なほうしろやすくをおもほしたれ。

從來の文法書四段活用の命令形は「よ」助詞を添へざるものにして之を添ふるは破格なりといふ如き説明をなせるもの少からず。然れどもこは僻説なり。これらの文法の典型とせる平安朝語にも四段活用の命令形に「よ」を添へたるもの少からず。次に参考の爲に少しく之をあぐ。

きこえまつれよ。

(宇、菊 宴)

あひ思へたまへよ。

(源、う つけみ)

ふみはよもみたまはじ詞にて申せよ。

(大、和)

物なんどたまへよ。

(宇、祭 使)

よしみたまへよ。

(狭、衣 二)

せうとをみてのみはやまじと大納言に申せよ。

(源、紅 梅)

さらば年のうちにしたまへよ。

(落、雀 三)

そのおはする所にすゑ給へよ。

(和、泉 記)

藤の花はひまつはれよ。枝は折るとも。

(古、春 下)

あはれとだにおぼしおけよ。

(源、藤 袴)

宮の御前に大とのこもれよ。

(狭、衣 三)

朝露の思はむ所に猶さらばおぼししれよ。

(源、夕 霧)

天皇 我 詔旨 良 萬 宣 不 勅命 乎 使人等 聞給 止 倍 與 宣 久。

天皇 我 勅命 乎 聞 食 倍 與 宣。

(續後紀十九詔)

未然形を以てするものは三段二段一段の動詞形式動詞及複語尾の多數なり。三段活用のもは未然形そのまゝにても亦「よ」を添へてもあらはすことをう。

このたまもてこ。

こなたへこよ。

二段活用のもは未然形に「よ」を添ふるを常とす。

須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ。

早く起きよ。

あやまちすな心しておりよ。

一段活用のももの未然形に「よ」を添ふるを常とす。

花を見よ。

勇は爲朝に似よ。義は正成に似よ。

この服をきよ。

一矢に射よ。

鞠をけよ。

形式動詞も亦未然形に「よ」を添ふるを常とす。

苔の袂よかわきだにせよ。

心は勇ましくし立居振舞はしとやかにせよ。

知らざるを知らずとせよ。

複語尾にては上にあげしもの外この用法を有するものは屬性の作用を助くる複語尾陳述の確めをあらはす「つ」なり。而これらはすべて未然形に「よ」を添へてあらはすものなり。

屬性の作用を助くる複語尾の例。

「る」「らる」は受身敬意をあらはす時にのみ用ゐられ、勢力、自然勢をあらはす時にはこの用法なし。

はやくこの瀑にうたれよ。

急ぎて行かれよ。

それこそまづきかまほしけれ語られよ。

かの書物は速に返却せられよ。

「す」「さす」「む」は干興、使令をあらはす時にあらはる。

貧民に食を得させよ。

めのとたちして申させよ。

國民をして天を仰がしめよ。

確述の複語尾「つ」の例。

君渡りなば楫かくしてよ。

かくてのみ世に有明の月ならば雲がくしてよ。天降る神。

ひとかたにおもひさだめてよ。

従來この用法を以て命令なりといへり。然れどもこは命令をあらはすにのみ用ゐらるゝにあらすして希求は勿論許容をもあらはすに用ゐられたり。この故に名に拘泥して命令をあらはすのみものと思ふは不可なり。次に例を示さむ。
希望をあらはせるもの。
いつよりもこよひの月はさやかなれ。秋の夕もたどるばかりに。

(仲文集)

陸奥のあだちの眞弓わがひかばすゑさへよりこしのびくに

(古今集)

戀ひしねとするわざならし。うば玉のよるはすがらに夢に見えつゝ。

(同)

我よばひ君が八千代にとりそへてとめおきては思ひ出にせよ。

(同)

難波がたみじかき芦のふしのまもあはでこの世を過してよとや。

(新古今)

わたの原八十島かけてこぎ出でぬと人にはつげよ。あまのつりふね。

(古今集)

命令をあらはすもの。

みな人をねよ。とのかねはうつなれど君をしもへばいねかてぬかも。

(萬葉集)

君すめば濁れる池もなかりけり。汀のたつも心してぬよ。

(後拾遺)

今更にとふべき人もおもほえず。八重葎して門させりてへ。

(古今集)

希求は自己の思想内に止るものにして、命令は他に其の状態を呈せむことを命ずるなれど、所詮は一におつべく、又場合によりては混合したるもあるべし。然れども次の許容放任に至りては全く性質を異にせり。

降らば降れ、つもらばつもれ、松の雪雪にをれたる松が枝やある。

思ふには忍ぶる事ぞまけにける。あふにしかへばさもあらばあれ。(伊勢集)

されば如何にもく我身ならばなれ、唯これに代りなむと思ひて云々子のた

めには自からはいたづらにもならばなれ。(宇治拾遺)

今は野邊に屍を晒さば晒せ。蒼海の底にも沈まば沈め。(平家)

これらは決して命令、希求をあらはすにあらずして許容放任の意義をあらはしたるなり。これを明言したるは草野清民氏に於て始めて之を見る。しかも氏はなほ徹底せざる所ありしが如し。そは他にあらず。こは必或條件の下に放任許容をなすものにして單にあらはるゝものにあらず。この故に必其の條件を示す「ば」といふ助詞なかるべからず。しかもこの條件は必假設條件を示せるものならざるべからず。なほ前提の用法の説明の條に参照すべきことあり。

(二) 前提の用法

前提の用法にたてるものは又二種あり。接續の助詞の助をかるものと、活用形そ

のまゝにて直にあらはすものとこれなり。甲を相伴前提法といひ、乙を單獨前提法といふ。

單獨前提法とは助詞の助けをからずして用言の活用形によりて前提たることを示すものをいふ。こは前行句と歸結句とが等位に立ちて互に對等の資格を有し意義上互に獨立せるものを形體上一體となしたる際の前行句を示すもの、これを重文前提といふ。

重文前提はすべて連用形を以てするものなれど、まゝ之を缺けるものあり。形容詞形式形容詞はその連用形を以て重文前提となす。その用例次の如し。

この山は高く、かの山は低し。

富貴は浮べる雲の如く禍福は糾へる繩の如し。

動詞形式動詞も亦その連用形を以て重文前提をなす。その用例次の如し。

汽車顛覆箒川におちいり、數多の死傷あり。

夜更け、人静まりぬ。

本ごとに浪打ちよせ枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。

雨ふりいで、風加はり、神鳴りはためく。

圖らざるに牛は死し、圖らざるに主は存せり。

人々歌を詠じ、或は詩を賦す。

存在動詞も亦その連用形を以て重文前提をなす。

「なほほいもあり、あの人とわたらむとおぼさばまかりなむ。

身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

説明動詞はその連用形を以て重文前提をなせるものは原形を以て重ねたるものと形は同じ。この故に形式動詞の連用形に複語尾「て」の附屬してなれる「して」を以て「あり」の職能を代表せしむると稀ならず。

彼も人なり、我も人なり。

花は紅にして、柳は緑なり。

風蕭々として、易水寒し。

その境内は公園にして、築山泉水などあり。

形容動詞も亦その連用形を以て重文前提をなすことなし。若之を前提とする時は又「して」を以て「あり」の職能を代表せしむ。

松青く砂白くして、風景の美しきこと畫も及ばず。

能書の名高くして、才學殊に秀でたり。

任重くして、道遠し。

動作存在動詞には重文前提と稱すべきものなし。問々

わがせこはきませりけらし、我がにはの草もなびけり、露もおちけり。の如き例あれど、原形の終止となれるものを重ねたるものにして重文前提となれるものにあらず。

屬性の作用を助くる複語尾は皆その連用形を以て重文前提をつくることをうべし。

野は細流に截られ、街は水に夾まる。

頼朝は二弟をして義仲を攻めしめ、義仲は兼平をして勢多を守らしむ。

父は太郎をして菊を植ゑさせ、母は花をして衣をぬはす。

筆をとればものかゝれ、樂器をとれば音を立てむと思ふ。

降りける雪は枯木に花を咲かせ、櫻の花盛りと見らるゝまでになしたりき。

陳述の確めをあらはす複語尾は皆連用形を有せれど、重文前提をなしうるものは「つのみなり。而つ」の連用形の「て」はその用頗廣きものなること既に述べたる如くなり。

月さえて雁高く飛ぶ。

花も散りて梢は青葉になりぬ。

「で」も亦然り。

空ははれて、雪いたくふれり。

回想をあらはす複語尾は共に重文前提をなすことなし。

推量の複語尾にて連用形を有するものは「べく」「まじく」の二のみなり。而この二共に重文前提をなしうるものなり。

花も咲くべく鳥も啼くべし。

この事は君も承諾すまじく余も亦君にすゝめず。

非現實性思想の複語尾にては連用形を有するは「す」のみにして「ず」は又重文前提をなしうるものなり。

忠臣は二君に仕へず、烈女は二夫を經ず。

終結の用法なる許容の形は之を前提と同じ用法に立たしむることあり。唯これとかれとの差違はかれが終結に用ゐられ、これが前提として用ゐらるゝ點に存す。而してかれは必上に或假設條件を有すれど、これは自ら條件を示すが故に決して上に假設條件を伴はず。この故に一の許容の用法を見れば、上に假設條件を負へるは終結にして然らざるものは前提なることに注意すべし。

たとひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。 (保元物語)

ありとあるかぎり、みこにもおはせよ、上らうにもあれ、おもてやは見えたまへる。

(宇國讓中)

先づ速に罷り出でよ、罷り出でむに何にもあれ、手に當らむものを取りて棄てず

して持ちたれとくく罷り出でよ。(宇治拾遺)
その川上より流れむものをいかにもく鬼にてもあれ何にてもあれ抱けといひて行きぬ。(宇治拾遺)

さばれいとうれしき夜かな。(宇津保)

(この「さばれは」は「あれ」の轉じたるにてこの例にあつべきものなり「さもあらばあれ」の略とせるはあたらぬが上なほ十分なる見地にたたぬ説なり何となれば「さもあらばあれ」といふその「あれ」を解釋したるもの草野氏以前には明解なければなり)

相伴前提も亦二種に分る。相伴事實と條件前提とこれなり。相伴事實前提は後件につれて生じ又は同時に存在し或は後件を生じたる事實を前提として同伴せしむるものにして連體形に「が」に「を」といふ接續助詞を添へてあらはすなり。

「が」を添へたる例。

形容詞動詞の例。

暑氣は強きが健康には害なし。

簾の内に矢をつまよる音のするがその矢の來て身に立つこゝちして。

複語尾につく例。確述の複語尾。

夜ははやあけぬるが月はまだ入るべくもあらず。

今の朝家には唯藤房のみにて候ひつるが未然に凶を鑒みて遁隱の身となり、云々。

回想の複語尾

春は來しが花はまだ咲かず。

山に登らむとせしが風雨にさへられて果さざりき。

昨日は雨天なりしが今日は晴天ならむ。

昔頼光といふ人ありけるが人にすぐれたる豪のものなりけり。

非現實性の思想の複語尾にては之を有するは「す」のみなり。

人は言はぬがわれいふな。

空は晴れぬが風はやみぬ。

「に」を添へたる例。

形容詞

孔子には斯く物問ひかくる人も無きに斯く問ひけるはたゞものにはあらぬなり。

船とくこげ、日のよきに。

形式形容詞には用例をしらず。

動詞

日暮れかゝるにやどるべき所遠し。

今日明日にても唐へ歸らむと思ふに君の來らむをまちつけてわたらむ。

陶祖藤四郎の傳を見るに人の模範となすに足るものあり。

複語尾には次の如きもの、用例を見る。

確述の複語尾

屢試みたるに一度も効を奏せず。

回想の複語尾

古は月をのみこそながめしに今は日をまつわがみなりけり。

曾て之を憂へしに今果して然り。

推量の複語尾にては「べし」「まじ」「めり」に存し「らむ」「らし」には存せず。

同じ心ならむ人とうらなく言ひ慰まむこそ嬉しかるべきにさる人はあるま

じ。

非現實性思想の複語尾は「まし」「じ」には存せず「む」「ず」には存せり。

日は未だ暮れざるにはや暗くなれり。

庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな。

「を」を添へたる例

形容詞

年なほわかきをいかでかこの任に當らるべき。

形式形容詞には例を知らず。

動詞

人々留むるを我は立ち去らんとす。

あたにこそ人のこゝろもうつろふを色にみせたる山ざくらかな。

存在動詞

雪とのみふるだにあるを櫻花いかに散れとか風の吹くらむ。

動作存在動詞

雨いたく降れるをいかでか濡れざるべき。

確述の複語尾

夜もいたく更けぬるを誰か門を叩ける。

堅く約束しつるをなどてか來らざる。

回想の複語尾

かくまでとは思はざりしをさても殊勝なる少年かな。

昨日かへるさに如意輪寺にまうづべかりけるを、目くれて残しおきしかば今

朝ことさらにまうでぬ。

推量の複語尾にては「べし」「まじ」「めり」「らむ」に存して「らし」には存せざるが如し。

行かば行かるべきを遂に行かずなりぬ。
非現實性思想の複語尾には「まし」「じむ」には存せず「ず」には存せり。
人は言はぬを汝はいふな。

條件前提は又接續助詞「ば」とも「ど」ともにて示さる。こは二重の見地よりして
四種に分たる。其の關係左の如し。

條件の性質	條件の種類	假		設		確		定	
		順	續	順	續	順	續	順	續
順	續	順續假設條件	ば	順續確定條件	ば	戻續假設條件	ととも	戻續確定條件	どども
戻	續	戻續假設條件	ととも	戻續確定條件	どども				

即條件の種類としては假設と確定との二類前後の關係としては順續と戻續との
二類この二種の二類交錯して四種を生せり。
順續假設條件の前提はすべての用言の未然形に「ば」を添へてあらはすなり。

形容詞

鶯の谷よりいづる聲なくば春くることを誰かしらまし。
若分量あまり多くば之を減せむ。

形式形容詞

大きく如くばゆゝしき大事なり。

動詞

風吹かは波立たむ。
月を見は心澄まむ。

名にしおはばいざこととはむ。

五月こばなきもふりなむほとゝぎす。

形式動詞

夢としりせばさめざらましを。

存在動詞

正しき道によりて青雲に志す者あらば之を妨げず。

説明動詞

命だに心になふものならば何かわかれのかなしからまし。
花のごと世の常ならば過して昔は又もかへりきなまし。

この事判然たらば後人の爲ともなるべし。
動作存在動詞は古代には用ゐられたれど今はその未然形を用ゐざればこの例
なし。

思ふ事なしたまへらばこがねの堂たてむ。
とりのあと久しくとゞまれらば。

(宇、菊の宴)

絶えず行くあすかの川の淀めらば故しもあるごと人のみまくに。
屬性の作用を助くる複語尾

願ふ所許さればうれしからむ。

我をまことに師とたのまれば此事をたがへらるな。

貴下演説せられば參聽すべし。

かへさせばなさけなし。

かののたまはせばさらに二三ねんもわたしたてまつらじ。

彼をして選手たらしめば必かたむ。

確述の複語尾

かの國の人來なば猛き心つかふ人よもあらじ。

梅が香を袖にうつして留めてば春は過ぐともかたみならまし。

かちたらば電報にて知らすべし。

回想の複語尾にて未然形を有するものはなし。

推量の複語尾にて未然形を有するものは「べし」「まじ」の二のみなり。

之をしも忍ぶべくば何をか忍ぶべからざらむ。

この人えまぬかれたまふまじくば己を殺したまへ。

非現實性の複語尾にて未然形を有するものは「ず」のみなり。

思ふ事なし遂げずんば死すとも退かじ。

花しちらずば千代もへぬべし。

戻續假設條件の前提は「と」とも「といふ助詞にて示すものなるが動詞純粹形式用言及その性あるものは原形よりうけ形容詞及その性を有するものは連用形よりするものとす。

形容詞は連用形に「と」ともを附す。

一の悲字なくとも既に心動きて禁せざるものあらむ。

草がくれかれにし水はぬるくとも掬びし袖は今もかわかず。

動詞及形式動詞には原形に「と」ともを附す。

譏るとも苦しまじ譽むとも聞入れじ。

人は見ると我は見じ。

繪にかくと筆も及ばじ。

限なき雲居のよそに別るとも旅行く人をいつとかまたむ。

忠告すとも其詮なかるべし。

純粹形式用言には原形に「と」ともを附す。

存在動詞

きえずはありとも花とみましや。

説明動詞

難きものなりとも仰せごとに従ひて求めにまからむ。
たとへ一錢たりとも輕んずべきにあらず。

形容動詞

たとへ敵は多かりとも我等が勇氣にはやはか敵すべき。

動作存在動詞

天の下のみこうまれたまへりともさる心あるべきか。
屬性の作用を助くる複語尾は皆下二段活用動詞の形に似たれば、原形より」とにもに接す。

人に誹らるとも心に介するに足らじ。

たとへこの規則改めらるとも影響なかるべし。

つかさをえさすとも兄にはまさらむ。

確述の複語尾中「つ」は下二段活用動詞に似、ぬ」は四段別格に似、たり」は存在動詞に似たれば、共に原形より」とにもに接す。

水まさり、淺きせしらずなりぬとも天のとわたる舟はなしやは。

徒に身はなしつとも玉の枝をたをらで更にかへらざらまし。

花薄穂にいでたりとかひやなからむ。

回想の複語尾はこの種の用法なし。

推量の複語尾は「べし」の外この種の用法に立つことなし。

行くべくとも行かるまじ。

非現實性の複語尾中この種の用法に立つことをうべきものは「ずのみなり、而、そは原形より」とにもに接す。

花の色は霞にこめてみせずとも香をだにぬすめ春の山風

確定條件は皆已然形よりす。而、順續條件は「ば」にて示し、戻續條件は「ど」どもにて示すなり。

順續確定條件の用例

形容詞

これ人多ければ業もまた盛なるによるなり。

面白ければそのよし物にかきつく。

形式形容詞は已然形を有せず故にこの用法なし。

動詞

曉より雨ふれば同じ所に泊れり。

月を見れば心澄む。

かみなびの三室の山を夜行けば錦たちきる心ちこそすれ。

汐みてば上へあがり潮ひればしたがひて下るなり。
年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし。

形式動詞

夏の夜のふすかとすれば時鳥たゞ一こゑにあくるしのゝめ。

存在動詞

生あれば則死あり。

形容動詞

佛のかずも多かれば年に光やちよもさすらむ。

説明動詞

君に捧げし命なれば何とて命を惜まむ。

いとあはれなれば車をたてゝながむるに。

一目瞭然たれば誰か疑を挟まむ。

動作存在動詞

その宮に養はれたまへれば同じ處にすませ給ひけるにや。

のべちかく家居しければ鶯のなくなるこゑはあさなあさなきく。

屬性作用の複語尾

おほやけにこの由を申さすれば……………

車をよせさすれば……………

人をして見せしむれば果して伯玉なりけり。

確述の複語尾

河霧の麓をこめて立ちぬれば空にぞ秋の山は見えける。

折りつれば袖こそにはへ梅花。

人は皆歸りたればわれもかへりぬ。

回想の複語尾

もろこしも夢にみしかばちかゝりき。

高時を始として多くの一族皆自滅してければ鎌倉又平ぎぬ。

推量の複語尾にてこの種の用法をなしうるものは「べし」「めり」「まじ」にして「らむ」「らし」は有せず。

すゞろなるべければきこえまぎらはしつゝなむ。

うもれ木は中蟲はむといふめればくめちの橋は心して行け。

尼になりても殿のうちははなるまじければ云々。

(落窪物語)

非現實性思想の複語尾は「まし」「ず」のみこの種の用法をなしその他の「む」「じ」はこの用法を有せず。

汝ら龍をとらへたらましかば神落ちかゝりぬべし。

雨止まねば出で立たず。
玉みがかざれば光なし。

戻續確定条件の用例

形容詞

さほ山の柞の色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな。

形式形容詞はこの用法なし。

動詞

一錢輕しといへども貧しき人を富める人とす。

物毎にあらたまれども我ぞふりゆく。

春立てど花もにほはず。

吹く風によその紅葉は散り來れど君が常磐の影ぞのどけき。

形式動詞

卅人ばかり出で入りすれどなほ二十人ばかりたえずあり。

存在動詞

かるかやのみだれてあれどあしけくもなし。

あれどもなきが如くす。

説明動詞

あやしき下蔭なれども聖人の誠にかなへり。

明月候々たれども時ありて浮雲之を掩ふ。

形容動詞

忘れ難く口惜しき事多かれどえつくさず。

動作存在動詞

櫻花かめにさせれどうつろひにけり。

しつべき人も交れどこれをのみいたがり物をのみくひて夜ふけぬ。

屬性の作用を助くる複語尾

かなしうあはれにおほさるれどけしきにも出したまはず。

人にほめらるれどもをこらす。

人どもいたして求めさすれどうせにけり。

度々攻撃せしむれども未効を奏せず。

確述の複語尾

雪かとぞよそに見つれど櫻花折りては似たる色なかりけり。

我が待たぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人は音信もせず。

空はよく晴れたれど路は尙ほ悪し。

回想の複語尾

此文旨なりしかども道理は一に歸するなり。かへしは上手なればよかりけめどえきかねばかゝす。

こと人々のもありけれどさかしきもなかるべし。

推量の複語尾にては「べし」「めり」「らむ」「まじ」にこの用法ありて「らし」にこの用法なし。

過失とはいふべけれど罪惡にはあらじ。

わするまじきさまのみかたらふめれど。

自らはいみじとおもふらめどいと口惜し。

おのが親の上をかく申すまじけれど。

非現實性思想の複語尾にては「む」「す」にこの用法ありて「じ」にこの用法なし。

花の木にあらざらめどもさきにけり。

古にありきあらずは知らねども千歳のためし君にはじめむ。

事跡は同じからざれども道理は一に歸するなり。

(三) 副詞の用法

副詞が文中に用ゐらるゝときは主として從屬的成分として用ゐらるゝものなるが、その用法を検すれば、大體に於いて四の差別を認む。一は連體語としてのもの、二は賓語としてのもの、三は修飾語としてのもの、四は結合素としてのものなり。こ

の故に三項に分ちてのぶべし。

一 連體語たる副詞

連體語たりうべき副詞は主として情態副詞にしてしかも慣例あるものに限られて、ひろく之を應用すること難し。すべてこの時は「の」といふ助詞にて助けらる。

かりそめのかくれがとはたみゆれば。

(源 夕 顔)

おほろげの願によりてにやあらむ。

(土 佐 日記)

おほかたの人がらまめやかに。

(源 乙 女)

やがてのわかれ。

父子にすべての財産を譲る。

かねての願。にはかの事。

もつとも。の詞。

程度の副詞にても稀にはかく用ゐらるゝことあり。

たゞの人。にみえず。

(宇、吹上、下)

感應副詞にても又かくなれるものありとみゆ。されどそは情態副詞として連體語となれるものなり。

あはれの鳥といはぬ日ぞなき。

さて又かく用ゐらるゝものは副助詞「ばかり」「まで」を伴ひてあらはるゝことあり。

り。
かくばかりの。しるしとあるなにかしをしらすしてや。
さまでの事もなし。

(源 少女)

陳述副詞も亦時として連體語たることあり。

必ずの後。

若しかの場合。

但これらは用例甚狭し。

二 賓語としての副詞

賓語たることをうべき副詞は情態副詞のみなり。

形式形容詞の賓語たるをうべきものは「かく」「さ」などなり。これは「の」助詞の助けによりてはじめて用をなす。

かくの如きことは再あるまじ。
さの如き非常のことのさふらはんをば。

形式動詞の賓語となれるものは上の「かく」「さ」及び大抵の情態副詞は用ゐらるゝなり。
そへにととすればかゝりかくすればあないひしらすあふささるさに。
させる事もなし。

なにするぞ。

いかにすればか。

靜かにせよ。

沈黙考せよ、その實相を詳にすることを得む。

泰然として驚かず。

これらは又副助詞を伴ふことあり。

靜かにだにせよ。

かくさへしたれば。

更に又係助詞を伴ふことあり。

かしこにていかにもすべかりしものを。

いかゞはせむ。

かくこそはせめ。

昔の人はさやしたりし。

さなせそ。

説明動詞「なり」の賓語となるものは即「にて」活動を起しうべき副詞すべてなり。
のたまふ所實にもつともなり。
余がみしものも亦しかなりき。

たえずあてにうつくしげなり。
なりたかしなりやまむはなはだひざうなり。
健全なる精神は健全なる身體にやどる。
かの少年は性質伶俐にして舉動活潑なり。
又かすかにていうなる文字あり。
海は昨日よりも静かなり。

(長明、無名抄)

八幡の臨時の祭の名残こそいとつれくなれ。
説明動詞「たり」の賓語たりうべきものは「と」にて活動を起しうべき副詞なれど漢語のものに多し。

富士山は皚々たる白雪を戴く。

轟然たる汽車の音。

凜乎たるその意氣。

神色自若たり。

月影婆娑たり。

これらにつきてのくはしきことは第三章第二形式用言の條につきたり。三五二頁—三五六頁を見よ。

三 修飾語としての副詞

情態副詞はすべて用言の屬性の修飾語として用ゐらる。

あゝ諸子は既にことの意を悟りたらむ。

何はさておきまづ學問を心がぐるを要す。

父は醫を業としかたはら商業を營みたり。

これまた都會の人の美む樂なり。

胸中おのづから閑日月あらむ。

柿の實もおひおひ赤くなる。

谷は田にて概ね細き流あり。

棒はぼたりぼたり落ち落ちて地も紅なり。

北風飄々鬢を吹きステッキ持つ手ががまむとす。

雪なほ融けず。

書簡文は特に簡潔を以て主とすべし。

煙の悠々と天へ上り行くをみるとに心すなはちたのしむ。

重盛が申し狀を具にきこしめされよ。

御聲ほがらかによませたまふ。

この類の修飾語たるものは其の對當の用言が述語の地位に立てる時は、勿論連體語たる時にも準體言たる時にも同じく修飾するものなり。

みだりにこの内に入ることを禁ず。
そよそよと吹きくる風こゝちよし。

静に眠れる子は神の如し。

かく珍しき事は未だ曾てあらざりき。

又情態副詞が賓語たる用言に對しても修飾語たることあり。

四隣俄かに騒然たり。

程度の副詞も亦用言の修飾語として用ゐらるゝなり。

漁業を以て生活する者頗る多し。

水いと深し。

この山は甚たかし。

心やゝ易し。

かくてその用言が述語たる時は勿論連體語たる場合にもそれを修飾することあり。

是真の最長する所は蒔繪にあり。

甚狭き路。

やゝ高き丘。

又連用格に立てる時にも亦修飾することあり。

柿の實も甚赤くなれり。

虎は印度に最多く棲める猛獸なり。

義經最もよく戦ひぬ。

鐘の音甚だ遠くきこゆ。

又準體言たる時にも修飾するなり。

最しきは櫻の花なり。

程度の副詞は情態副詞の意義をも修飾するに用ゐらる。而その時は賓語として用ゐらるゝ場合に用ゐらるゝは勿論にして、その全用言が述語たる時も

松もまた甚だ稀なり。

これを全國の上より觀ればその利害甚だ大なり。

威風頗る凜然たり。

かたちいと清げなり。

連體語たる場合にも

その最必要なるものを意志となす。

薩摩大隅日向は頗る暖なる國なり。

いと穩かなる景色なり。

甚漠然たる返答なり。

準體言たる時にも用ゐらる。

最大切なるはこれなり。

いと明らかなるはこの事なり。

さて又その情態副詞が修飾語たる時にも之を修飾するなり。

浅間山いと遙かに見ゆ。

春の雨は甚静かにふれり。

いとしとやかにふるまふ。

やゝしばし考ふ。

その情態副詞が連體語たる時にも亦之を修飾することあり。

たゞしばしの旅。

いとこまごまの御物語。

その他程度副詞は名詞が連體語たる場合にも修飾すること稀にあり。

唯半日の路ぞかし。

又數詞に對して之を修飾することあり。

汝たゞひとりうたふべし。

陳述副詞は常に述語たるものを修飾するものにしてその述語が如何なる語に
てなれるかと問ふものにあらず。而その終結の用法に立てるものを修飾すること
あり。

あにまた偉ならずや。

げに品性は何者よりも必要なりといふべし。

蓋しこれ實に最難事ならむ。

世人悉く之を譽むるも必ず察すべし。

さらに悲しめる色なし。

すぎたるはなほ及ばざるが如し。

前提の用法に立てるものを修飾することあり。

もし假睡せば夢もまた縁ならむ。

蓋し天氣清朗ならば眺望も亦可ならむ。

たとひうれへ侍りとも何のくいかはべらん。

接續副詞も亦修飾語たることあり。この時には句又は文全體の修飾語としてそ
が先頭にあり、即獨立の文の上にあることあり。

然れども余は一々之を駁する愚をなさず。

またかゝる心うき事も侍りき。

さらばその宮仕へ人なり。

彼れは名門の出なり。されどその行動頗る平民的なり。

傍聽者は袴を穿つべし。但し婦人はこの限にあらず。

又複文中の句の上にあることもあり。

山を越え又水を渡る。

書をよみかつ字を習ふ。

よのつねの人はあやまちて後改め難きになやみ、又はさすがに人目を耻づるによりておしかくす。

感應副詞も亦文又は句の修飾語としてその上にあるものなり。

あらおもしろの歌や。

あはや舟覆らむとしぬ。

あはれ今年の秋もいぬめり。

いざあすは故郷へかへらむ。

いで目にものみせくれむ。

いざもろともに出立たむ。

やよやまで山時鳥ことづてむ。

感應副詞は又呼格の語に對しての修飾語たることあり。

あはれ月こよひの月のさやけさよ。

あつばれ敵よにがすな。

いで汝佐野にて申しよな。

やよ子供たはわざなせそ。

いざ櫻われもちりなむ。

やをれ俊成よ。

四 結合素としての副詞

上にあげし接續副詞は意義上連絡ある二の文又は句を媒介せるものなれど、下の句の修飾語たるものなるが、茲に又接續副詞が語と語との結合の用に供せらるゝことあり。

かゝる結合は二様にあらはるゝなり。一は屬性の結合をなすもの、一は實體の結合をなすものなり。

一、屬性の結合をなせるもの。

かつ、また、はた、あるひは、

我はかつ讀みかつかく。

あるひはよみあるひはかく。

不義にしてとみ且つ貴きは我に於いて浮雲の如し。

静にはた嚴かにのりたまふ。

山又山をめぐる。(こは第一部にいひし事ある如く山をめぐり又山をめぐる也。)

二、實體の結合をなせるもの。

すなはち、あるひは、若くは、および、ならびに、

蜂は護身の器即螫を有す。

下駄或は足駄の儘にて昇るべからず。

雨若くは雹のふる日。

支那并に朝鮮。興福寺および春日社。

之を結合状態によりて見れば、個別、一致、合同、離接の各方式を見る。これによりて類別すれば次の如し。

個別 かつ。また。はた。

合同 および。ならびに。

離接 あるひは。若くは。

一致 すなはち。

(四) 助詞の用法

助詞は、その用ゐらるゝにあたりては常に、他の種の語の補助成分として立つものなれば、之が用法は既に上來述べし所の各種の語の用法の條に説けるもの少からず。即格助詞は主格、賓格、補格、連體格、修飾格の條に殆その大要を説きつくせり。接續助詞は又用言の用法の前提用法の條に説き了れり。この故にこの條にはそれら

以外の助詞の用法につきて特に説く所あらむとす。

一 語の集團を助くる助詞

助詞はそれ〴〵その性質によりて分類せらるべきは前章に説ける所なるが、その用法上より見れば、又種々の見地より説をなしうべし。先こゝには語の集團を示すに用ゐる助詞をあぐ。

格助詞と係助詞か間投助詞やは對等の語を結合して一團たらしむるに用ゐらるゝことあり。これを結合素となれる助詞と稱す。これらの助詞によりて結合せられたるものは一團となりて一の語たるものとして取扱はるるものにして主格ともなり、賓格ともなり、補格とも連體格ともなるものなり。而、そは一團としてそれぞれの助詞を伴ひうるなり。

主格たるもの。

嘴と足と赤し。

汝か我が行かざるべからず。

月や星や、てりかゞやけり。

賓格たるもの。これには、形式形容詞に對してのもの、と、

古の歌に今の歌をならぶれば火と水との如し。

柚や梨やの如き菓をもてきたり。

(かはこの時用ゐぬが如し。)

説明動詞なりに對してのものとなり。

商人の二大徳行は誠實と勤儉となり。

我が友となすに足るものは楠か吉田かなり。

(やはこの時用ゐぬが如し。)

補格たるもの。

蘭と梅と菊と水仙とを四君子と稱す。

君に梨か林檎かを呈せむ。

柚や梨などを持つ。

内と外とにあり。

馬か車かにのりて。

是や彼やにかこつけて。

みな人は蝶や花やといそぐ口も。

けふかあすかとまつ。

京と難波とへ行かむ。

連體格なるもの。

月と花との遊び。

簫や琵琶や笙の笛。

我が人かのけしき。

上にあげたるはみな體言の結合をなせるものなるが、又準體言をもかくの如く結合することあり。

善きかあしきかを知らず。

文よむと歌よむとより外の樂ぞなき。

書を読むと字を書くとを學ぶ。

嬉しきと悲しきとはいづれかよき。

善きか悪しきかはつかひて知るべし。

行くやくるやにていとものさわがし。

さてその意義をいへば、「と」はすべてを合一して一の混體と見るものにして、その間に何等の取捨をなすものにあらず。即一致の組織をなせるものといふべし。即

ふく風と谷の水としなかりせば。

といへば「ふく風と谷の水と」は合同して一團となり、共に「なかりせば」に關するものにして個々に述語に關係を有するものにあらず。

君も我も彼の友なり。

の如きとはことなり。この場合には「君も」と「我も」とは共に主語にして個別的に「彼の

友なりにて説明せられたるものなり。之を

君と我とは彼の友なり。

といふ時は即一團となりて説明せらるゝなり。この區別はよく心得おかざるべからず。

「か」はそのあげ示せる對象のうちの一を擇ぶべきを示せしものにしていづれか一をとるときは他はとるに及ばざることあることを示せるもの即離接的の性質を帯びたるものなり。

「や」は所謂枚舉的に並列したるものにしてその他になほ同趣のものを有すると少からず。この故に下に「など」を附すること頗多し。

柚や梨やなどを持つ。

何やかやなど思ひより給へる御氣色になむ侍らぬ。

法師ばらにかたびらやぬのやなどさままにくばりちらして。

これらは通常その結合せらるゝ各語の下に附せられてあるべきものなり。上にあげたるものは皆その例なり。然れども、之を省きても意義上混亂を生すべき恐なきときはその最後の語の下には附せざること往々あり。

君と我なほしら糸のいかにして。

雨や風なほやます。

伊勢や日向の物語。

金銀るりの簫や琵琶やさうのふえひちりきなどふきあはせたるは。

梅か桃をあたへ給へ。

一人か二人來る。

二 引用の語句を示す助詞

引用の語句が文中にあらはるゝには、それ相等の助詞を伴ひてあらはるゝものなるが、それは常に體言としての取扱を受くるものなれば主として格助詞の助をかることはいふまでもなきことなり。而、又別に副助詞、係助詞を伴ひてあらはるゝこともまたこゝに論ずるまでもなきことなり。

「進めや進めや」がきこゆ。

兵士は「集まれ」を待てり。

われは「かれが」かへりたりや「を」知らず。

「此たび」は菅家の歌なり。

祝砲をば「天地も」ひびけと打ち出したり。

「玉やしける」とおどろかれつゝ。

「訪はむしも今はうしや」の明方も待たれずはなき月の夜すがら。

直接引用の場合には上にのべし如くなれば特に述ぶる必要を認めず、こゝには間接引用のものを説くべし。

間接引用を示す主たる助詞は「と」なり。この助詞はそれが引用句を示す場合にはその
の原來の形をそのまゝとり來るを常とす。

「敵既に來れり」との報知達せり。

「寢よ」との鐘の音枕にひびく。

これらは「に」「いふ」といふ動詞の代をなさしめしものにして連體格となれるも
のなり。その主格となれるものは

「君いとわびしと思ひ給へり」とはおろかなり。

「にくし」とはよのつね。

「會者定離」とは之をいふなり。

といふが如く「と」はの形を以て示すものあり。又

「まことにあさましようけしようなり」ともよのつねなり。

「いみじ」ともよのつねなり。

の如く「と」の形を以て示すものあり。これらはみな「といふは」といふもの義にして
中間の動詞を略したるものなり。

又「とて」にて導きて種々に用ゐることあり。

かれは「暇なし」とて來ず。

「主なし」とて春なわすれそ。

これらは修飾格に立てるものにして

「あすいり給はむ」とての日は。

みづからは「わたり給はむ事あす」とてのまだつとめておはしたり。

の如きは連體格に立てるものなり。この外普通の「とて」は例をあぐるにたへず。

「翁の侍る夜しもかうやみ給ふがわびしき」とては又ねいりぬ。

「げにこそ心ばそきゆふべに侍れ」とても又なき給ひぬ。

「と」はその引用を示す性質の一として原來の句の述語をそのまゝにとり來るこ
とは既に述べし所なるが、この性質よりして古より終止形を受くる」とと稱せられ
てあり。

「あなおそろし」と驚きて。

「去年もさてくれにき」と思へば「春立つ」といふより早く物ぞこひしき。

「憂し」とみし世ぞいまはこひしき。

彼は「余は決して知らず」と答へぬ。

「人目も草もかれぬ」と思へば。

されど、こは實は終止形につけるものにあらずして、その述語の形をそのまゝに引
き來れるなれば、次の如く種々の形のものを導くなり。

「春やとき花や遅き」ときゝわかん。

「友もやくると待つ。」
 「いそがばまはれ」といふ諺あり。
 「さこそ見しか」と人に語るな。
 「人の不善を言ふことなかれ」と聖人も教へたまへり。
 「くるゝか」とみればあけぬる夏の夜を「あかず」とやなく山ほとゝぎす。
 これらを見て、その終止形に附屬するに非ずして引用をなすものなるを知るべし。
 例示をなす副詞なども亦この種の用法あり。即原來の語句をそのままひき來るものなれば、又述格に立てるものに附屬すとも見らるべし。されどそは上の「と」と同じ用法に立てるものなれば、それと同じ説明にて從來の誤を正し得べし。

古人も「歲月は流るゝ如し」などいへり。
 「さらばなたのまれそ」などむつかれば。
 「寶劍をば其人ぞ持ちたまへる」などいふをききて。
 「何事ぞ」など問ふ。
 「今あしこにもさらはむ」などとてかへりたまひぬ。
 「梨花一枝春雨をおびたり」などいひたるは。
 三 體言の位置を占むる助詞
 連體格を示す助詞「が」はその對者を略したる時に、その資格を占めて體言の位

地に立つことあり。

萬葉集に入らぬ古き歌みづからの(歌)をも奉らしめ給ひてなむ。

今の主も前の(守) 手取りかはして。 (古今集)
 古の(歌)今の(歌)古き(歌)新しき(歌)えりととのへさせたまひて。 (土佐日記)

唐の(詩)もやまとの(歌)も書きけがし。 (榮月宴)
 世の常の(者)とや君おもふらむ。 (源葵)

此の歌ある人のいはく柿本人麿が(歌)なり。 (千載集)
 そはいづこの(ぞ)ととへば。 (古今集)

さて扇の(骨)にはあらでくらげの(骨)なりときこゆれば。 (枕草子)
 誰が()をかたらひたるにか。 (落窪物語)

いづくの(もの)ならむ。 (宇國讓中)
 清僧都の()にやあらむ。 (枕草子)

これらは下なる體言を略せるものといふべけれども、次の如きものは全く體言の位置を占めてその代表たるものなり。
 人妻とわがのとふたつ思ふにはなれこし袖はあはれまされり。

即この時は「は」妻といふ語の代表にして體言の取扱を受けをるものなり。而この形のもの今日の語には用ゐらるること稀ならず。

四 呼格附屬の助詞

呼格に附屬する助詞は終助詞及間投助詞のあるものなり。

終助詞にして呼格に附屬しうべきものは「が」及「かなり」が「は」希望の對象につき「か」は感動の對象につく。

人づてならでいふよしもがな。

かこちがほなるわが涙かな。

うつろひやすきわが心かも。

間投助詞にして呼格の語に附屬しうべきものは「よ」及「や」なり。「よ」や「共に」疑問、感動、希求等の呼格の語に附屬しうるものなり。

さゝがに糸をたのめる心細さよ。

花よさけ。

苔の袂よかわきだにせよ。

ありがたの御詞や。

面白き山の姿や。

朝臣やさやうのおちばをたにひろへ。

五 主格附屬の助詞

主格は助詞をまたずしてあらはるゝものなれど、又之を特示する時は「の」が「といふ格助詞を伴ひてあらはる。」

春風の吹く。

君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。
夜はにや君がひとり行くらむ。

さて、又必要ある時は副助詞を伴ふことあり。

桁柱ばかりのこれるものあり。

潔きがなかに猶暖かげなる趣さへあり。

千古絶調の寶物を外人の手に賣却せしものすらあり。

空しく春耕し夏植うる營のみありて。

み山には松の雪だに消えなくに。

香さへなつかし、山吹の花。

次に又必要に應じて係助詞を伴ふことあり。

太刀は折れ矢はつきぬ。

春やとき花やおそき。

是ぞ正しきやうにて馬の餞したる。
其人かたちよりは心なむまさりたる。
世は定めなきこそいみじけれ。
風なふきそ。

問投助詞「し」「よ」「や」は又主語に附屬することあり。但その時は特種の状態を呈す。

「し」は主語に附屬する時は格助詞「が」の上にあることあり。

一文字をだに知らぬものしが足は十文字にふみてぞあそぶ。

君こふる涙しなくば。

賢しともいふよりは酒のみてゑひなきするしまさりたるらし。

咲きそめし宿しかはれば。

種しあれば岩にも松は生ひにけり。

「よ」が附屬する時は主格は呼格と同じき形を呈す。

その文よいづらとのたまへど。

まろがまろねよいくよへぬらむ。

「や」も亦呼格に似たる形をとる。

大原や雪ふりつみて道もなし。

あなわづらはし人の心や。

余や不敏にして未だ志を得ず。

この最後の例の如きものは今日の普通文には汎く用ゐらる。

敬意をあらはす際には主格に「に」を添ふることあり。この時は下に係助詞を附す。

君には如何思召す。

院の御前にも少し涙ぐみておはす。

六 賓格附屬の助詞

形式形容詞の賓格を示すに用ゐらるゝことある助詞は格助詞の「が」なり。「の」は名詞のものに附屬し、又代名詞のもののあるものに附屬し「が」は代名詞のあるもの及準體言のものに附屬することは既にのべたり。

月色銀の如し。

商人のよききぬ著たらむが如し。

落花蝶の舞ふが如し。

形式動詞の賓語に附屬するものは格助詞を「若くは」となること既にのべたり。

まことならぬ夢がたりをす。

かくるとすれどあらはれにけり。

人として信なくば、その可なるを知らず。

又副助詞、係助詞の之に附屬せることあり。

こけの袂よかわきだにせよ。
ひるはきて夕さりはかへりのみしければ。
白きひとへうちたれなどしあり。
こゑはして姿はみえぬ。

昔の人の袖の香ぞする。

説明動詞「なり」「たり」は格助詞「に」と「が」ありに熟合してなれるものなれば、これが賓語たるものは直に接して他の助詞を伴ふことなし。されど、まゝその「に」と「と」ありを分離してあらはすことあり。さるときには、その「に」と「と」の下に係助詞、間投助詞を伴ふことあり。

あやしう人こそ物いひさがなきものにあれ。
うぶやしなひいとおもしろうきよらにあり。
(源、夕ぎり)
(宇、國讓上)

係助詞を伴へるもの。

こはわがみたるものにはあらず。
木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり。
いと美しきものにぞありける。
あふさかは人だのめなる名にこそありけれ。

人の心も同じことにはやあらむ。

間投助詞にしてかゝる時に用ゐらるゝは「し」なり。
慕はれて來にし心の身にしあれば。

又係助詞が附屬するときには「に」を省きてありに接することあり、「と」を用ゐるべきものにはその例を見ず。

人の心こそうたてあるものはあれ。
とのもりづかさこそなほをかしきものはあれ。
故少貳のうまごはかたはなむある。
何事も生けるかぎりのためこそあれ。
(源、葵)
(枕、草子、三)
(源、少女)
(源、浮舟)

副助詞「のみ」「ばかり」「まで」などに限りて直に賓格に接して「に」の上にあることあり。従つて「なり」の上にもあるなり。

面白きのみにもあらず。
この事はばかりにはあらず。
こゝに集ひしは甲某乙某などなり。
香の清きのみならず、あたりのさまをさへゆかしき方に見するものなり。
念のため問ひしばかりなり。
こは試にいひしまでなり。

七 補格附屬の助詞

補格の語に附屬するものは「が」以外の格助詞なり。これらはそれが附屬するによりて一定の格は示さるゝなり。

聽く人感_レを催せり。

親に孝_レを盡す。

心に喜ぶ。

友と談ず。

桑田變じて海_レとなる。

北へ行く。

甲より勝れり。

朝から雨ふれり。

これらの格助詞と補格の語との間に入りうべき助詞あり。それは副助詞のあるものなり。

副助詞にしてかゝる用をなしうるものは「さへ」「すら」「のみ」「ばかり」「まで」などなり。

こは第三章五九〇頁―五九五頁に於いて例をあげたるものなり。

補格を示す格助詞の下には副助詞、係助詞、間投助詞を持來しうべし。こも亦第三章に於いて例をあげし所なれば、その足らざる所のみをこゝに説かむ。

副助詞のかゝる用法に立てるものは、五九〇頁―五九五頁に例をあげたれば、こゝに説かず。ついで檢せらるべし。

係助詞のかゝる用法に立てるものも亦六二〇頁―六二六頁に例をあげたれば、こゝに説かず。

間投助詞にしてかゝる用法に立つをうるものは「し」と「を」となり。

「し」は大抵の格助詞の下に附屬しうべし。

花を_レしみればものおもひもなし。

目を_レしつとつけたまへればおのづからそばめに見ゆ。

逢ふことの渚に_レしよる波なれば。

まつとしきかば今かへりこむ。

君と_レしたのまねば。

山から_レし尊かるらし、水から_レしさやけかるらし。

「を」は「に」「へ」との三助詞の下につくことあり。

わらはごとにては何かせむ。をんな翁に_レをしつべし。

こなたに_レをとてうちとけながら對面したまへり。

ほととぎすだにさやかに_レをなけ。

昔も今もしらすと_レをいはむ。

きたりとを見む。

とくさうぞきてかしこへをまるれ。

(蜻蛉日記)

格助詞はその用よりいへば頗重要なものにしてその誤用は全句の意義に大なる影響を與ふるものなり。而、又漫に之を省き去ることをゆるさざるものなり。かくの如く頗重要なものなるにかゝはらず、時として之を脱略して示さざることあり。但そはすべてにあらで「を」に「に」最多きなり。次に例をあぐ。

つばな(ヲ)ぬくあさちが原のつぼすみれ。

ちどりなくさほのかはらの清きせを馬(ヲ)うちわたしいつかかよはむ。

夕やみはみちたつ(ノ)し月(ヲ)まちてゆかせわかせこ其のまにも見む。

夏野(ヲ)ゆくをしかの角のつかのまも妹が心を忘れておもへや。

みくまの(ノ)浦の濱木綿百へなす心(ニ)はもへどたゞにあはぬかも。

君まつとわがこひをればわが宿のすだれ(ヲ)うごかし秋の風ふく。

まきむくの檜原(ニ)もいまたくもぬねば小松がうれゆあわゆきながる。

かきつばた(ヲ)衣にすりつけますらをのきそひがりする時は來にけり。

かく「に」「を」といふ助詞が當然あるべき場合にも存在せぬは元來「に」「を」の補語

は用言の意義よりして必然に要用なるものなれば、其の用言の上にある體言が直に接して補語たる場合には助詞なくとも大方は意義を明にしうべきが故に、語勢

を強めむが爲に省きたるなり。其の他の助詞は省かるゝこと頗稀なり。何が故かと按ずるに、これらは補語として、やゝ必要の度の輕きものなれば、之を明示する助詞を略する時は、かの重き意義の補語に誤認せらるゝことあるが故ならむ。余が上にあげしは萬葉集のみなりき。そは簡潔を主とする歌文にはかゝる語法頗多きものなれば之が實例は文より歌に多く、近代の歌より古代の歌に多きが故を以てなり。なほ文に歌に二三の例を示さむ。

志(ヲ)ふかくそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ。

梅が枝にきゐる鶯春(ニ)かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ。

袖(ヲ)ひちて掬びし水の氷れるを春たつけふの風やとくらむ。

霞立ち、木のめもはるの雪ふれば花なき里(ニ)も花ぞちりける。

(以上、古今集)

ほの(ノ)と春こそ空にきにけらし、あまのかく山(ニ)かすみたなびく。

岩間(ヲ)とちし氷もけさはとけ初めて、こけの下水道(ヲ)求むらむ。

春日野の草は緑になりにけり、若菜(ヲ)つまむと誰かしめけむ。

谷川のうち出づる波も聲(ヲ)立てつ、鶯(ヲ)さそへ春の山風。

(以上、新古今集)

からうじて女の心(ヲ)あはせてぬすみて出でにけり。

あづまのかたにすむべき所(ヲ)もとめにとてゆきけり。
みち(ヲ)しれる人もなくてまどひ行きけり。

(以上、伊勢物語)

世の中の事ども(ヲ)まつりごち給ふべくゆづりきこえ給ふ。

内の大臣まゐりたまひて、姫君(ヲ)わたしきこえ給ひて、御琴など(ヲ)ひかせ奉り給ふ。

かつ御物語(ヲ)聞え給ふ。

かのわが君のよつになるとし(ニ)ぞつくしへはいきける。

(以上、源氏物語)

康和五年正月十六日に御誕生、同じき年の八月十七日(ニ)皇太子に立たせ給ふ。

鳥羽院御飾(ヲ)おろさせ給ふ。

謀叛の輩(ヲ)皆召し捕つて流罪すべき由(ヲ)宣下せらる。

基盛射向けの袖に立ちたる矢ども(ヲ)折りかけ、郎等數多(ニ)手を負はせ云々。

(以上、保元物語)

この外などといふ例示の副助詞「ども」といふ複数の接辭にて助けられたるものは殊に多く格助詞を省くなり、「など」は「に」を「の」の外又「と」といふ助詞を省略して例示たることあり。上の例にも一二見えたれどなほ少しく次に示す。

いとゞ文など(ヲ)もかよはむことのかたきなめり。

あかしの入道のためしにやならましなど(ト)いへどみないそぎたちにけり。

かゝる人をも人は思ひすて給はざりけりなど(ト)わがあながちにつらき人の

御かたちを心にかけてこひしと思ふもあぢきなしや。

御まへに御ことども(ヲ)召す。

(以上、源氏物語)

ことさらにさふらひてなど(ト)聞え給ふ。

其の外の奴ばらは勢なども候はぬ上大將など(ヲ)仰せつけらるゝ者ともおぼえ候はず。

爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ども(ヲ)從へ候ふ。

(以上、保元物語)

かく助詞の省略を事しげくいふは次なる副助詞係助詞の附屬するより生ずる誤解をふせがむとてなり。

副助詞は體言が用言の主語たり補語たるものにはいづれにも附屬しうべきものなり。かくて上の例の如く、格助詞の省略せられたる空位に代りて立つことあるが故に往々格助詞と誤認せらるゝことあるものなり。この代用、附屬の實例は第三章にあげたれば今略す。

係助詞が主語を示し又は補語を示すことは頗多き用法なれば、往々誤認せらる

ことあり。これ最注意すべきなり。

机(ヲ)は木にて作る。

一枝を折る者(ヲ)は一指を切らむ。

花の色(ヲ)はかすみにこめて見せずとも。

春日野(ヲ)は今日はなやきそ。

人はいさ心も知らず故郷(ニ)は花ぞ昔の香にほひける。

百千鳥さへづる春(ニ)は物ごとく改まれども。

君が名(ヲ)も我が名(ヲ)も立てじ。

人ひとりの御身にかへ奉りていづち(へ)もいづち(へ)もまかりうせなむにとが

あるまじ。

(源 玉 鬘)

かゝる例はあげていふべからず。これらを誤り認めて主語などいふことあるべからず。

八 連體格附屬の助詞

連體格を示すに用ゐらるゝ助詞は「の」「が」の二なり。これらは主として體言に附屬するものなり。こは既に連體語の條にのべたれば委しき事は再説かず。八六八―八八三頁を参照せられよ。

櫻の花

世の中

人の心

梅が枝

天が下

妹が詞

又特殊の關係を示す場合には「より」「から」にて連體語を示すことあるも亦既に述べたり。

仁安よりこなた二十年の榮花重盛が一睡の夢となりはてぬ。

涙より外に詞もいはず。

問投助詞の「し」「を」「や」の三は、又連體格の語に附屬することあり。而その用ゐ方は一様ならず。

「し」と「を」とは「の」といふ格助詞の上において連體格の語の附屬たることあり。

伊勢をのあま。

たれしの人か。

「や」は用法頗自由なり。すべての連體語とその對當の體言との間に入ることもあり。

近江のや鏡の山

石見のや高角山

これらは「の」の下にあるものなり。

なにはつにさくやこの花

ほととぎすなくや五月の

夕月夜さすや岡べの。

なはをなみねるやねるその。

これらは用言の連體形の下につけるものなり。

「や」は又「の」の地位を代表して連體語を示すことあり。

すがはらや伏見の里。

大原やをしほの山。

副助詞の「のみ」「ばかり」「まで」「など」の四は又「の」にて導かれて連體格に立つべき語に附屬することあり。

名のみの際。

十日ばかりの月夜に鎌倉よりぞかへらせ給ふ。

櫻ばかりの花なかりけり。

今日までの命。

月花などのながめ。

九 修飾格附屬の助詞

修飾格に立てることを示す助詞は格助詞「に」「と」の二なり。この二は體言その他につきて修飾格に立てることを示すに用ゐらる。又「まゝ」のにて修飾格を示すことあるは既にのべし所なり。

體言、用言等が熟語として副詞の如くなるには「に」「と」を附せしむること多きは

本章の初七五五―七五八頁に述べし所なれば、今こゝに説かず。

情態副詞が活動をなすにも「に」「と」の助をまつことも既に八九〇―八九三頁に述べたれば、今再之をとかず。

形式形容詞の連用形ものを修飾格に立たしむる時にはそのまゝ用ゐることもある。更に「に」助詞を附せしむることあり。

思ひの如くにもものたまふかな。

本の如くにかへりたまへ。

犬は疾風の如くに走れり。

高浪山の如くによせ來る。

副助詞「まで」「ばかり」「など」の三はそが附屬するによりて、その上なる語をば修飾格に立たしむることあり。

秋風膚寒きまでになりぬ。

花と見るまで雪ぞふりける。

何主その男が尻鼻血あゆばかり必ず蹴たまへ。

貴き賤しきなどさまゞにて。

修飾格に立てる語は、又副助詞、係助詞、間投助詞を伴ひうるなり。されど、すべての語がすべての助詞を伴ひうるものにはあらず。

副助詞は情態を示す修飾語には附屬しうべし。その他のものには附屬しえず。
ゆふだゝみ手にとり持ちてかくだにも我はこひなむきみにあはじかも。

(萬葉集)

とけてすらぬる程もなき五月雨をねさめ勝にてあかす頃哉。

(會丹集)

かくのみにありけるものをはぎが花さきてありやととひし君はも。

かくばかりへがたく見ゆる世中にうらやましくもすめる月哉。

誠にさまで思ふ事はあらしなれどやがてこれより亂るゝはしともなり云々。

(神皇正統記)

よそにのみまつははかなきすみの江のゆきてさへこそみまくほしけれ。

(後撰集)

係助詞は情態の修飾語に附屬することあり。

おろそかには思ひ奉らじ。

あだにも袖をふくあらしかな。

花も散りたる後はうたてぞみゆる。

さぞな木の間の月は淋しき。

さこそみしかと人にかたるな。

さやはわびしさうきめをもみし。

いたくななきそ。

又程度の修飾語に附屬することあり。

かなしさはいとゞぞまさる。

いとほつらくおぼゆれどかへりごとはせんとなす。

みかどの御位はいともかしこし。

いとなむくちをしき。

ちよもいとこそはるけかりけれ。

陳述の修飾語にも附屬することあり。

げにこそ國の寶なれ。

えもいはず。

えこそみわかね。

いかでかはさることあらむ。

ゆめな忘れそよ。

けだしやなきし。

えぞしらぬ。

もしもさる事ありやと思へども。

間投助詞にして修飾語に附屬しうるものは「よ」「し」「や」をすべてなれど、各その附屬の方法に差あり。

「よ」は應答の修飾語に附屬することあり。

いざよ母諸共にと首をいだきてさそひしを。

「や」も亦感動の修飾語と應答の修飾語とに附屬することあり。

感動の修飾語に附屬する例。

あはれや白旗高く立て先こそ降れ操江號。

あなやとばかり驚きて。

すはや敵こそよせきたれ。

應答の修飾語に附屬せる例。

いざや行かなむ。

やよやまた山時鳥ことつてむ。

いでやこの世に生れては願はしかるべき事こそ多かめれ。

淵瀬ともいさやしら浪たちさわぐ。

いなやおもはじ思ふかひなし。

「し」は情態の修飾語に附屬せる例あり。

かくしこそ春の初はうれしけれ。

なにしかも人めつゝみのせきとむらむ。
なほししのばゆ。

陳述の修飾語に附屬せる例あり。

うべしこそ君がみけしと奉りけれ。

必ずしも然らざらむ。

而これらは係助詞の附屬せる場合にはその上に入りて用ゐらるゝを普通とす。

かくしこそ千年をかねてたのしきをつめ。

必ずしも然らざらむ。

世に道しもこそはあれ。

舟をしぞ思ふ。

秋もいつしかすぎ去りぬ。

間投助詞をも亦時として修飾格の語の下に附せらるゝことあり。

君があたりみつゝをゆかむ。

またさやうにを人しれす思ひおきたまへ。

のどかにをとなくさめたまふ。

一〇 述格附屬の助詞

述格附屬の助詞は係助詞と終助詞と間投助詞となり。

係助詞はすべて述格に立てる語の上において之に影響を與ふるものなれど、その關係は第二部に譲りてこゝにはその終止に用ゐられたるものにつきてのみいふべし。

それらの助詞の述格に附屬する状態は先之を二大別すべし。一はこれによりて述格が完成をなすもの、二は既に成立せる述格に附屬するものなり。

第一の、これが附屬するによりて述格の完成するものには又二様の別あり。一は自己が述格を代表するもの、二は述格の語に附屬するものなり。

自己が述格を代表するものは直に賓格の語に接するものなり。かくの如き用をなすものは係助詞にては「ぞ」「か」終助詞の「かし」間投助詞にては「よ」「な」なり。

係助詞「ぞ」は直に體言に接するを常とす。而、これに二の意義あり。

一は次の如く意を確にし念を押すに用ゐるものなり。

うきはこの世のならひぞ。

それはことわりの御しわざぞかし。

二は疑問を發するに用ゐらるゝなり。これにまた單に疑問をなすものと所謂反語をなすものとあり。

汝はいかなるものぞ。

れいならずいふはたれぞ。

誰か美術問題を目して閑人の閑問題となすものぞ。

係助詞「か」も亦直に體言に接して述格をなす。

春雨のふるは涙か。

まことにその人か。

このきゝつるはこれか。

終助詞「かし」は體言をうけて指定をなす時にかゝる用法あり。但例は稀なり。

これぞかの宮かし。

間投助詞「な」も亦終助詞「かし」に似たる用法あり。

かれぞむこの少將な。

間投助詞「よ」は又直に體言をうけて指定をなす時にかゝる用法あり。

此こそはよもておはしたりし鈴よ。

さゝがにの糸をたのめる心ぼそさよ。

うせたまひにし右衛門督のさしつきよ。

述格の語に附屬するものは係助詞及終助詞の「が」「か」間投助詞の「よ」「を」なり。而、その述格の語は用言なれば、その用言の如何なる活用形に附屬するかを基として説くべし。

用言の原形に附屬しうべきものは係助詞の「も」「や」「な」の三なり。

「もはすべての用言に附屬するものにあらず。即「ありの類には一切附屬せず。

みし面かげの忘れかねつも。

あまの小舟のつなでかなしも。

雲露まどひて行くへしらすも。

「やはすべての用言に附屬するものゝ如し。

涼しやと草むらごとくに立ちよれば暑さぞまさる常夏の花。

物は覺ゆや。

馬は有りや。

汝知れりや。

花は咲きたりや。

君見すや。

人は告げきや。

「なは動詞と形式動詞とには接すれど、形容詞及説明動詞の類にはすべて接せず。複語尾には間接作用のものゝ外には接せず。

あつばれ敵よにがすな。

今さらに山へかへるなほとゝぎす。

心もしらざらむ人にとりかゝりて汝あやまちすな。

牛の子にふまるな庭のかたつぶり。

此事誰にも聞えさすな。

用言の未然形に接しうべきものは係助詞の「なむなり。而この「なむは形容詞の類にはすべて接せず。

鳥もなかなむ。

苦しき冬は早くすぎなむ。

係助詞の「ぞの清音なる「そは三段活用動詞及形式動詞に對してのみ未然形に附屬す。

なこそ。 なせそ。

用言の連用形に接しうべきものは係助詞の「ぞの清音なる「そ及「こそ並びに終助詞の「がなり。

「そは上に係助詞の「なある時にのみ用ゐらるゝものにして動詞、形式動詞、存在動詞にはあれど、その他にはなし。複語尾にては間接作用のもの及確述の「てに存す。

きりくすいたくななきそ。

人にな語りそ。

さないぶかりそ。

ゆめな人にしらせ給ひそ。

さらばなたのまれそ。

物思ふわれにこゑなきかせそ。

わがおとゝ君ものなおもほしてそ。

「こそ」も動詞形式動詞存在動詞にのみ接すべきが如し。

風なふきこそ。

夢に見えこそ。

(宇、藤原の君)

「が」は形容詞及打消の複語尾「ず」の連用形のものにのみ接す。その他のものの連用形には接せず。しかも常に上にも「を」を伴ふなり。

世の中にさらぬ別のなくもがな。

いとかく朽木にはなしはてすもがな。

用言の連體形に接しうるものは係助詞にては「は」「ぞ」「か」終助詞にては「は」「か」間投助

詞にては「よ」なり。

係助詞の「は」「ぞ」「か」共にすべての用言の連體形に接す。但その意義に差異あるは

いふまでもなきとなり。

いかでかゝる事おほしめしよりけむと覺え候ふは。

遙の物語にわらはもし侍るは。

それみよまことにおはしたるは。

さるさがなき夷心を見てはいかゞはせむは。

我は日本の軍人なるぞ。

惣門は錠のさゝれて候ふぞ。

こはいづくへ行くべきぞ。

さるものはなきぞ。

それはとゞめ給ふかたみもなきか。

風の吹來るか雷の鳴るかか。

今一度だにみるまじきか。

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪の寄するか。

終助詞の「か」はすべての用言の連體形に接す。

あゝ悲しきかな。

興あるとをも承るかな。

逝く年のをしくもあるかな。

うれしくも對面したるかな。

間投助詞の「よ」も亦然り。

やみに惑ふよ。

心和ぐよ。

をしまじよ櫻ばかりの心も無し。

用言の已然形に接するものは係助詞の「や」及間投助詞の「や」のみなり。

係助詞の「や」は豫想の「む」及その形に似たる「らむ」「げむ」にのみ接して反語をなす。

われ忘れめや。

君に二心われあらめやも。

しるらめや身こそ人めをはかりの關に涙はとまらざりけり。

こひをしこひば逢はざらめやは

親なしになれなりけめや。

間投助詞の「や」は存在動詞説明動詞及其の性ある複語尾「たり」にのみ接するもの

にして感動の意を寓するなり。

津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり。

我が身をば一つ朽木になしたれや千々の春にもあへるかひなし。

雨ふれば小田のますらを暇あれや苗代水を空にまかせて。

荒磯の岩にくぐる浪なれやつれなき人にかくる心は。

用言の命令形に附屬するものは間投助詞の「よ」「や」をなり。

忘れてまた訪ひ給へよ。

花を見よ。 こなたへ來よ。

早く起きよ。

きこえ奉れよ。

文はよもみたまはじ詞にて申せよ。

あはれとだにおぼしおけよ。

朝露の思はむ所に猶さらばおぼし知れよ。

宮の御前に大殿こもれよ。

苔の袂よかわきだにせよ。

かゝれやものどもと下知す。

疾くきかせてよ。

君わたりなばかちかくしてよ。

君きけや。

わたりも舟渡せをと呼ぶ聲の至らねばかも楫の音せぬ。

とのゐ人などもさらせてを。

既に成立せる述格に附屬するものは終助詞の「かし」間投助詞の「よ」「や」なり。

「かし」用言にての普通の終止の形の下に附屬するあり。

大宅の世繼とぞいひ給へりしかしな。

翁の在らむ限はかうてもいまずかりなむかし。

誠にあはれなりかし。

(宇都保菊の宴)

(大和物語)

(源氏藤袴)

(同上夕霧)

(狭衣物語)

白き糸の染まむ事を悲み、道の岐の別れむ事を嘆く人も有りけむかし。
又命令形に接するものあり。

かざみはしりながといへかし。

ふけかし風のふかであれかし。

助詞「よ」「ぞ」にてなれる述格のものに接する例あり。

國王の仰せごとを背かばはや殺したまひてよかし。

さして評定のありしはこれぞかし。

多の人に惜まれしぞかし。

「よ」は係助詞「ぞ」にて終れるものに更に附屬す。

祈るぞよ。

あれはあらぬ人ぞよ。

ひとり月なみたまひそよ。

いと心うくつらき人の御さまにならひ給ふなよ。

われ人にみすなよ。

「や」は用言にての終止のものにも、

うれしや、たのしや。

しらすや、人をかくこひんとは。

皆人おきなどしぬや。

いとやすらかなる御ふるまひなりや。

おぼしやるかたぞなきや。

氣上りてもものぞおぼえぬや。

つかうまつりにくき宮仕にこそ侍れや。

係助詞「は」「ぞ」な終助詞「な」「間投助詞「よ」にて終れるものに更に接す。

こよなうおくまりたるはや。

いかになりたるぞや。

これははづかしき人ぞや。

みすなやみすな。

あれみせよや。

あさりするあまともがなや。

「な」も亦すべて用言にての終止の形に接し、

いつともしらぬ船出悲しな。

花は散らむな。

折々の御和歌などこそめでたく侍れな。

さる事やは候ひしな。

恨みつべしな。

さすがに遊ばしたる和歌はいづれも人の口にのらぬなく優にこそはべれな。更に係助詞「ぞ」終助詞「が」か「かし」間投助詞「よ」「や」の下に接することあり。

いでいと興ある事いふ老者たちよな。

さても嬉しくも對面したるかな。

いかでかくやひめをえてしがなみてしがな。

おぼしおきてさせ給ふやうありけむかしな。

これはなかよりゆきまさぞな。

うれしやな。

汝は平家の侍よな。

みせばやな。

一一 連用語に附屬する助詞

助詞のうちには連用語に附屬するものあり。今之を説かむ。

同格連用語にして個別的に重ねたるものはすべて助詞を伴ふことなし。されど、その一致的のものは副助詞、係助詞を伴ふことあり。又稀に間投助詞をも伴ふことあり。

副助詞を添へたるもの。

御らんじだにおくらぬおぼつかなさはいふ方なく悲しとおぼさる。

きゝだにあはせでやみぬるいぶせさよ。

あまりうれしき事はいひだにこそいでられざりけれ。

悲しくのみ思ふ。

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり。

おぼしのみみだるゝに。

夜はねぶつの聲きゝはじむるよりやがて泣きのみあかさる。

但こは「だに」のみに専ら行はるゝやうなり。

係助詞を添へたるもの。

なれはまさらぬ御けしきの心うきこと。

櫻を花かめにさしてみるにとりもあへずちりければ。

おしのごひつゝえぞかきもやりたまはぬ。

せん方しらすくるしきに臥しまろびぞなかるゝ。

ましておもひなむやらるゝ。

今やうはむげにいやしくこそなりゆくめれ。

古里の板間の風に寐ざめして谷の嵐を思ひこそやれ。

春がすみ立つをみすてゝゆく雁は花なき里に住みやならへる。

この人はみ^やわすれたまひぬらむ。
 古里の本あらこの萩いたづらに見る人無しに咲きかちるらむ。
 あすか川ゆきゝの岡の萩萩は今日ふる雨にちりかすぎなむ。
 よそへてぞみるべかりける白露の契りかおきしあさがほの花。
 思ふらむ心の程ややよいかにまた見ぬ人のきかなやまむ。
 吹きなちらしそ山おろしの風。
 立ちなへだてそ夜はの秋霧。
 打ちなころしそ。

間投助詞にては「し」をにもこの用法あり。

賤の女かあしひたくやも卯の花のさきし^かればやつれざりけり。
 初時雨ふりし^そむれば言のは色のみ増る頃とこそみれ。
 ほととぎすなきし^わたらばかくやしのばむ。

ことのねはなぞやかひなきたなばたのあかぬわかれをひきし^とめねば。
 「を」は多く形容詞の下又は複語尾「て」の下に用ゐらる。

なほうしろやすく^をおもほしたれ。

(源 寄 生)
 (源 若 菜 上)

いつ方にも人のそしり恨みなかるべく^をもてなしたまへ。

(源 檼 柱)

をりて^をゆかむ萩萩の花。

よもすがら^みて^をあかさむ。

なほかくの如き性質のものとして格助詞「と」を用ゐることあり。

木々の木の葉のちりと^まがふに。

(古 今 集)

同じ用言を重ねて疊語とするも實はこゝの性質のものなれば、又前の如く種々の助詞にて示さるゝことあり。

更にいれたに^いれずなどいへば。

(落窪物語)

云々などわらへば^みだに^ぞみぬ。

(宇 國 讓 上)

古の人ぞまさりて^なきさへ^なきし。

(萬 葉 集)

こゝろにむせび^なきのみぞなく。

(玉 葉 集)

われはものもおぼえ^ねばしりも^しられず。

「に」又「と」助詞にて示されたるものを更に副助詞、係助詞、間投助詞の助くるものあり。

泣きに^のみなきたまへば。

(源 桐 壺)

待ちに^しまたむ。

命こそ^たゆとも^たえめ。

こりともこりぬかゝるこひせじ。

一二 助詞と助詞との連結

助詞は相互に重ね用ゐらるゝことあり。而、その大要は既に第三章に述べたり。この連結の考察は本來この章に於いてなすべきものなれども、本書の如き體裁をとれるものは勢かの章に於いて論斷の考據としてこれらの大要を説かざるべからざりしなり。この故に、この章に於いてはそれらの説の不足を補ふに止むべし。

格助詞と副助詞と相上下しうることは前章の第二(四)に於いて説けり(五八九頁—五九六頁)これに於いてその形式は次の二様あり。

(一) 副助詞—格助詞

(二) 格助詞—副助詞

(一)の形式のものはすべてに通じて存せざることはかの章に述べしが如し。而、この(二)のものはそれ以下に更に副助詞を伴ふことはなし。即

* 副助詞—格助詞—副助詞

の如き形式のものは存せず。こゝにあげたる格助詞は「の」がを除きていへるものなり。

次に副助詞は相互に重ねらるゝことは五九六頁—五九七頁に述べたるが如し。即その形式は次の如し。

(三) 副助詞—副助詞

この(三)の形式のものを用例を検するにそが上にも下にも格助詞を伴へるものを見ることなし。かゝる時には大抵その格助詞の代理をもなすものゝ如し。即

* 格助詞—副助詞—副助詞

* 副助詞—副助詞—格助詞

の如き形式のものは存在せず。

格助詞の下には係助詞を附しうべし。こは第三章の第四(七)に於いて説ける所なり(六一九頁—六二六頁)その形式は次の如し。

(四) 格助詞—係助詞

さて副助詞の下にも係助詞を附しうべきとは既にいへる所なり(六二七頁—六三二頁)その形式は次の如し。

(五) 副助詞—係助詞

次に又接續助詞「ば」の下に係助詞を附しうべきことも既にいへり(六七七頁—六七八頁)その形式は次の如し。

(六) 接續助詞「ば」—係助詞

今たちかへりて(二)の形のものに係助詞を附せるものあるかを検するに存せるなり。こは(一)と(四)とを結合せる形のものにして次の如き形式をとれり。

(七) 副助詞―格助詞―係助詞

その用例次の如し。

咲きそめし宿しかはれば、菊の花色さへにこそうつろひにけれ。

(古今集)

けふばかりとぞたつもなくなる。

すさまじきのみにもあらず。

民部卿の中將などをばすませ給はずや。

(宇藤原君)

五月までには必ずきたらむ。

この事ばかりになむありける。

その人の事ばかりをこそ思ひつれ。

松杉などをばうゑ渡したり。

叔父などにも似たり。

(二)の形のものに係助詞を附せるものあるかと見るにこれも亦存在せり。こは(二)と(五)とを結合せる形のものにして次の如き形式をとれり。

(八) 格助詞―副助詞―係助詞

その用例次の如し。

憂き人の心をのみや恨むべき。

後をさへなむ思ひやりうしろみたりし。

(源 帚 木)

たゞみのをのみなむきたりける。

(大 和 物 語)

玉もをさへやあまはかづかぬ。

(後 撰 集)

心知らむ人になどこそきゝ侍りしか。

(源 紅 梅)

耳をだにこそとゞめ侍らざりつれ。

(源 橋 姫)

今日のよろこびはこなたにのみなむきこえさすべき。

(宇 沖 白 波)

又わがあやまちにのみもあらざりけり。

(源 若 菜 下)

ほだしとまでやならむ。

(狭 衣 二)

あたりよりだになありきそ。

(竹 取)

おもひくらしのねをのみぞなく。

(古 今 集)

櫻花ちるまをだにも見るべきものを。

(古 今 集)

もしほやくけふりとのみぞ見えわたりける。

(後 撰 集)

(三)の形のものに係助詞の附屬するかと見るにこれも亦あり。これ(三)と(五)とを結合せる如きものにして次の如き形をとれり。

(九) 副助詞―副助詞―係助詞

その用例次の如し。

御こしのかたびらのいろつやなどさへぞいみじき。

(枕 草 子)

ゆくさきの身のあらむ事などまでもおほしらす。
ものいはぬよものけだものだにすらもあはれなるかな親の子をおもふ。
係助詞はその同類中に於いて相重ねらるゝことも既にいへり(六六九頁―六七七頁)但こは悉くが然りといふにあらざれど、その形は次の如し。

(一〇) 係助詞―係助詞

今この(一〇)のものが、更に格助詞に附屬することあり。その時は形式次の如し。

(一一) 格助詞―係助詞―係助詞

その用例次の如し。

香をやは人のとめてきつらむ。

世の中は昔よりやはうかりけむ。

君にやはおとるべき。

あはれともや御らんずるとて。

かくてあらばものしともぞおぼす。

あはれになむぞある。

思ふ心を今よりこそは心みるべかりけれ。

いとにくげなるむすめども持ちたりともこそみ侍れ。

さらにこゝにこそはたづねきこゆべかなれ。

(枕 草 子)

(宇 國 讓 中)

(蜻 蛉 日 記)

(蜻 蛉 日 記)

(枕 草 子)

(宇 國 讓 中)

次に又(一〇)のものが、副助詞の下に接することあり。

(一二) 副助詞―係助詞―係助詞

有様も人の程もひとしくだにやはある。

文の道さへやはとしかげ女子に教へけむ。

心くるしきまでぞなむ見えける。

この度ばかりこそは見め。

いとほりめまでやはみとほしつる。

立わたるかすみのみかは山高みみゆるさくらの色もひとつを。

(源 若 菜 下)

(宇 吹 上 下)

(源 寄 生)

(源 寄 生)

(枕 草 子)

(枕 草 子)

(後 撰 集)

(古 今 六 帖)

月夜にはこぬだにもこそまつときけ。

次に又(一〇)のものが(二)の形のものに附屬することあり。

(一三) 格助詞―副助詞―係助詞―係助詞

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはんはかなき世をも現とはみす。

かりにだにやは君はこざらむ。

年くれぬとばかりこそはきかましか。

わが君をだにこそはかたみに見奉らめ。

(金 葉 集)

(源 玉 葛)

(一〇)の形のもの、(三)の形のもの及接續助詞「ば」の下に接する例を見ず。

係助詞は場合によりては三個相重なることあり。

いづぞやも花のさかりに一目みし木の本さへや秋はさびしき。

(源 總 角)

さもこそは影とむべきよならねどあとなき水にやどる月かな。

(千 載 集)

間投助詞は又他の助詞と連結することあり。

「しは多く係助詞の上につくことあり。

斯くしこそ春の初はうれしけれ。つらきは秋のをはりなりけり。

誰しかもとめて折りつる春がすみ立ちかくすらむ山の櫻を。

之をしもしのぶべくんば何をか忍ぶべからざらむ。

いつしか日もくれぬ。

今日しも都に著きたり。

青柳の糸よりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける。

人づてはさしもやはとも思ふらん。

ぬる夜しもこそ夢に見えけれ。

泣く日しぞおほき。

いましはとわびにしものを。

(古 今 集)

「しは又格助詞の「が」を除く係助詞の下に附せらるゝことあり。

花をしみればものおもひもなし。

春がすみかへる道にしたちぬとおもへば。

朝なけにみべき君としたのまねば。

人しげうなどしあらねば。

(源 浮 舟)

又格助詞副助詞の下係助詞の上にあることあり。

ちはやぶるうちのはし守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば。

(古 今 集)

戀のみしつゝねのみしぞなく。

(萬 葉 集)

から衣きるにしもこそぬれまさりけれ。

我やどをしもすぎがてになく。

たゞこゝにしもねたるこゑする。

松にとしもはかりそめけむ。

接續助詞又下に係助詞を附することあるは既にいへり。而その係助詞は「かは」の如き複合體のものも亦附せらるゝなり。

龍の首の玉を取らざりしかばなむ殿へもまゐらざりし。

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ。

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまさるらむ。
いかならむ巖のうちにすまばかは世のうき事のきこえごらむ。
いにしへも今も心のなればぞうきをもしらで年をのみふる。
さらばなたのまれそ。

以上にて助詞連結の大略を説けり。而、その他のものは既に各種の格附屬のものとして説きたるものなれば、こゝに再び説くことを止めたり。

第五 本章の概括

先にもいひし如く本章の如きものを特に設くるは、恐らくはこの著を以てはじめとなすべきものならむ。著者の研究も亦この章に於いては全く新しき組織を立てたるものなるが故に、他に準據とすべきものなく、全然著者の創案によれるものなれば、その組織の方法に於いても説明の方法に於いても改善すべき點特に多からむことを信せり。殊に、従來の如く一方に於いて語の性質の研究と語の運用の研究とを混じ、一方に於いて句の研究と語の運用の研究とを混同せるものに向つて今かくの如き組織をとらむが爲に、かれよりそれよりこの領域に屬すと認むるものを採り來りぬれど、なほ十分に精選せられたりといふべからず。殊に本著の性質論はその論定の必要よりして用法上の特徴に立ち入りて論ずる點少からねば、今、

若、こゝに新に、單に記述にのみよる文典を組織せんとせば、語の性質論の内容は、頗る減少せられて第四章に入るもの多からむ。又本章内の組織の方法にも多大の變更を試むべきに至らむと信ず。されど、草創の際事志にそはず、遺憾を感じながらも、前後の關係上そのまゝになせるもの少からず。これらは、なほ進みて改善を怠らざらむことを期す。

余はこゝに第一部即語の研究を了へたれば、之を以て思想を發表する方法の研究即句の研究にうつらむとす。

第二部 句論

第一章 句論の概説

吾人は第一部に於いて國語の分析的研究所して單語の論を述べたり。今や之が総合的研究にうつらざるべからず。この総合的研究は、即單語を如何に使用して吾人の思想を發表するかを學ぶにあり。言語によりてあらはされたる思想を文法學上に句と稱す。句につきての研究、これを句論といふ。

一 句論と他學科との區域

句論につきて研究するにあたり注意すべきはこれと修辭學及び論理學との區別なり。この二者共に文章思想を對象とするが爲に區劃明瞭ならずば時に或は混亂を來すことあるべし。

先修辭學者の所説に見よ、修辭學は人間の思想感情を言語もて有効に表白することを教ふるものなり。文法學は人間の思想感情を言語にてあらはす方法を研究するものなり。修辭學の目的は有効なり、理想なり。文法學の目的は記述なり、事實なり。修辭學はかくせば最効ありといふ。文法學は我々はかゝるさまにいふと述ぶる

なり。修辭學の目的は巧拙を論ずるなり。文法學の目的は現象の記述なり。修辭學は思想を第一對象として其と言語との關係につきて論ず。文法學は言語を第一對象として其が思想に關する所以の方法を説く。この故に其の範圍自然に異なり。文法學の議論は修辭學の根據たるべし。しかも修辭學に何の干渉をもなすべきにあらず。修辭學は文法學の上に基礎を立て、しかも一步進みたる目的を有す。しかれどもこれが爲に文法學の代用たることはあたはざるなり。この故に文法學は思想感情の言語にあらはれたるものを解剖分析して其の成分を検し、再この成分を組織して思想感情を發表する状態を研究すべし。其の成分の研究に立たば其の運用の巧拙は敢へて關係する所にあらず。文法學は言語が思想感情に應じて用ゐらるゝ現象を研究す。修辭學は言語を如何に思想感情に適切に應せしめて有効に使用すべきかを研究す。この故に文法學は言語の思想を發表せる方法の異なる場合を悉く記述すれば足れり。其の以上は問ふ所にあらざるなり。これを文法學と修辭學との差とす。従つて句論は修辭學の外に特立せるは明なりとす。

修辭學が文法學に交渉する點あるが如く、文法學殊にその句論は思想に著眼する點に於いて論理學に接近す。今この別を述べむ。論理學は人間思想運営の方法を研究す。然れどもかれは言語を對象とせずして直接に思想を對象とす。たとへ思想の作用を研究する點に於いて一致すとも文法學の關する人間の思想は常に論理

作用のみならず、感情にもあれ、欲求にもあれ、想像にもあれ、すべて言語にあらはれたる思想は皆文法學の對象となりうべし。其の範圍の廣狹既にあり。かく對象の輕重範圍の廣狹の差あるのみならず、根本概念に於いて大差あり。何ぞや。かれは正當に思惟すべき法則につきて研究す。直接に思想その者を對象として其の運営を研究す。かれの目的は規準を示すにあり。これはたゞ言語其の者を對象として思想はただその附隨として研究す。而して思想的には論理學よりも一層廣き現象につきて研究す。これの目的は規準を示すにあらで、事實を叙述するにあり。今若言語を顧みずして思想をのみ論ずるものあらば、そは文法學の外に逸し去りたるものといふべし。然れども言語は素思想に依存するものなれば、思想を度外に置きて言語の事は論じうべきにあらず。この故に文法學特に句論の目的は言語其の者を第一對象として之が如何に思想の發表を擔任するかを記述的に研究するものなり。以上述べし如くなれば、文法學に接近せる修辭論理の二學とこれとの範圍區域は互に侵すべからざるものあるなり。句論は決して越權のものにあらず。これと同時に又越權の事あるべからざるなり。然るに世には句論を以て修辭論理の學の領域に侵入せるものとして之を否定せむとするもの、又句論を以て修辭學の一分科の如く心得、一種の要求的態度を以て規準的に立論するものあり。これ皆自己の領域を忘れたるものなり。句論の冒頭に於いて最この點に注意せざるべからず。

こゝに吾人は句論の範圍を明示してこの項の終尾とせむ。

第一 句論は言語によりてあらはさるゝ思想發表の方法を論ず。

第二 句論の範圍は言語によりてあらはさるゝだけの思想發表の形式を記述するに止まる。

他學科との限界は上の如し。しかれども文法學上の二大部門即語論と句論との限界も亦顧みざるべからず。吾人は次項に之を論せむ。

二 句論と語論との限界

句論と語論との區別に就きては既に序論に於いて聊論じたり。然れども今なほ一層明瞭にすべき必要あるを以て茲に之を論せむと欲す。

從來の研究は句論は文章論と稱せらるゝこと多くしてその聲言には文章構成の法則を研究すと稱せられてありながら、語の運用をも研究せり。然れども語の運用の研究として著者が第一部に説けるが如きものはその研究はたとへ総合的なりとはいへ、いづこまでも語の研究たるを失はざるなり。こゝに於いて句論の研究と語論の研究との差異は明に區別せざるべからず。語論は吾人の思想發表の材料の研究なり。その性質論も運用論も共に材料其者を主としての研究にしてその第一對象とするものは語なり。句論も亦語を研究すれど、之を材料として見るのみにして、研究の主體とするにあらず。即語は第二位の對象にすぎずして、その主たるも

のは句又は文なり。句論は思想の發表方法として語を如何に取扱ふかといふことを研究すれども個々の語の性質及その關係は直接に對象とせるにあらず。かく思想發表の方法を研究するが句論なれば、語論とは根本に差あるを見るべきなり。今なほ之を思想の方面より少しく委しくいはむ。語論に於いて論ずる單語なるものは之に順應する思想を顧みれば、思想を放散的にして分解したる觀念要素を個々にあらはすものと見ざるべからず。一旦句論の主題として文を組立つるものとして見れば、この個々の觀念要素は直に或統一ある一思想として不可分解的のものとなる。かくの如くなれば、この方面より見れば語論の對象は個々の分解、又は要素の分解、或は文の材料の研究と稱すべし。句論はこの個々のものに對して統一的なり。要素の分解に對して結合なり。材料的なるに對して構成的なり。この故に又語論は遠心的なり。句論は求心的なりとす。

かくの如くなれば、いづれの點より見ても二者は同一のものにあらず。吾人は今反對論者の説を駁すべき必要を認めず。次にこの差別を對照して一覽に便ならしめむと欲す。

語論	句論
分解的……………	總合的……………
靜止的……………	活動的研究の態度
本性的……………	關係的……………

個々の……………	統一的……………
分解的……………	結合的……………
材料的……………	構成的……………
遠心的……………	求心的……………

思想との關係よりの見地

かくの如く區別あるが上になほ著しく相違せる要點あり。そは他ならず。句論の甚深く心理的なるにあり。元來語論とても語が觀念の符號たる以上は心理的なることは論なしと雖も個々の語は觀念の代表にすぎず。たとへばこゝに文ありといへども、吾人は語論に於いて論ずるときと句論に於いて論ずるときとは其の趣を異にす。例へば

松は常磐木なり。

といふ文ありとせむに、之を句論的にも語論的にも説明することを得べし。而してその區別那邊に存するか。これ實に語論と句論との異同を明にするに最良の機會なり。吾人が之を一の句なりと思惟する間は音節文字單語の數の多少に拘泥せずして之を一個體なりと考ふるなり。これ吾人が統一的なりといひし所以なり。かく統一的なるが故にこの單語は句の要素たるのみにして更に語としての本性等は思惟に上らざるなり。しかし一旦之が意識の注點を放散せしめむか、こゝにこれらは唯聲音の集合文字の集合觀念の集合にすぎず。實に語論の第一歩はかく句と

なれるものを意識の注點を放散せしめて之を死物となし、これが靜止的狀態を解剖學的に分解して其の本性を研究したるものなり。而して語論に於いて死物視して研究したるものも句論にて取扱ふときは直に之を活動せしめて以て思想を發表する方法として觀察す。一の語にても文として見らるゝこと往々あるはこれが爲なり。かく活動的なるは何に因するかといふに實に意識の注點が之に寓せられたるによりてなり。語論と句論との最主要なるは意識の注點の放散と活動との間にありといふべし。

かく句論は意識の注點の語に寓せられたる場合の研究なれば自然に意識と密接なる關係を有す。この故に語論よりも一層深く心理的現象に關係を有するは明なり。吾人が序論に語論には論理學の關係する所大にして句論には心理學を參酌せざるべからざることを述べしは決して偶然の言にあらざるなり。

三 句論の研究の基礎

句論の語論と觀察點を異にせるは以上述べし所なり。こゝに吾人は句論の研究の基礎が那邊に存するかを探究せざるべからず。

我が國古來の文法書所謂文章法を研究せるもの殆なきなり。唯係結といふ名目の下に於いて説けるもの其他二三の零細なる研究あるのみ。かくて文章法を云爲するに至りしは實に西洋文典に模倣せしより始められり。

現今國文法を以て旗幟を立つるもの頗多しといへども之を括約して大槻岡田岡澤の三氏を以てすべての代表とせむ。幾多の諸家其の根柢に遡ればこの三氏に歸せざるもの蓋稀なり。大槻岡田二氏の所謂文章に關する論議は稍窺ふことをうべしといへども、岡澤氏のは僅に斷片にすぎず。かの草野清民氏の説の斷片載せて氏が文法書にあり。吾人が所謂文章法に關しての著書として、知る所の者この他唯二三あるのみ。

今これらの書につきて所謂文章法の研究の基とするものは何なるかを知らむと欲す。大槻氏は曰はく

文章篇ハ個々ノ單語ノ相關スルヨリ起ル法則及ビ其法則ニ據リテ文又ハ句ヲ構成スル法則ヲ講ズ。

今吾人の見る所によれば、語と語との關係といふにとりて、これを單純に語の上につきて見る所のものはこれ即吾人が第一部の第四章に説けるものにしてこゝにいふべきものにあらず。何となれば、句論は思想發表の方法として、意識の注點を寓せられてあるものゝ研究なれば、之が思想との關係を離れての語の關係といふものは、句論の範圍に來るべきものにあらざるなり。この故に、句論に於いて研究すべきものは必然にその文又は句を構成する法則ならざるべからざるなり。而、その他の諸家殆皆かくいへるものにあらざるはなし。こゝに於て余は、その文又は句とい

へるものを研究せざるべからず。

こゝに吾人は文といふものゝ研究にうつるべし。吾人は又この研究に關してその確たる意識を知ることを得ざりき。大槻氏は曰はく

言語ヲ書ニ筆シテ其思想ノ完結シタルヲ「文」又ハ「文章」トイヒ、未ダ完結セザルヲ「句」トイフ。

と「思想ノ完結シタル」ものとは如何なる意義なるか。吾人は或は修辭學上の文をもいふことをうべし。思想の完結といふことは更に文法上の文の定義としての價値なきなり。次に岡田氏は如何といふに、

文は完全なる思想を言語にあらはしたるものを更に文字にうつし出したるものなり。即ち文は或規定の下に或る詞の連続したるものにして完全なる思想をあらはせるものなり。されば詞はいかによく連続したりとも完全なる意義をあらはさざるものは文にあらず。意義や、完全にあらはれたりとも、詞の連続上に不都合なるところあらばこれまた文にはあらざるべきなり。

と詳細なる説明といふべし。しかも歸する所は「完全なる思想をあらはせるもの」といふに止まれり。大槻氏のより詳細にはあれど根柢は一なり。吾人はなほ完全なる思想といふことにつきての説明を請はざるべからず。要するに氏等の説は或は未だ文とならざる單語の集まりとの區別をばなしうべし。然れども修辭學上にいふ

文章とは區別しえざるなり。まさかには氏等とても英語の *Sentence* 獨語の *phrases* の意義以上をさすものにもあらざるべし。然りとすれば氏等の説の完全なるものにあらざることを論なし。

こゝに吾人は岡澤氏の説に徴せむ。

人ハ皆口モテ種々雜多ナル思想ヲイヒアラハス。之ヲ「コトバ」スナハチ言語トイフ。(中略)コノ言語ノ文字ニヨリテ記サレタルモノハ「文」又ハ「文章」ト稱セラレ(中略)サテ人ノイヒアラハスベキ思想ハ單一ナルコトモアリ。連續シテ起レル數多ノ思想ナルコトモアリ。其ノ單一ナルモ數多ナルモ「コトバ」又ハ言語ト稱スルコトハ一ナリ。サレバ文字ニ記シタルモノニアリテモ亦其ノ思想ノ單一ナルト數多ナルトニ係ラズ。同ジク文或ハ文章ト稱ヘテ差別スルコトナシ。タゞ數多ナル思想ノ集レル方ヲ「一篇ノ文」或ハ「一篇ノ文章」トイヒテ單一ナル方ト別ツコトヲ得ルノミ、カクテコノ一篇ノ文章ハ單一ナル思想ノ或ル主意ニヨリテ集合シテ成リタル一大思想ヲアラハスモノナレバ「一篇ノ文」ハ「一篇ノ文章」ト稱スルモノナルコトヲ知ルベシ。文典ハ實ニコノ一篇ノ文ヲ組織スル單一ナル文ニツキテ其ノ典則ヲ説クモノニシテ「一篇ノ文」ニツキテ教フルモノニアラザルガ故ニ本書ニ文トイフモノハ常ニ單一ナル文スナハチ單一ナル思想ノ文ニアリ。サレド時アリテ單一ナル文中實ハ數多ノ思想ヲ含有シ、之ヲ別テ「二ツ以上

ノ文ヲ成スモノアリ。コレ其ノ思想ドモノ關係ニ特別ナル連絡アリテ相需チテ單一ナル文章ヲ成スヲ便トスルニヨリテ特ニ合成シタルモノナリ。

氏の説明は大槻氏岡田氏の説にまされり、氏の説の進歩せる點は修辭學上の所謂文章に混同せしめざらむをつとめし點なり。しかもなほ吾人は氏の所謂單一なる思想につきて曖昧なる感念を抱かざるを得ず。

こゝに於いて吾人は更に草野氏の所説にたゞさむ。

文又ハ文章ト稱スルモノハ必二個以上ノ詞ノ集合シタル者ニテ意義完全ナル説話ノ體ヲ具ヘ且其示ス所ノ意ニ從ツテ語調ノ圓滿ニ完結セル者ヲイフ。

文又ハ文章トイフ詞ハ通常廣キ意義ニ用キ其短キハ「花咲ク」ノ如キ最簡單ナル者ヨリ長キハ此等ノ諸種ノ短文ノ相聚マリテ成セル數千言、數千萬言ノ長篇ニ至ルマデ、總テ之ヲ文章ト稱ス。然レモ文法ニテハ上ニ陳ベタル如ク一語ヲ起シテヨリ其ノ語調意義共ニ終止スルマデヲ一文トイフ。

氏も亦修辭學上の文との區別を示さむと努められたるが如し。しかして其の説の要は「意義完全ナル説話ノ體ヲ具ヘ語調ノ圓滿ニ完結セル者」をいふにあり。然れども意義完全なる説話の體とは如何なるものをさすか。そは觀者の所見によりて如何様にも觀らるべく、又語調の圓滿に完結せることは文の定義にあらずして結果の記載なり、吾人の語調を完結せしむるは文の完結せることを示さむとするによ

りて來れるものにして文の本義を離れては完結せりや否やを定むるは容易の事にあらず。しかして氏は遂にこの本義を示さざりしなり。

吾人はこゝに至りて殆文その者の本性を明確に知了することを得ず。去つて英文典の所説に求めむか。スキート氏は曰はく。

A sentence is a word or group of words capable of expressing a complete thought or meaning.

A sentence is, therefore, 'a word or group of words whose form makes us expect it to express a full meaning.' We say 'expect' because it depends on the content whether or not any one sentence expresses a complete meaning. Thus such a sentence as *he is coming*, though complete in form, shows on the face of it that it is incomplete in meaning, for *he* means 'some one who has been mentioned before,' and makes us ask 'who is he?' Nevertheless *he is coming* is a complete sentence because it has the same form as *John is coming*, *I am coming*, etc., which are complete in meaning as well as form—as far, at least, as any one sentence can be said to be complete.

これを以て見れば我文法家の所説の英文典などに胚胎せることを見るに足る。ヘイン氏も亦

Any complete meaning is a sentence.

といへり。なるにても complete thought or meaning とは如何なるものぞ。吾人はなほ從來維持し來れる疑團を解すること能はざるなり。こゝに去つて獨逸文典の説く所

を見む。ハイゼ氏はく。

Ein Satz ist ein ausgesprochener Gedanke oder eine Aussage von etwas Gedachten.

Eine solche Aussage entsteht, indem der Verstand die Einheit einer Wahrnehmung in ihre

Bestandteile zerlegt und diese wiederum zu der Einheit eines Gedankens verknüpft.

こゝに於いても亦 ein ausgesprochener Gedanke oder eine Aussage von etwas Gedachten. と稱するものゝ本義は明瞭ならざるなり。

おもふに内外の文法書皆單文複文等の別を説く而して、句論の研究の基點は實にこの單文に存すべきが故に吾人は先この單文をとりて研究の對象として以て自家の立脚地を明にせむ。

しかれども余はなほこゝに一の問題を提供すべき責あるを感ず。何ぞや。從來の文法家が單文合文重文複文などいへる文といふ術語の定義これなり。

抑文といふ語は所謂 Sentence 又は Satz の譯語にあてられたるものなれど、又一方に於いてかの所謂修辭上の文或は一篇の文章といふ義をも有す。この後の意義のものは英語にていはゞ Composition にあたるものにして獨逸語の所謂 Aufsatz にあたるものをもさすなり。この故に吾人は往々この二者の區別につきて迷惑を感ずること少からず。吾人も亦文といふをば用ゐるべし。しかもその用法に於いては慎重なる討議を歴たる上ならざるべからず。

こゝに亦句といふ語あり。この語は從來の文法家は英語の Phrase の意にも Clause の意にも用ゐたり。然れども Phrase は數語をつらねてある觀念をあらはせるのみにして所謂思想の完結せるものをあらはすものにあらず。この故にこは連語又は叢語と譯すべき性質のものたるなり。

さて句といふ語の意義を検するに、玉篇には

止也言語章句也

といひ、類篇には

詞絶也

といひ、詩の疏關雝の條に

句古謂之言。秦漢以來衆儒各爲訓詁。乃有句稱。句必聯字而言。句者局也。聯字分疆

所以局言者也

といへり。これ一方よりいへば詩句の義即西洋の詩にていふ Verse の義にも用ゐらるゝものにして詩の句といふものはまさに是に似たり。我が歌謠に於いてもその一節をとりて之を句と稱するは蓋これより來れるものならむ。されどその用例は散文にもあり。散文にありて用ゐらるゝ句といふ語の意義は詩句の意義よりは遙に嚴密なり。即この際に於いては「句」とは意義の終結せる一完體をさすものとし。所謂句讀と併稱する場合の句の意義は皆然り。さればかの句讀點を論ずるもの

常にその句點は意義の終結せるものゝ下につくべきものなることをいへり。貝原益軒の點例に曰はく

語勢ステニ絶タル處ノ右ノ傍ニ小圈ヲ加フルヲ句ト云フ。語勢イマダ不絶シハラクヨミ切テ上下混雜セザラシムルヲ讀ト云々。

太宰春臺の倭讀要領に曰はく

讀書ノ法ハ先句讀ヲ明ニスベシ句讀明ナラザレバ文義通ジガタシ句讀トハ句ギリナリ語ノ絶ル處ヲ句トイフ語ハ絶ザレドモ文ノ屬ノ長キ處ハ其中ノキリテヨキ處ニテ幾處モキリテ讀ムヲ讀トイフ。

されば、この意義を以てすれば、かの *Parise* を以て句といふよりも *Clause* を以て句といふ語にあつることの遙に有理なるを知るべし。されど、なほ未遽にかくは定むべからず。

英語の *Clause* は句の意には似たれども、こは主として附屬性の句をのみ稱することとなれるものなれば、吾人の句の用例とはまたやゝ異なり。即吾人の句と稱するものは、一箇にて獨立せるものをさす慣例なればなり。而、又別にその句が上下相連ねて用ゐらるゝことあるをも承認せるは點例に

語意不絶句ノ例 論語主忠信下ニ猶有句テ語意不絶ユヘニ主トシトヨム主トストヨメハ語意絶ルナリ。

といへる又以て證とすべし。この故に我が文法に於いて *Clause* の譯語に「句」をあつることは必しも尤むべきにあらざるなり。

然れども、句といふ語は元來附屬性の句をのみさすものにあらずして獨逸文典などにいふ *Satz* の譯語に用ゐるを適當とす。 *Satz* をば單文と譯する人もあれどあたらざるなり。何となれば、獨逸文法にては所謂單文は *einfache Satz* といひ、所謂複合文は *zusammengesetzte Satz* といへり。然れども、又一方にてはその附屬的のものをも句と稱せり。即所謂附屬句と稱すべきものを *Neben Satz* と稱し、之に *Subjektivsatz*, *prädikativsatz*, *Objektivsatz*, *Attributivsatz*, *Adverbialsatz* の五種ありとせり。これをも主言文、述言文、目的文、形容文、副詞文などいふ名目を與へたれど、これらは分明に文といはるべき性質のものならずして、まさに主語句、述語句、目的句、形容句、副詞句などの意を以て命名するを適當とすべきものなり。しかるにかくの如きものを文といふは、 *Satz* をば文と譯し去れるより來るものにして、この點を以ても *Satz* が單文といふ意にあらざるを知るべし。若し、 *Satz* が單文の義ならば、 *einfache Satz* は「單一なる單文」といふべく、 *zusammengesetzte Satz* は「組立てられたる單文」といふべく、而して *Neben Satz* は附屬せる單文といふ義に解せざるべからざるなり。然れどもかゝる語は寧滑稽にして語をなさざるものなることは明なり。この故に單純に *Satz* といふ語にあてむには單文の單字を撤去せざるべからず。然るときはこゝに文といふ